岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 674 集

上泉沢（かみいずみさわ）遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

２０１７

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
（公財）岩手県文化振興事業団

上泉沢遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことの出来ない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、岩手県九戸郡野田村の三陸沿岸道路建設に関連して平成 26・27 年度に発掘調査を実施した、上泉沢遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査で本遺跡は、縄文時代に狩り場、古墳時代後期～奈良時代に集落が営まれていたことが明らかとなりました。特に古墳時代後期～末の集落は、周辺の集落を含めた広がりが確認されたことから該期沿岸部遺跡を考える上で貴重な資料を提供することができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、野田村教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成 29 年３月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　菅　野　洋　樹

例　　言

1　本報告書は、岩手県九戸郡野田村大字野田第 12 地割４－１ほかに所在する上泉沢遺跡の発掘調査成果を収録したものである。

2　今回の調査は、三陸沿岸道路建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の指導・調整のもとに、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所の委託を受け、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3　本遺跡の岩手県遺跡台帳における遺跡コードは JG60-0367、遺跡略号は KIZ-14・KIZ-15 である。

4　年度ごとの野外調査及び室内整理期間、遺跡略号、調査担当者は次の通りである。

年度	遺跡略号	区分	期間	面積	担当者
平成 26 年度	KIZ-14	野外調査	2014.08.18 ～ 09.30	1,540㎡	北田 勲・伊藤 武・佐々木あゆみ
		室内整理	2014.12.01 ～ 2015.03.31	－	伊藤 武
平成 27 年度	KIZ-15	野外調査	2015.09.01 ～ 09.17	300㎡	伊藤 武
		室内整理	2015.11.01 ～ 2016.1.31	－	伊藤 武

5　本報告書の作成は、北田･伊藤が本文原稿、北田･佐々木が遺構図化、伊藤が遺物図化を行い、各々に文責を記した。またⅠ調査に至る経過は三陸国道事務所、Ⅵ自然科学的分析は１を株式会社加速器分析研究所、２樹種同定及び３貝類同定を株式会社古環境研究所が行った。全体の編集は北田が行った。

6　業務委託は、以下の通りである。

	委託先	委託内容
1	（株）スズマ測量設計	座標原点の測量
2	東邦航空（株）	航空写真撮影
3	（株）加速器分析研究所	放射性炭素年代測定
4	（株）古環境研究所	樹種・貝類同定
5	花崗岩研究会	石器石材同定

7　本書では以下の地形図・地形分類図を使用した。

・『1/25,000 地形図陸中野田』（国土地理院）

・『1/50,000 地形図陸中野田』（国土地理院）

・『1/50,000 地形分類図陸中野田』（国土交通省・都道府県土地分類基本調査）

8　野外調査及び本報告書の作成にあたり、次の機関・方々からご指導・ご助言・ご協力をいただいた（敬称略・五十音順）。

井上雅孝（野田村教育委員会）、宇部則保（八戸市教育委員会）、鈴木博之（野田村教育委員会）

9　発掘調査資料は、全て岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

10　調査成果の一部については、平成 26・27 年度調査概報（岩埋文第 647・661 集）、現地説明会資料等に発表してきたが、本書の記載内容が優先するものである。

凡　　例

1　遺構図の用例は次の通りである（凡例図参照）。

(1) 遺構実測図の縮尺は竪穴住居跡の平面・断面図 1/60、陥し穴状遺構・土坑の平面・断面図 1/60、焼土・カマドの平面・断面図 1/30 などで表した。ただし規模の関係上これに合わないものもあるため、各図版にスケール及び縮尺を付した。

(2) 推定線は破線で表した。また、スクリーントーンを使用して遺構の状況を表した。

(3) 層位は、基本層序にローマ数字、各遺構堆積土などにアラビア数字を使用した。

(4) 土層色調観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。

2　遺物実測図の用例は次の通りである（凡例図参照）。

(1) 遺物実測図の縮尺は、縄文土器・弥生土器・土師器 1/3、石器 2/3・1/3、金属製品 1/2 等で表した。

(2) スクリーントーンを使用して、遺物の状態を表した。

3　写真図版の用例は次の通りである。

(1) 遺構写真図版については、基本的に平面及び断面写真をセットとし掲載した。

(2) 遺物写真図版については、縮尺は基本的に遺物実測図に準じている。

遺構使用トーン凡例

	焼土(弱)	K20%
	焼土(強)	K40%
	炭化物	K60%

遺物使用トーン凡例

	土師器黒色処理	K20%
	石器断面	K20%

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過…… 1

Ⅱ　遺跡の立地・環境 …… 1

1　遺 跡 の 位 置 …… 1

2　地 理 的 環 境 …… 1

（1）遺跡周辺の地形・地質 …… 1

（2）調査区の層序…… 4

3　歴 史 的 環 境 …… 4

Ⅲ　調査・整理の方法 …… 7

1　野外調査方法 …… 7

（1）調　査　方　法…… 7

（2）野外調査経過…… 7

2　整　理　方　法 …… 8

（1）遺 構 の 整 理…… 8

（2）遺 物 の 整 理…… 8

（3）遺物写真撮影…… 8

（4）整　理　経　過…… 8

3　広　報　活　動 …… 8

Ⅳ　調　査　内　容…… 9

1　概　　要…… 9

2　遺　　構…… 10

＜縄 文 時 代＞

（1）陥し穴状遺構…… 10

＜古　　代＞

（1）竪 穴 住 居 跡…… 26

（2）土　　坑 …… 37

（3）焼　　土 …… 40

3　遺　　物…… 42

（1）縄　文　土　器…… 42

（2）弥　生　土　器…… 42

（3）石　　器 …… 43

（4）土　師　器 …… 44

（5）金　属　製　品…… 46

（6）貝　　類 …… 46

（7）炭　化　物 …… 46

Ⅴ　自然科学的分析 …… 50

1　放射性炭素年代測定（AMS 測定） …… 50
2　樹　種　同　定 …… 53
3　貝　類　同　定 …… 56

Ⅵ　総　　括 …… 57

1　縄　文　時　代 …… 57
2　古　　代 …… 58
報 告 書 抄 録 …… 99

図 版 目 次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　地形分類図 …… 3
第３図　基本層序柱状模式図 …… 4
第４図　周辺の遺跡図 …… 6
第５図　調査全体図 …… 9
第６図　SK01～06陥し穴状遺構 …… 11
第７図　SK07～10・13・15陥し穴状遺構 …… 12
第８図　SK16・17・25・28・34・49陥し穴状遺構 …… 13
第９図　SK56・57・59・62陥し穴状遺構 …… 15
第10図　SK11・12・14・18・19・21陥し穴状遺構 …… 18
第11図　SK20・22・23・26・35・38陥し穴状遺構 …… 19
第12図　SK27・36・37・42・45・47陥し穴状遺構 …… 21
第13図　SK39・41・43・44・64陥し穴状遺構 …… 23
第14図　SK50～52・55・58陥し穴状遺構、SK60土坑 …… 24
第15図　SK63・65～68陥し穴状遺構 …… 25
第16図　SI01竪穴住居跡 …… 27
第17図　SI01竪穴住居跡出土遺物 …… 27
第18図　SI02竪穴住居跡 …… 28
第19図　SI02竪穴住居跡出土遺物 …… 29
第20図　SI03竪穴住居跡 …… 30
第21図　SI03竪穴住居跡出土遺物 …… 31
第22図　SI04竪穴住居跡 …… 32
第23図　SI04竪穴住居跡出土遺物 …… 33
第24図　SI05竪穴住居跡（１） …… 34
第25図　SI05竪穴住居跡（２） …… 35
第26図　SI05竪穴住居跡出土遺物 …… 36
第27図　SI06竪穴住居跡 …… 37
第28図　SI07竪穴住居跡（１） …… 38
第29図　SI07竪穴住居跡（２） …… 39
第30図　SI07竪穴住居跡出土遺物 …… 40
第31図　SK24・29～33・46・54土坑、SF01焼土 …… 41
第32図　SK48・61土坑、SF02焼土 …… 42
第33図　SK40・53・69～72陥し穴状遺構 …… 43
第34図　SK70土坑出土遺物 …… 44
第35図　遺構外出土遺物 …… 44
第36図　時期別全体図 …… 57

表　目　次

第１表　周辺の遺跡……５
第２表　縄文・弥生土器観察表……47
第３表　土師器観察表……47
第４表　石器観察表……48
第５表　金属製品観察表……48
第６表　貝類観察表……49
第７表　炭化物観察表……49

写真図版目次

写真図版１　遺跡遠景・調査区全景……61
写真図版２　平成26・27年度調査区全景……62
写真図版３　SK01～04陥し穴状遺構　……63
写真図版４　SK05～08陥し穴状遺構　……64
写真図版５　SK09・10・13・15陥し穴状遺構　……65
写真図版６　SK16・17・25・28陥し穴状遺構　……66
写真図版７　SK34・40・45・49陥し穴状遺構　……67
写真図版８　SK56・57・59・62陥し穴状遺構　……68
写真図版９　SK69・71・72陥し穴状遺構、SK60土坑
……69
写真図版10　SK11・12・14・18陥し穴状遺構　……70
写真図版11　SK19～21・38陥し穴状遺構　……71
写真図版12　SK22・23・26・36陥し穴状遺構　……72
写真図版13　SK35・37・42陥し穴状遺構　……73
写真図版14　SK27・43・47・64陥し穴状遺構　……74
写真図版15　SK39・41・44陥し穴状遺構　……75
写真図版16　SK50・55陥し穴状遺構及び倒木痕　…76
写真図版17　SK51～53・58陥し穴状遺構　……77
写真図版18　SK63・65～68陥し穴状遺構……78
写真図版19　SI01竪穴住居跡……79
写真図版20　SI02竪穴住居跡……80
写真図版21　SI03竪穴住居跡……81
写真図版22　SI04竪穴住居跡（１）……82
写真図版23　SI04竪穴住居跡（２）……83
写真図版24　SI05竪穴住居跡（１）……84
写真図版25　SI05竪穴住居跡（２）……85
写真図版26　SI06竪穴住居跡……86
写真図版27　SI07竪穴住居跡（１）……87
写真図版28　SI07竪穴住居跡（２）……88
写真図版29　SK24・29～31土坑　……89
写真図版30　SK32・33・46土坑、SF01焼土　……90
写真図版31　SK48・54・61・70土坑　……91
写真図版32　SF02焼土、基本層序、全景　……92
写真図版33　現況、作業風景、現地公開……93
写真図版34　縄文・弥生土器及びSK70土坑・
SI02竪穴住居跡出土遺物……94
写真図版35　SI02・03竪穴住居跡出土遺物……95
写真図版36　SI03・04・05竪穴住居跡出土遺物……96
写真図版37　SI05竪穴住居跡出土遺物……97
写真図版38　SI07竪穴住居跡出土遺物……98

Ⅰ　調査に至る経過

上泉沢遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（普代～久慈）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359㎞の自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年11月19日付け国東整陸一調第852号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成24年11月27日に試掘調査を行い、平成25年1月10日付け教生第1420号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成27年4月10日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所）

Ⅱ　遺跡の立地・環境

1　遺 跡 の 位 置

上泉沢遺跡は岩手県九戸郡野田村大字野田第12地割4-1ほかに所在し、国土地理院発行50,000分の1地形図NK-54-18-4（八戸4号）「陸中野田」の図幅に含まれ、北緯40度06分02秒、東経141度48分45秒に位置する。

遺跡は、野田村北部にあり、野田小学校から南西約500ｍに位置しており、泉沢川によって形成された河岸段丘上に立地している。現況は畑地で、標高は22.0～24.5ｍである。

野田村は岩手県の北東部、九戸郡内では南東端に位置している。北～西部は久慈市、南部は下閉伊郡普代村・岩泉町に接し、東部は太平洋に面した東西約11.3㎞、南北約13.8㎞、総面積は80.83㎢ある。西部は北上高地に属し、東は海岸段丘が続く。宇部川・泉沢川・玉川・安家川などの河川が西から東へ流れ、太平洋に注ぐ。宇部川・泉沢川の下流域にわずかに平地が見られるが、８割近くを山林原野が占める。

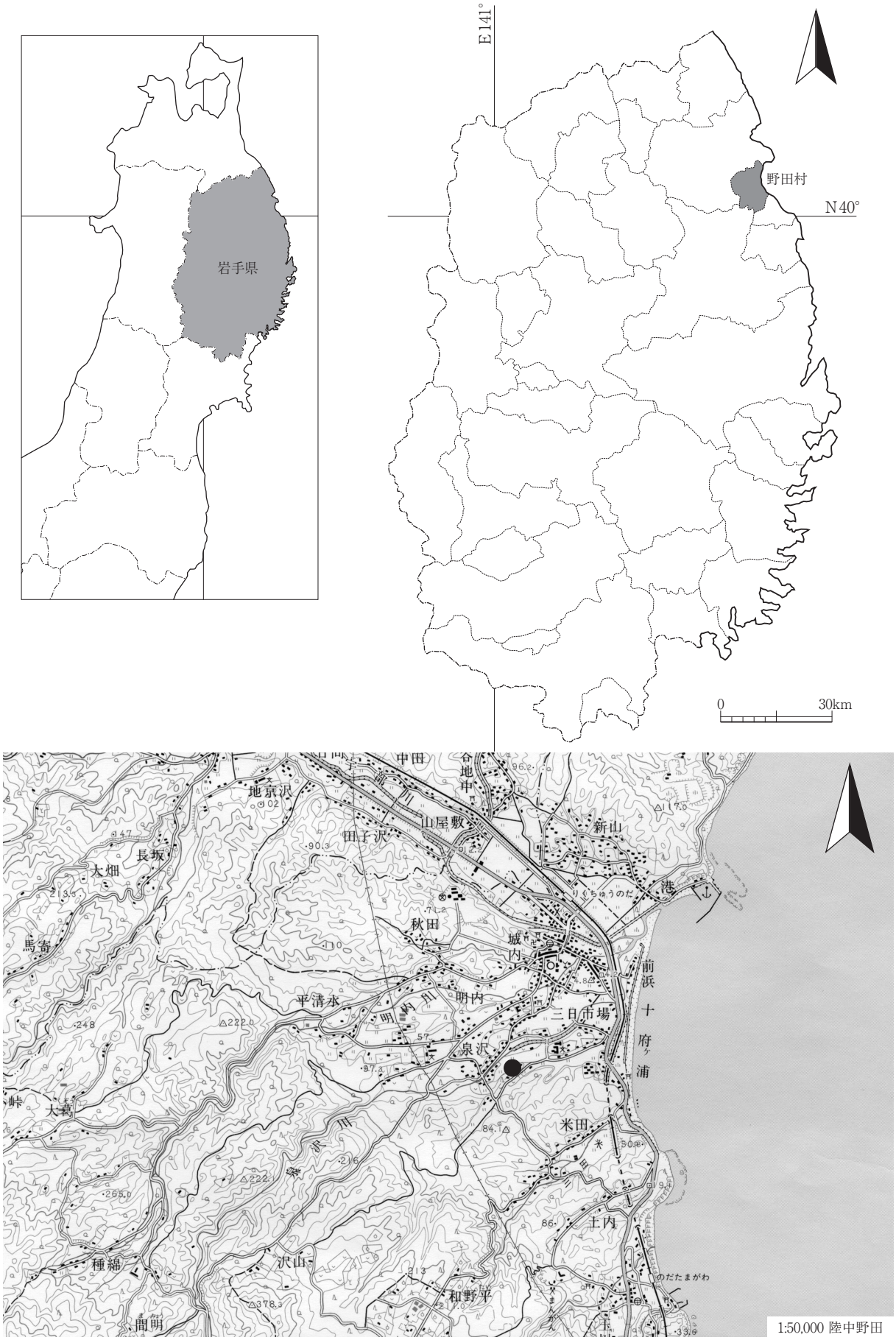
主な産業は漁業で、野田・玉川・下安家の三港が第１種漁港に指定されており、サケ・マスの放流事業やホタテ貝の地まきなど養殖漁業が盛んに行われている。この他に、高原地帯では酪農と養豚の主産地化が進められている（1990平凡社）。

人口は5,019人（平成17年国勢調査）で、岩手県全体の0.36％を占めている（1990平凡社・野田村HPから引用）。

2　地 理 的 環 境

（1）遺跡周辺の地形・地質

遺跡の所在する野田村は、南北に長い卵形をした北上山地の東側を縁取る三陸海岸北部地域に位


岩手県
E141°
N40°
野田村
0
30km
中田
地京沢
山屋敷
田子沢
新山
長坂
大畑
馬寄
秋田
城内
前浜
十府ヶ浦
平清水
明内
三日市場
泉沢
大葛
米田
土内
種綿
沢山
和野平
聞明
1:50,000 陸中野田

第１図　遺跡位置図

置する。

三陸海岸の海岸線の北半部は、あまり細かな湾入が見られず、切り立った海食崖が続くのに対し、宮古より以南では海岸線は屈曲に富み、数多くの湾入と岬が連なるリアス式海岸が発達する。

三陸海岸北部と南部の地形的差違は、鮮新世末を中心に進行した北上山地の曲隆に伴う海岸部の沈降が南部ほど大きかったことが最大の要因となっている。さらに海岸部が隆起に転じ、海成段丘の形成されはじめる中期更新世以降、海成段丘群の分布から推定すると、北部ほど隆起量の大きい傾動運動（宮古南方では沈降傾向）が進行したと推定される。

北部の海岸部は、中・古生層の硬岩からなる南部海岸に比較し、侵食されやすい花崗岩や白亜紀層が海食台形成に好都合であったと推定される（2005 小池）。

このように、三陸海岸北部では、海食崖の発達する直線的な海岸線と、その背後に更新世中・後期の海成段丘群が発達する。このため、海岸に沿っては広い台地状の平坦地が開け、河川は深い谷となって海に注いでいる（2005 小池・宮内）。

三陸海岸北部の野田村野田地域はまさに典型的で、やや弧を描く海岸線である十府ヶ浦の背後には水無面からなる海成段丘群が発達し、本遺跡が乗る台地状の平坦地が開けており、また明内川や泉沢川によって開析された河岸段丘が河川沿いに認められる地形となっている。北側の野田港付近や南側の玉川などは海食崖が発達している。

遺跡付近の地形は、西側の野田中学校付近は海成段丘から下る斜面地を形成しているが、東側の住宅地付近は明内川右岸の河岸段丘となり地形はほぼ平坦に変化する。県指定史跡の範囲は、海成段丘の平坦部に立地していると見られる。

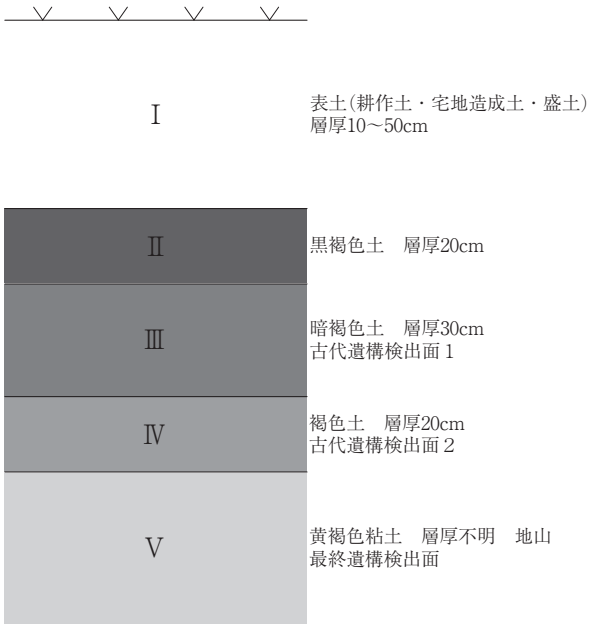
小池一之・田村俊和・鎮西清高・宮城豊彦編　2005 『日本の地形３　東北』（株）三秀舎
小池一之　2005 「2-2 リアス海岸の発達する三陸海岸」『日本の地形３　東北』（株）三秀舎
宮内崇裕　2005 「2-2（２）北上山地北部を削り込む高位段丘群」『日本の地形３　東北』（株）三秀舎

1:50,000 地形分類図（陸中野田）

第２図　地形分類図

（2）調査区の層序

調査区内の基本層序はⅠ～Ⅴ層に区分される。Ⅰ層は、耕作土・宅地造成土・盛土を含む表土層で、層厚10～50cmで、北側の段丘縁辺から落ち込む部分ではやや厚くなる。Ⅱ層は、黒褐色で構成される層で調査区全体に薄く堆積する。層厚は約20cm。おそらく耕作以前の旧表土層であろう。Ⅲ層は暗褐色土で構成される１面目の古代遺構検出面である。層厚は10～30cmで、西側に厚く堆積する。この上面で竪穴住居が捉えられると思われるが、埋土との区別が付きづらいこともあり、遺構の認識が困難である。このため、調査では本層をやや掘り下げる形で検出している。Ⅳ層は２面目の古代遺構検出面で、この上面で縄文時代の陥し穴状遺構を含む大半の遺構を検出している。Ⅴ層は黄褐色粘土で構成される最終検出面である。いわゆる地山上面で、本層以下からは遺構･遺物ともに確認されない。なお、竪穴住居埋土中に十和田ａテフラ（Ｔｏ－ａ）を確認しており、基本層序ではⅢ層上位からの流入と考えられる。また、円形基調の陥し穴状遺構上面や北側斜面には、十和田中掫テフラ（Ｔｏ－Ｃｕ）を部分的に確認している。



第３図　基本層序柱状模式図

３　歴史的環境

岩手県遺跡台帳（平成21年12月31日）によると、野田村には43箇所の遺跡が登録されている。野田村の登録箇所すべてと震災復興調査での試掘調査で新たに発見された３箇所を加え、さらに久慈市宇部町の17箇所を含む計63箇所を第４図に掲載した。

野田村内では、東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財調査が増加しており、近年における調査成果の蓄積が進んでいる。

蒲沢遺跡は、米田南浜地区防災集団移転に伴って、平成24年度に野田村から委託を受けて岩手県教育委員会が調査を行った（野田村2015）。調査の結果、南浜地区は縄文時代の陥し穴状遺構８基、縄文・弥生時代の竪穴住居跡２棟、古代の竪穴住居跡13棟など、米田地区は弥生時代前期の竪穴住居跡４棟、古代の竪穴住居跡１棟などが確認された。２地区で検出した古代の竪穴住居跡は、いずれも古墳時代後期～奈良時代（７世紀前葉～８世紀初頭）と考えられており、土師器の年代観から、Ⅰ期（７世紀前葉）１棟、Ⅱ期（７世紀中葉～後半）７棟、Ⅲ期（７世紀後半～８世紀初頭）２棟としている。Ⅰ～Ⅱ期は、上泉沢遺跡とほぼ同時期と見られ、距離も山を１つ挟んで東に南浜地区までは約650ｍ、米田地区は約１㎞と近い。北西約500ｍに位置する古館山遺跡を入れると、１㎞圏内にほぼ同時期の３遺跡が集中する状況が捉えられる。

第１表　周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	遺跡コード	市町村名	時代	遺構･遺物	所在地	備考
1	上泉沢	集落跡	JG60-0367	野田村	古代	土師器、陥し穴、竪穴住居	野田村大字野田第12地割	今回調査
2	蒲沢	集落跡	JG61-0076	野田村	古代	土師器、陥し穴、竪穴住居	野田村大字野田第10地割	H24年調査
3	野田竪穴（中平）	集落跡	JG60-0258	野田村	古代	土師器、須恵器、鉄器	野田村大字野田第22地割	S29.4.5県指定史跡 H21.10.13～H21.10.23発掘調査（範囲拡大） 野田村教委･日本考古学協会草間（1965） 野田村中平遺跡（野田村教委 1967） 野田村教委 草間（1969） 日考年18（日考協 1970） 「中平･上明内調査概報」（野田村教委 1970） 岩史研草間 No.58（岩手史学 1972）
4	大平野		JG60-0306	野田村	縄文･古代	陥し穴、土坑、溝跡	野田村大字野田第13･15地割	H21.12.7～H21.12.10発掘調査
5	古館山	集落跡	JG61-0033	野田村	縄文･古代	土師器、縄文（前期）宋銭、柱跡	野田村大字野田	野田村教委 斉藤（1970） 県博 熊谷･高橋･小田野（1981～1984） 野田村文調報（村教委 1987） 岩県博調報第3冊（県博 1987）
6	古館	城館跡	JG61-0033	野田村	中世	堀	野田村大字野田	S59年調査、壊滅
7	古館砲台場	砲台跡	JG61-0035	野田村		砲台跡	野田村大字野田	S59年調査、壊滅
8	野田城	城館跡	JG50-2366	野田村	中世	郭（?）	野田村大字野田字伏津沢	S59年調査
9	伏津館	城館跡	JG50-2353	野田村	中世	郭	野田村大字野田字伏津沢	S59、H25･26年調査
10	新館	城館跡	JG50-2327	野田村	中世	平場、空堀	野田村大字野田字城内	S59、H24年調査
11	平清水Ⅰ	散布地	JG60-0241	野田村	縄文	縄文土器（後期）、土偶	野田村大字野田第22地割	岩教委（2000） 岩文調報第112（岩教委2001） 壊滅
12	平清水Ⅱ	散布地、集落跡	JG60-0224	野田村	縄文･古代、平安	縄文土器（前後期）土師器、石匙、石鏃、磨製石斧、石製垂飾品、竪穴住居跡、住居状遺構、フラスコ状土坑	野田村大字野田第22地割	H13.8～10発掘調査 岩教委（2000） 岩文理（2001･2002） 岩文調報第112（岩教委 2001） 岩文埋調報第449集（岩文理 2004） 壊滅
13	平清水Ⅲ	散布地	JG50-2275	野田村	古代	土師器	野田村大字野田第22地割	H12.6.9新規
14	御台場（遠見番所）	砲台跡	JG51-1192	野田村		土塁	野田村大字野田36-120	S59年調査
15	中新山	散布地	JG51-1032	野田村	縄文･古代	土師器、縄文土器	野田村大字野田字中新山	岩教委（2007） 岩文調報第128（岩教委 2009）
16	上新山	集落跡	JG50-1308	久慈市	古代	土師器、竪穴住居跡	久慈市宇部町15	S52年度調査
17	山屋敷	集落跡	JG50-0361	久慈市	縄文･弥生･古代	縄文土器、弥生土器、土師器、竪穴住居跡	久慈市宇部町10	S49年度調査、H13範囲拡大
18	田子沢	散布地	JG50-1200	久慈市	縄文	縄文土器（前･後期）、石器	久慈市宇部町第7地割	
19	地京沢Ⅰ	散布地	JG50-0171	久慈市	縄文	縄文土器（後期）	久慈市宇部町第6地割	
20	地京沢Ⅱ	散布地	JG50-0097	久慈市	縄文	縄文土器(後期)	久慈市宇部町第6地割	
21	宇部館（八幡館）	城館跡	JG50-0028	久慈市	中世	二重堀切、土塁、単郭、腰郭	久慈市宇部町3	
22	十三塚	散布地	JG40-2072	久慈市	縄文	縄文土器（後期）、塚	久慈市宇部町第3地割	
23	広内	散布地	JG41-2192	野田村	縄文	縄文土器（中期）、石匙	野田村大字野田字広内	日考年 草間（1966） 日考年19（日考年 1971）
24	久喜Ⅰ	散布地	JG41-2178	久慈市	弥生	弥生土器	久慈市宇部町第20地割	
25	久喜Ⅱ	散布地	JG41-2166	久慈市	縄文･古代	縄文土器（前期）、土師器	久慈市宇部町第20地割	
26	久喜Ⅲ	散布地	JG41-2291	久慈市	縄文	縄文土器（前･後期）、石鏃、磨石	久慈市宇部町第20地割	
27	三崎	散布地	JG41-1288	久慈市	縄文	縄文土器（前･中期）、石斧、磨石	久慈市宇部町第22地割	
28	三崎Ⅰ	集落跡	JG41-2301	久慈市	縄文	縄文（前･中期）土器	久慈市宇部町第22地割	
29	三崎Ⅲ	集落跡	JG41-1294	久慈市	縄文･弥生	縄文土器（中･後期）、弥生土器、陥し穴状遺構	久慈市宇部町第20地割	S52年度調査
30	三崎Ⅳ	散布地	JG41-1342	久慈市	縄文	縄文土器（前･後期）、石器	久慈市宇部町第22地割	
31	三崎Ⅵ	散布地	JG41-1238	久慈市	縄文	縄文土器（中･後期）、石鏃、石斧	久慈市宇部町第22地割-24	
32	三崎Ⅸ	散布地	JG41-1168	久慈市	縄文	縄文土器、弥生土器?、フレイク	久慈市宇部町第19地割	
33	三崎山	集落跡	JG41-1379	久慈市	縄文	縄文土器（前･中･後期）、石斧	久慈市宇部町第22地割	
34	沢山Ⅰ	散布地	JG60-2134	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田7-116他	
35	沢山Ⅱ	散布地	JG60-2148	野田村	弥生	弥生土器（撚紋?）	野田村大字野田7- 93他	
36	沢山Ⅲ	散布地	JG60-2244	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田7- 59他	
37	和野平	散布地	JG60-2376	野田村	縄文	縄文土器（中期）、石槍、石刀、石鏃	野田村大字玉川	
38	和野平Ⅰ	散布地	JG60-2286	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田8-228他	
39	和野平Ⅱ	散布地	JG60-2332	野田村	縄文	縄文土器（後･晩期）	野田村大字野田8-213他	
40	和野平Ⅲ	散布地	JG60-2352	野田村		石器（掻器）	野田村大字野田8-219他	
41	和野平Ⅳ	集落跡?	JG70-0204	野田村	縄文	縄文土器（後期?）	野田村大字野田8-263他	
42	和野平Ⅴ	散布地	JG70-0218	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田8-243他	
43	和野平Ⅵ	散布地	JG70-0322	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田8-174他	
44	和野平Ⅶ	散布地	JG70-0392	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田8-254他	
45	和野平Ⅷ	散布地	JG70-0386	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田8-265他	
46	根井貝塚	集落跡･貝塚	JG71-2071	野田村	縄文	縄文土器（後期）、石槍、石剣、鹿のアゴ	野田村大字玉川	考古学ジャーナル No.231（ニュー･サイエンス社 1984）･小田野･高橋･熊谷（1981～1984）
47	根井貝塚東	貝塚?	JG71-2062	野田村	縄文	縄文土器（晩期）、土師器	野田村大字玉川1	
48	根井貝塚西	貝塚?	JG70-2389	野田村	縄文	縄文土器、石器（掻器･剥片）	野田村大字玉川1-48-6他	
49	根井Ⅰ	散布地	JG70-2319	野田村	縄文	縄文土器＜量少ない＞	野田村大字玉川1-159	
50	根井Ⅱ	散布地	JG71-2031	野田村	縄文	縄文土器（?）	野田村大字玉川1-62	
51	根井Ⅲ	散布地	JG71-2091	野田村	縄文	縄文土器（後期?）	野田村大字玉川1-48-4他	
52	根井Ⅳ	散布地	JG71-2037	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字玉川1-171他	
53	根井Ⅴ	散布地	JG71-2066	野田村	縄文	縄文土器（後期）、磨石＜量多い＞	野田村大字玉川1-171他	
54	根井Ⅵ	散布地	JG71-2058	野田村	縄文	縄文土器、剥片＜量多い＞	野田村大字玉川1-171他	
55	根井Ⅶ	散布地	JG71-2095	野田村		磨製石斧	野田村大字玉川1-350他	
56	根井Ⅷ	散布地	JG71-2140	野田村	縄文	縄文土器（後期）、＜量少ない＞	野田村大字玉川1-175他、大字玉川1-154他	
57	根井Ⅸ	散布地	JG71-2183	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字玉川1-63-40他、大字玉川1-63-104他	
58	根井Ⅹ	散布地	JG71-0032	野田村	縄文	縄文土器（?）	野田村大字玉川5-112他	
59	玉川館	集落跡･城館跡	JG71-0112	野田村	縄文･中世	縄文土器（?）、堀切	野田村大字玉川字館山	
60	浜山開墾Ⅰ	散布地	JG71-1142	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字玉川1-349他	
61	浜山開墾Ⅱ	散布地	JG71-1154	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字玉川1-349他	
62	浜山開墾Ⅲ	散布地	JG71-1165	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字玉川1-339他	
63	上代川	集落跡	JG61-2056	野田村	弥生･古代	弥生土器、鉄滓、炉壁、羽口	野田村大字玉川第5地割	H28年調査

宇部町
和野
日向
中田
谷地
地京沢
田子沢
山屋敷
新山
長坂
秋田
城内
明内
平清水
泉沢
三日市場
前浜
十府ヶ浦
米田
土内
沢山
和野平
野田
日形井
玉川
根井
下安家
馬場野
堀内
内川
久喜
広内
中沢
川原屋敷
山田
大沢
北ヶ越
聞明
陸鉄道北十線
国民宿舎
1:50,000 陸中野田

第４図　周辺の遺跡図

Ⅲ　調査・整理の方法

1　野外調査方法

（1）調　査　方　法

平成26年度の調査は、当初現道側の幅４ｍ分を除く、1,300㎡としていたが、遺構がこの箇所にも延長することが確認されたため、該当箇所240㎡を追加調査することになり、最終的な調査面積は1,540㎡となった。平成27年度調査は現道部分の300㎡であるため、２カ年の合計面積は1,840㎡である。

調査区の北側は段丘縁となり、落ち込んでいく地形となっている。この箇所は遺構検出した結果、遺構密度が希薄なために調査終了後は排土置き場として利用している。

各遺構の調査方法については、陥し穴状遺構や土坑、ピットなど小型の遺構は二分法で行い、竪穴住居跡などの大型の遺構や複雑な堆積を呈する遺構は、随時四分法を用いて行った。また、各々について堆積土層観察用のセクションベルトを設け、土層を観察しながら精査を進めた。

この際、土層の堆積状況、遺物の出土状況、遺構の完掘状況を中心に写真撮影及び実測を随時行った。実測は、平面図はＣＵＢＩＣ社製遺構実測ソフト「遺構くん」を用いて光波トランシットによる測量を行い、微細図・断面図は手取りで図化した。

遺構・遺物の写真撮影については、キヤノンＥＯＳ５ＤＭａｒｋⅡ（デジタルカメラ･1,200万画素）と中判カメラ６×4.5（モノクローム）を使用した。また、平成26年９月27日には、調査区域全体の航空写真撮影を実施した。

遺構実測図の縮尺は1/20を基本としたが、カマドや焼土・微細図は1/10、その他の遺構や土層断面なども種類や規模により1/50、1/100などの縮尺を用いて遺構実測図（第一原図）を作成した。掲載については、凡例に挙げた縮尺にリサイズしている。なお、調査の進行上、土層断面の写真や実測を省略し、状態の記録や計測等のみに留めた遺構もある。

遺物の取り上げ方は、遺構内出土分については出土遺構名と出土層位を記した。包含層など遺構外遺物は、出土地点・基本層位（または近接するセクション層位）を記入して取り上げた。

（2）野外調査経過

＜平成26年度＞

８月18日午後から、調査を開始した。伏津館跡現場から器材の搬入、現場設営を行い、８月19日から雑物撤去、試掘、重機による表土除去を行った。９月２週目まで表土除去を並行して、遺構検出を行った結果、陥し穴状遺構60基・竪穴住居跡７棟など予想を上回る遺構数が確認された。このため、９月中旬終了予定が半月程度ずれ込むことが想定され、９月８日に県生文課菅専門員・センター斎藤首席兼調査課長と協議を行った。また、当初、現道側４ｍ程が調査区から外れていたが、遺構が延びることが確認されたため、この部分についても着手している（240㎡）。同日、岩手県立博物館丸山浩治氏による火山灰観察を行っている。９月16日、終了確認。９月19日に現地公開を行い、一般44名に参加して頂いた。９月30日、調査を終了。資材を中平遺跡に搬出・撤収した。

天候はまずまず安定しており、順調に作業を行うことが出来た。作業日数25日間、荒天による現場閉鎖は２日間である。

＜平成27年度＞

９月１日から、調査を開始した。発掘資材は、先行して調査を行っていた中平遺跡から必要な分

を軽トラックで搬入した。調査区は、前年度調査区南側に隣接する現道部分 300㎡である。調査開始前までに、道路舗装面及び砕石撤去を委託者に行って頂いた。９月１～３日、表土除去・遺構検出。遺構検出の結果、道路下部分の大半が道路敷設工事の際の撹乱を受けており、削平されていることが分かった。旧地形は、前年度調査区と道路側溝の間の約２ｍ部分のみが残存しており、この箇所から遺構を確認した。標高が高い西側と、南側にある沼から流入する水が多く、水中ポンプを稼働しながら作業を進めた。９月２週目は悪天候によりほぼ作業できず、排水作業のみ行う。９月 14・15 日で残りの精査。９月 16 日、終了確認。９月 16 ～ 17 日に重機による埋め戻し作業を行い、９月 17 日、調査終了・撤収した。作業日数９日間、荒天による現場閉鎖は４日間である。

２　整　理　方　法

（１）遺 構 の 整 理

遺構実測ソフトで図化してきた遺構図データを基に、注記や遺構の切り合い、配置などを検討しながら担当調査員が平面図を作成した。断面図は、担当調査員が第二原図を作成し、トレース図化を行った。平面図及び断面図のレイアウトなどは調査員が行った。

（２）遺 物 の 整 理

遺物は種類ごとに大別し、掲載遺物・要観察遺物を選別した上で登録番号を付けた。

本報告書掲載にあたっては、これらに掲載番号を付した。観察表の（　）内数値は残存値、＜　＞内数値は推定値である。

土師器は水洗乾燥後、収納袋ごとに注記を行い、その後、遺構ごとに接合作業を行った。掲載遺物の選別、復元作業、登録、実測、拓影、トレース、写真撮影、版組の手順で行った。土製品は水洗・注記を行った後、全点を掲載遺物とし作業を進めた。石器は、水洗・注記を行った後、担当調査員が全点を観察・選別し、代表的な器種のみ掲載とし実測などを行った。金属製品は、水洗乾燥後に調査員が全点を観察し、掲載した。

（３）遺物写真撮影

遺物写真は、当センター写場にて写真技師が撮影を行った。撮影には、キヤノンＥＯＳ５Ｄ（デジタルカメラ・1,200 万画素）を使用した。

（４）整　理　経　過

平成 26 年 12 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日（作業員２名体制）、平成 27 年 11 月 1 日～平成 28 年 1 月 31 日（作業員 1 名体制）で室内整理作業を行った。

３　広　報　活　動

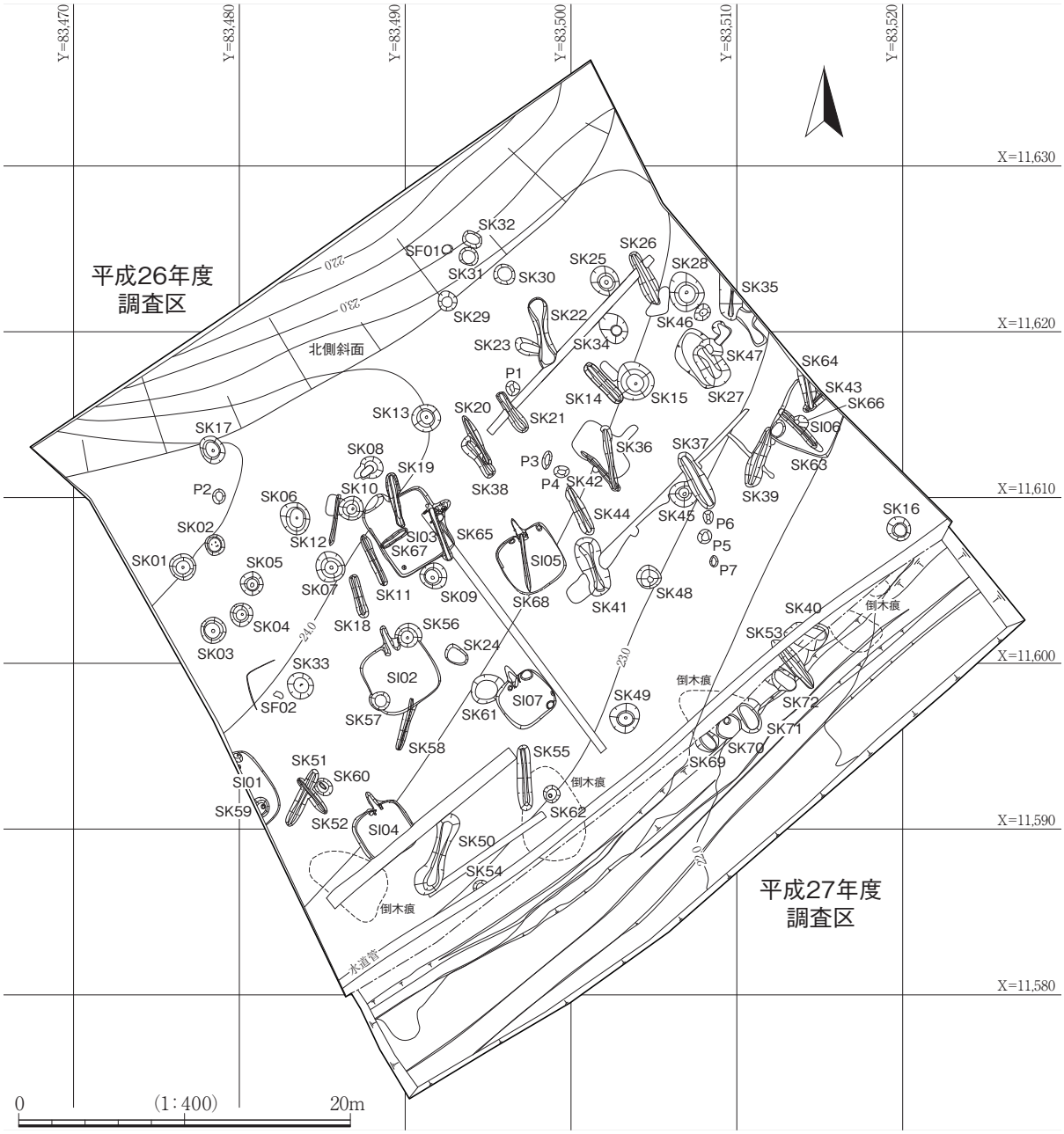
・調査概報『平成 26・27 年度発掘調査報告書』岩埋文第 647・661 集　2015 年 3 月・2016 年 3 月発行
・平成 26 年度現地公開資料　2014 年 9 月 19 日

Ⅳ　調　査　内　容

1　概　　要

平成26・27年度の２カ年の調査から、縄文時代の陥し穴状遺構60基（円形29基・溝状31基）、古代の竪穴住居跡７棟･土坑12基･焼土２基･ピット７基が確認され、土師器大コンテナ２箱、縄文･弥生土器ビニール１袋、石器小コンテナ１箱、金属製品２点、コハク２点、貝殻ビニール１袋が出土した。Ⅲで触れたが、本調査は北側1,540㎡を平成26年度、南側の道路部分300㎡を平成27年度に調査している。よって、第５図は２カ年の調査区を合成して示している。

本章では、調査内容を各遺構、各出土遺物ごとに記載する。なお、平成27年度調査分の遺構については第33図にまとめて掲載している。



第５図　調査全体図

2　遺　　構

＜縄文時代＞

（1）陥し穴状遺構

＜円形基調＞

SK01 陥し穴状遺構（第６図、写真図版３）

調査区北西側の X=11605･Y=83475 付近に位置する。規模･形状は 1.6 × 1.55 mの円形､深さは 1.05 mである。底面中央には副穴１個を検出している。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK02 陥し穴状遺構（第６図、写真図版３）

調査区北西側の X=11608・Y=83479 付近に位置する。規模・形状は 1.25 × 1.15 mの円形、深さは 0.6 mである。底面中央には副穴４個を検出している。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK03 陥し穴状遺構（第６図、写真図版３）

調査区北西側の X=11602・Y=83480 付近に位置する。規模・形状は 1.6 × 1.5 mの円形、深さは 1.0 mである。底面中央には副穴１個を検出しており、人為的に埋め戻されている。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK04 陥し穴状遺構（第６図、写真図版３）

調査区北西側の X=11604・Y=83480 付近に位置する。規模・形状は直径 1.4 mの円形、深さは 1.3 mである。底面中央には副穴１個を検出している。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK05 陥し穴状遺構（第６図、写真図版４）

調査区北西側の X=11606・Y=83480 付近に位置する。規模・形状は 1.4 × 1.3 mの円形、深さは 0.8 mである。底面中央には副穴１個を検出しており、人為的に埋め戻されている。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK06 陥し穴状遺構（第６図、写真図版４）

調査区北西側の X=11610･Y=83482 付近に位置する。規模･形状は 2.0 × 1.7 mの楕円形､深さは 1.15 mである。底面中央には副穴１個を検出しており、人為的に埋め戻されている。出土遺物はないが、１層に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

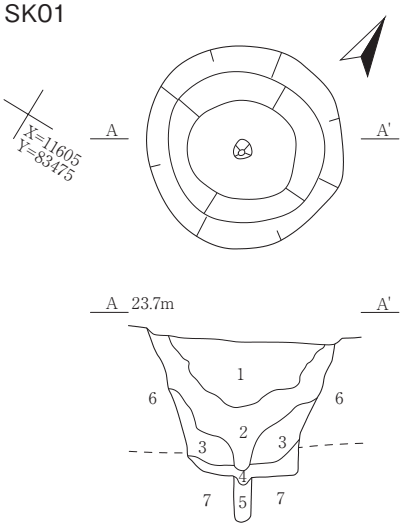
SK07 陥し穴状遺構（第７図、写真図版４）

調査区北西側の X=11607・Y=83485 付近に位置する。規模・形状は 1.9 × 1.7 mの略円形、深さは 1.2 mである。底面中央には副穴１個を有している。出土遺物はないが、１層に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK08 陥し穴状遺構（第７図、写真図版４）

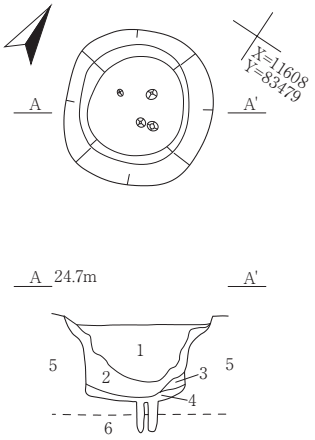
調査区北西側の X=11610･Y=83487 付近に位置する。遺構の西半は電柱抜き取り時に壊されている。規模・形状は径 1.4 mの略円形、深さは 0.7 mである。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK01



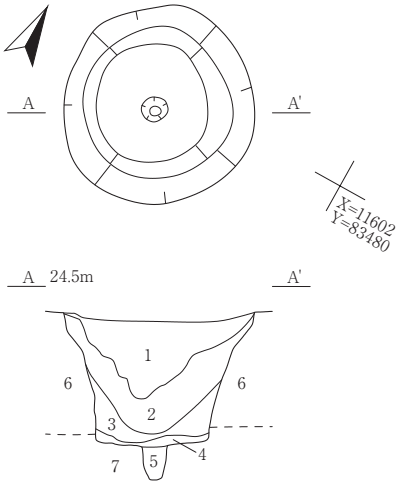
SK01
1 10YR1.7/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 +10YR1.7/1黒色シルトと10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合土
3 10YR7/6明黄褐色粘土質シルトに10YR2/3黒褐色シルトを混入 粘性中 締まりやや密 廃絶後の壁面崩落土層
4 10YR3/4暗褐色砂質シルト 粘性中 締まり中 使用時の崩落土層
5 10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 人為的な堆積土層
6 10YR5/8黄褐色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山
7 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SK02



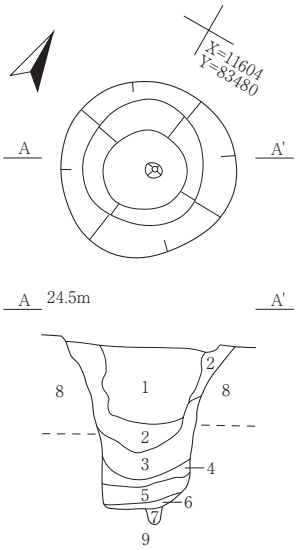
SK02
1 10YR1.7/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/2黒褐色シルト+10YR2/2黒褐色シルトの混合 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトを少量混入 壁面崩落土層
3 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁面崩落土層
4 10YR3/4暗褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 使用時からの崩落土層
5 10YR5/8黄褐色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山
6 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SK03



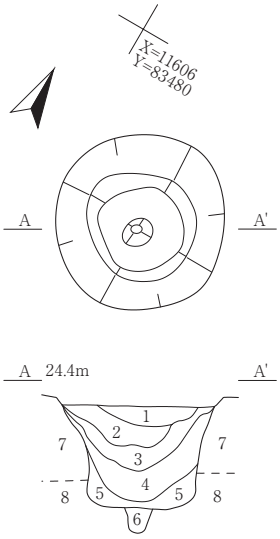
SK03
1 10YR1.7/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/2黒褐色シルト+10YR6/6明黄褐色粘土質シルトの混合 粘性中 締まりやや疎 廃絶後の壁面崩落土層
3 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎 に10YR3/4暗褐色シルトを筋状に堆積
4 10YR4/4褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 使用時からの初期堆積土層
5 10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルト 粘性やや弱 締まり疎 人為的な堆積土層
6 10YR5/8黄褐色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山
7 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SK04



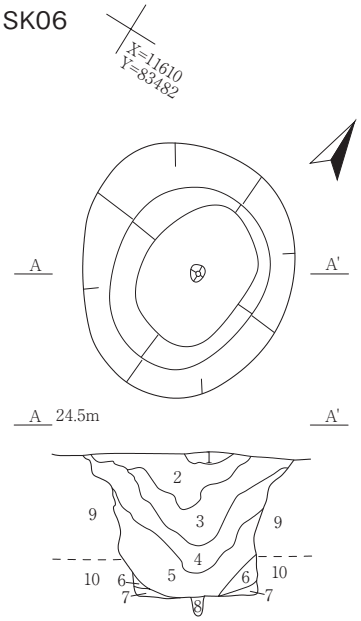
SK04
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルトと10YR4/6褐色シルトの互層 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR2/3黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎～中
5 10YR7/4にぶい黄橙色砂質シルト 粘性弱 締まりやや疎 壁面崩落土層
6 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 初期堆積土層
7 10YR3/4暗褐色細砂礫 粘性なし 締まり中 細砂礫(φ1cm以下)がつまっている人為的な堆積土層か
8 10YR3/3暗褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎
9 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

SK05



SK05
1 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中 地山再堆積土層 近くの陥し穴を掘った際に人為的に埋めたか
3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR3/2黒褐色シルトに10YR5/6黄褐色粘土質シルト粒を少量混入 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR3/4暗褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まり中 4層との境界に10YR5/6黄褐色粘土質シルトを筋状に堆積 壁面崩落土層
6 10YR5/6黄褐色砂質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎 人為的な堆積土層
7 10YR5/8黄褐色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山
8 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SK06

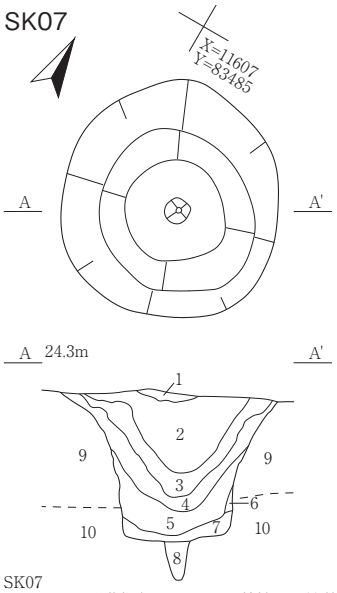


SK06
1 10YR7/8黄橙色To-Cuテフラ一次堆積層
2 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR2/2黒褐色シルト 粘性中 締まりやや疎 壁際から10YR6/6明黄褐色粘土を筋状に流入 壁面崩落土
6 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まり中
7 10YR3/4暗褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁面9層が崩落し堆積した初期堆積土層
8 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり疎 人為堆積層
9 10YR5/8黄褐色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山
10 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性やや弱 締まりやや密 地山

0　1:60　2m

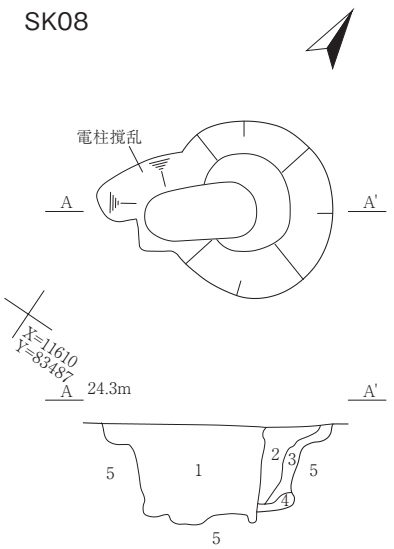
第6図　SK01～06陥し穴状遺構

SK07



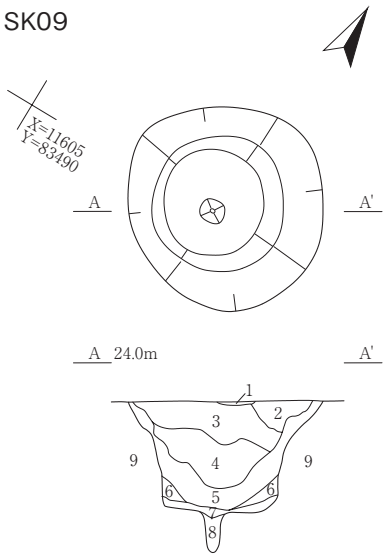
SK07
1 10YR6/8明黄褐色To-Cuテフラ 粘性やや弱 締まりやや密 一次堆積層
2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎
4 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎 10YR4/6褐色シルトを若干混合
5 10YR3/4暗褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
6 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱～中　締まりやや疎 壁面崩落土層
7 10YR3/4暗褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎 初期堆積土
8 10YR3/3暗褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎
9 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
10 10YR7/6明黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 地山

SK08



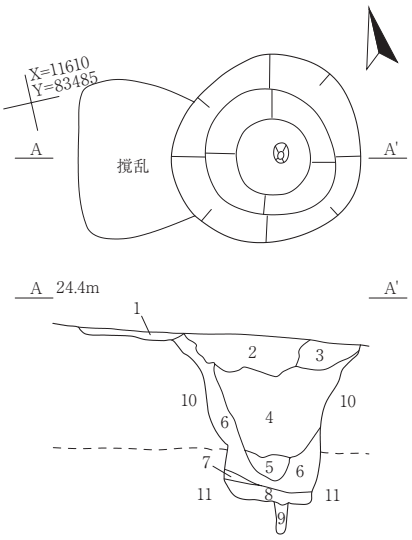
SK08
1 10YR2/3黒褐色シルト主体に10YR6/6明黄褐色粘土ブロックを抜き取り部分に混入 粘性やや弱 締まり疎 電柱撹乱
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 に10YR6/6明黄褐色粘土ブロック少量散在
4 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 初期堆積土層
5 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密

SK09



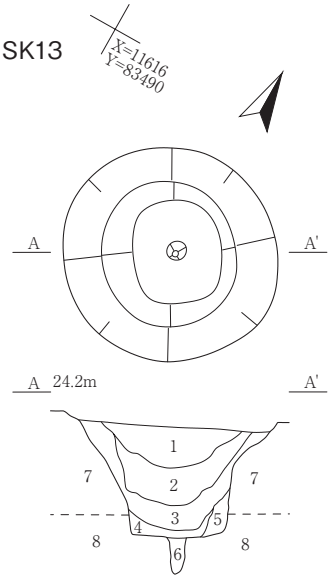
SK09
1 10YR7/6明黄褐色To-Cuテフラ一次堆積層
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR2/2黒褐色シルト+10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合 粘性やや弱 締まりやや疎 黒褐色主体
5 10YR3/4暗褐色シルト+10YR6/6明黄褐色粘土質シルトの混合 粘性やや弱 締まりやや疎 明黄褐色主体
6 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まり中 壁面崩落土層
7 10YR2/3黒褐色シルト 粘性中 締まりやや疎 初期堆積土
8 注記なし 副穴埋土
9 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

SK10



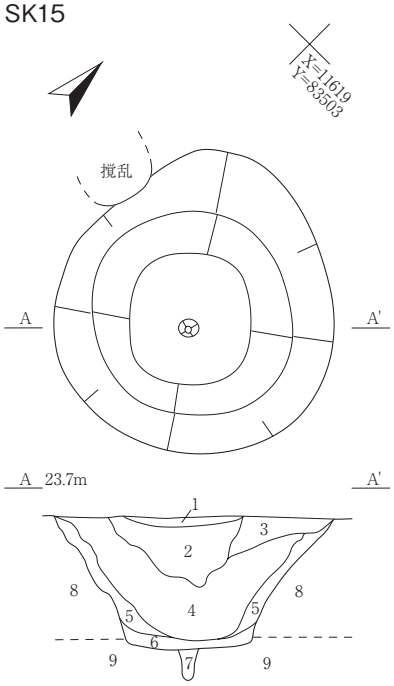
SK10
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 撹乱
2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR4/4褐色シルトブロック全体に散在
5 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR6/8明黄褐色粘土質ブロック全体に散在
6 10YR2/3黒褐色シルト+10YR5/8黄褐色粘土質シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや疎
7 10YR7/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎 壁面崩落土層
8 10YR2/3黒褐色シルト+10YR5/8黄褐色粘土質シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや疎
9 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まり疎 人為的な堆積土層か
10 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
11 10YR7/4にぶい黄橙色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 地山

SK13



SK13
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎 10YR4/6褐色粘土質シルトブロックを少量散在
3 10YR4/4褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 主体に10YR2/3黒褐色を斑状に堆積
4 10YR3/4暗褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎
5 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中 壁面崩落土層
6 注記なし 人為的な堆積層か副穴
7 10YR3/3暗褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎
8 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

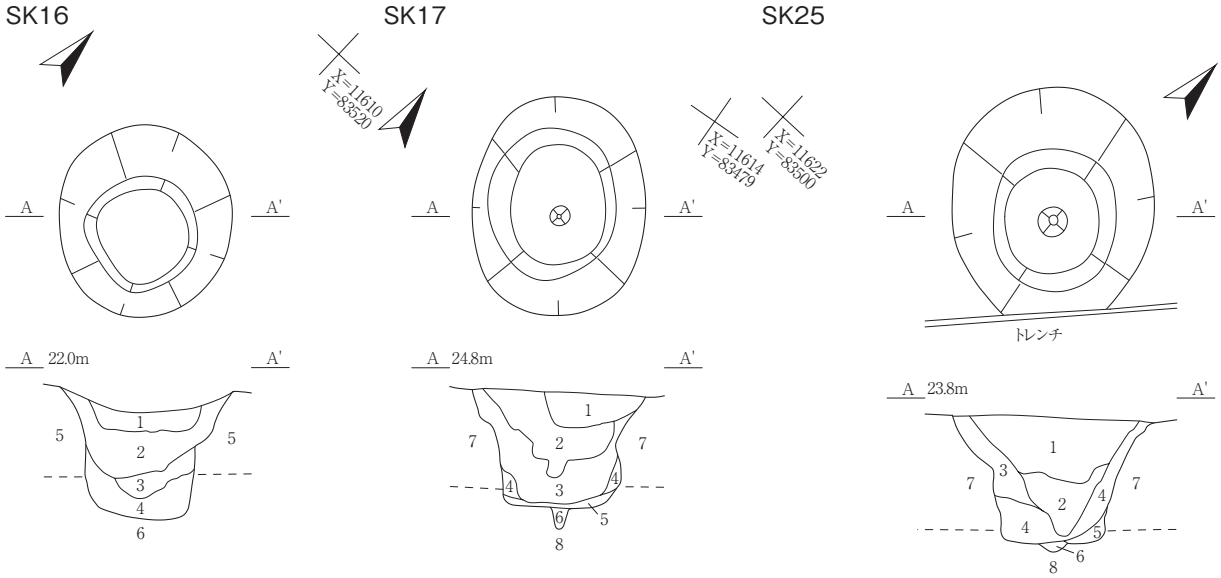
SK15



SK15
1 10YR7/8黄橙色To-Cuテフラ一次堆積層
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎
5 10YR5/6黄褐色粘土 粘性中 締まりやや疎～中 壁面崩落土層
6 10YR5/8黄褐色粘土 粘性やや強 締まり中
7 注記なし 人為的な堆積層 副穴
8 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山
9 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

0　1:60　2m

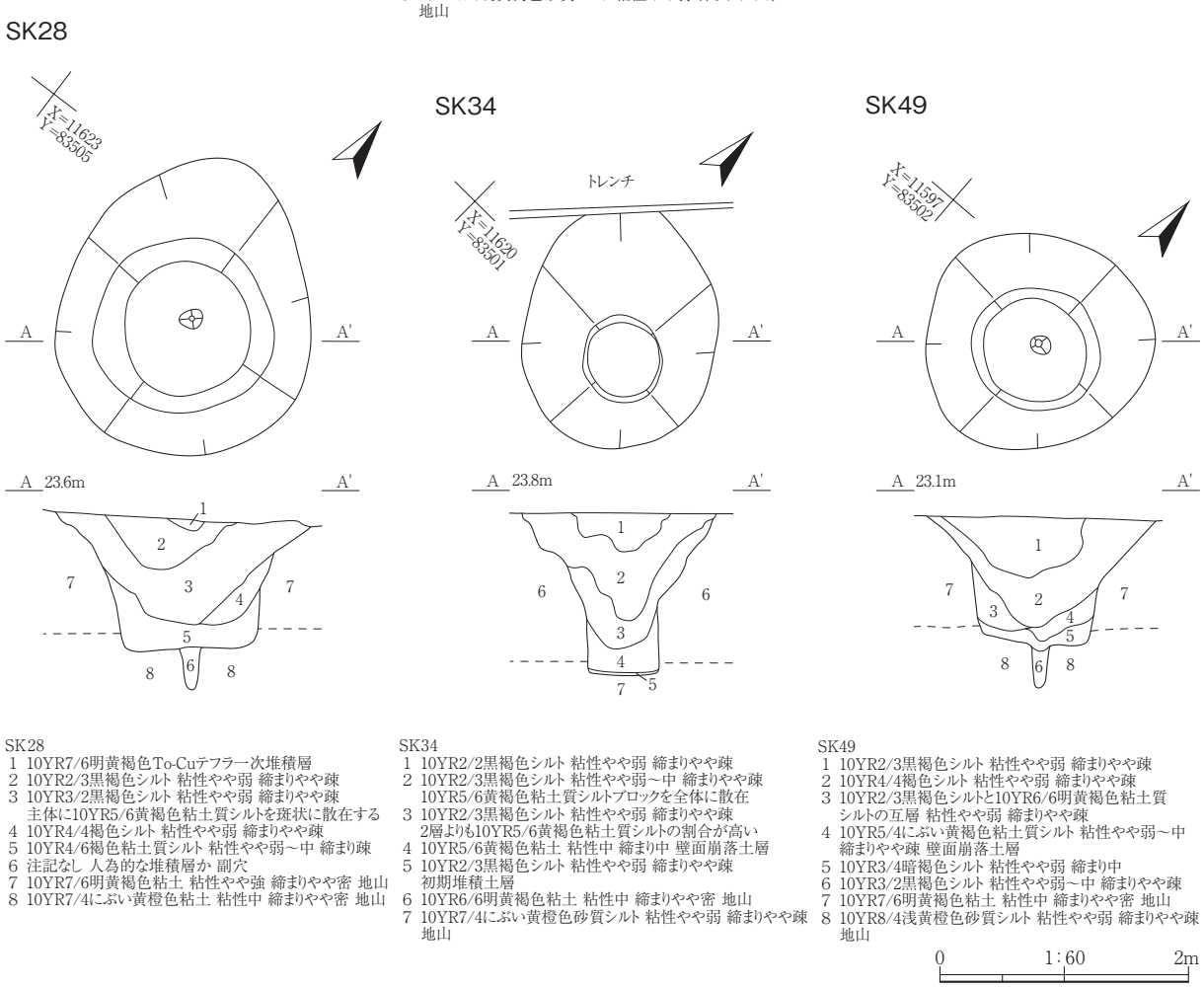
第7図　SK07～10・13・15陥し穴状遺構



SK16
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/2黒褐色シルト+10YR3/3暗褐色シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR5/6黄褐色シルトと10YR4/4褐色シルトの互層 粘性やや弱～中 締まりやや疎
5 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
6 10YR7/6明黄褐色細砂礫 粘性なし 締まりやや密 地山

SK17
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR4/4褐色シルト+10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合 粘性やや弱～中 締まりやや疎
4 10YR7/6明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎～中 壁面崩落土層
5 10YR4/4褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まり中 初期堆積土層
6 10YR4/4褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 人為的な堆積層
7 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
8 10YR7/6明黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 地山

SK25
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土を上部に多く含む
4 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まり中 壁面崩落土層
5 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎 壁面崩落土層
6 注記なし 副穴 人為的な堆積層か
7 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山
8 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性中 締まりやや密 地山



SK28
1 10YR7/6明黄褐色To-Cuテフラ一次堆積層
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 主体に10YR5/6黄褐色粘土質シルトを斑状に散在する
4 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まり疎
6 注記なし 人為的な堆積層か 副穴
7 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山
8 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

SK34
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロックを全体に散在
3 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 2層よりも10YR5/6黄褐色粘土質シルトの割合が高い
4 10YR5/6黄褐色粘土 粘性中 締まり中 壁面崩落土層
5 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 初期堆積土層
6 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
7 10YR7/4にぶい黄橙色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 地山

SK49
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR2/3黒褐色シルトと10YR6/6明黄褐色粘土質シルトの互層 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎 壁面崩落土層
5 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
6 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎
7 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
8 10YR8/4浅黄橙色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 地山

第8図　SK16・17・25・28・34・49陥し穴状遺構

SK09 陥し穴状遺構（第７図、写真図版５）

調査区中央の X=11605・Y=83490 付近に位置する。規模・形状は 1.75 × 1.55 ｍの略円形、深さは 0.9 ｍである。底面中央には副穴１個を有している。出土遺物はないが、１層に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK10 陥し穴状遺構（第７図、写真図版５）

調査区北西側の X=11610・Y=83485 付近に位置する。遺構西半上面に撹乱を受けている。規模・形状は径 1.5 ｍの略円形、深さは 1.3 ｍである。底面中央には副穴１個を有している。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK13 陥し穴状遺構（第７図、写真図版５）

調査区中央北側の X=11616・Y=83490 付近に位置する。規模・形状は径 1.7 ｍの円形、深さは 0.9 ｍである。底面中央には副穴１個を検出しており、人為的に埋め戻されている。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK15 陥し穴状遺構（第７図、写真図版５）

調査区東側の X=11619･Y=83503 付近に位置する。規模･形状は 2.4 × 2.2 ｍの略円形、深さは 1.05 ｍである。底面中央には副穴１個を検出しており、人為的に埋め戻されている。出土遺物はないが、１層に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK16 陥し穴状遺構（第８図、写真図版６）

調査区東端の X=11610･Y=83520 付近に位置する。規模･形状は 1.55 × 1.4 ｍの略円形､深さは 0.95 ｍである。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK17 陥し穴状遺構（第８図、写真図版６）

調査区北西側の X=11614･Y=83479 付近に位置する。規模･形状は 1.75 × 1.4 ｍの楕円形､深さは 0.9 ｍである。底面中央には副穴１個を検出しており、人為的に埋め戻されている。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK25 陥し穴状遺構（第８図、写真図版６）

調査区北東側の X=11622・Y=83500 付近に位置する。遺構の南東端を生文課トレンチに切られている。規模･形状は 1.9 × 1.6 ｍの楕円形､深さは 1.0 ｍである。底面中央には副穴１個を検出しており、人為的に埋め戻されていると見られる。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK28 陥し穴状遺構（第８図、写真図版６）

調査区北東端の X=11623･Y=83505 付近に位置する。規模･形状は 2.4 × 2.05 ｍの楕円形､深さは 0.98 ｍである。底面中央には副穴１個を検出しており、人為的に埋め戻されている。出土遺物はないが、１層に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK34 陥し穴状遺構（第８図、写真図版７）

調査区北東側の X=11620・Y=83501 付近に位置する。遺構の北東端を生文課トレンチに切られている。規模・形状は 2.0 × 1.55 ｍの楕円形、深さは 1.32 ｍである。底面には使用時に堆積した黒褐色シルトが薄く堆積している。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK40 陥し穴状遺構（第 33 図、写真図版７）

調査区南東側の X=11602・Y=83510 付近に位置する。平成 26・27 年度調査区に跨がって確認している。また、遺構北側を水道管によって切られている。規模・形状は 2.38 × 1.72 mの不整楕円形、深さは 1.2 m以上あり、下位は地下水位が高く確認できない。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK45 陥し穴状遺構（第 12 図、写真図版７）

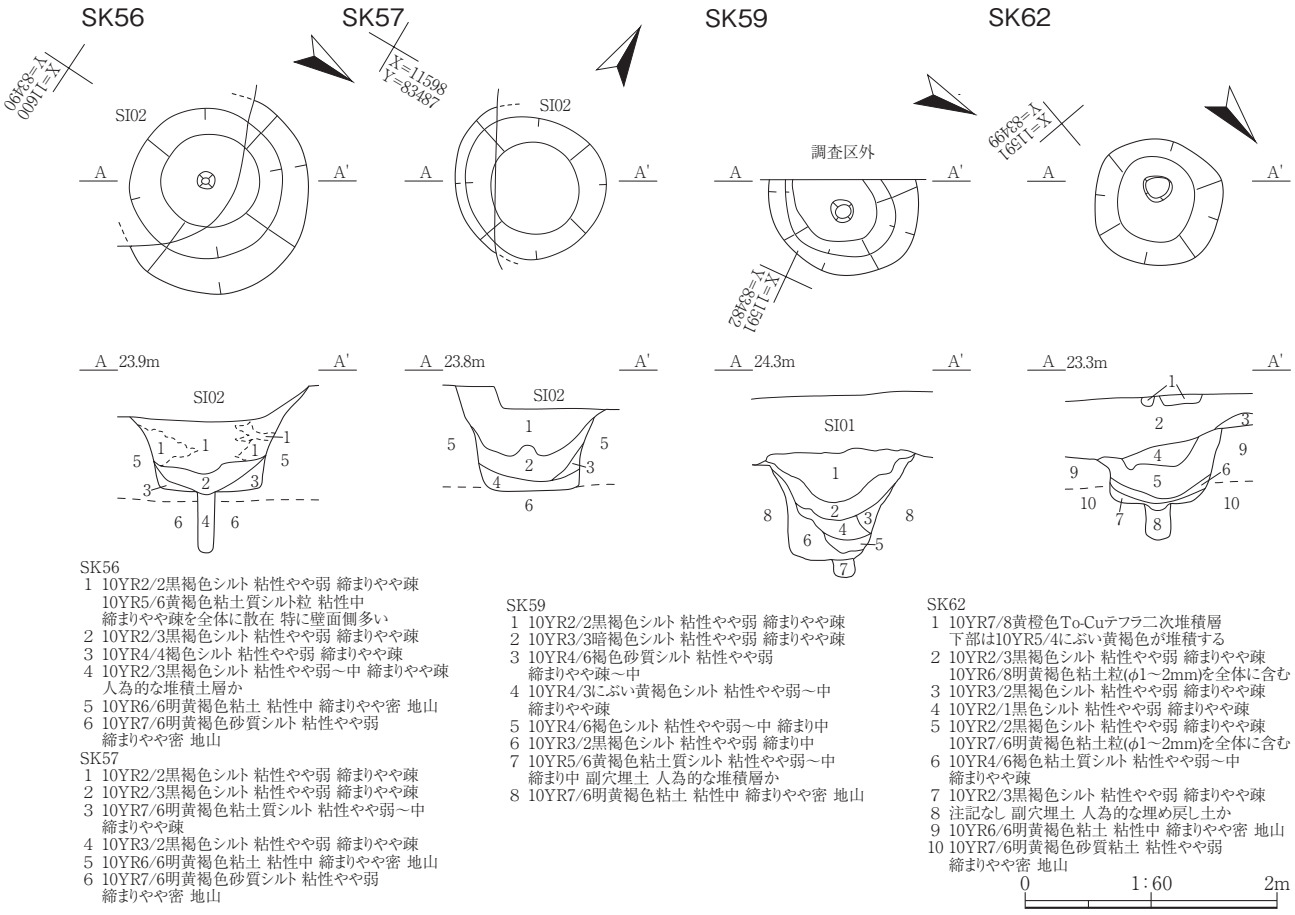
調査区中央東側の X=11610・Y=83510 付近に位置する。遺構北東側で SK37 と重複しており、本遺構が切られている。規模・形状は＜ 1.7 ＞× 1.55 mの略円形、深さは 1.1 mである。底面中央には副穴１個を検出しており、人為的に埋め戻されていると見られる。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることと SK37 より古いことから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK47 陥し穴状遺構（第 12 図、写真図版 14）

調査区東側の X=11620･Y=83510 付近に位置する。遺構南半を SK27、全体を撹乱によって切られている。規模･形状は径 1.5 mの円形で、深さは 1.3 mである。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK49 陥し穴状遺構（第８図、写真図版７）

調査区中央南側の X=11597・Y=83502 付近に位置する。規模・形状は 1.85 × 1.75 mの略円形、深さは 1.0 mである。底面中央には副穴１個を検出しており、人為的に埋め戻されていると見られる。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。



SK56
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR5/6黄褐色粘土質シルト粒 粘性中
締まりやや疎を全体に散在 特に壁面側多い
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎
人為的な堆積土層か
5 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
6 10YR7/6明黄褐色砂質シルト 粘性やや弱
締まりやや密 地山

SK57
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR7/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中
締まりやや疎
4 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
6 10YR7/6明黄褐色砂質シルト 粘性やや弱
締まりやや密 地山

SK59
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱
締まりやや疎～中
4 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘性やや弱～中
締まりやや疎
5 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱～中 締まり中
6 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
7 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中
締まり中 副穴埋土 人為的な堆積層か
8 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

SK62
1 10YR7/8黄橙色To-Cuテフラ二次堆積層
下部は10YR5/4にぶい黄褐色が堆積する
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR6/8明黄褐色粘土粒(φ1～2mm)を全体に含む
3 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR7/6明黄褐色粘土粒(φ1～2mm)を全体に含む
6 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中
締まりやや疎
7 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
8 注記なし 副穴埋土 人為的な埋め戻し土か
9 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
10 10YR7/6明黄褐色砂質粘土 粘性やや弱
締まりやや密 地山

0　1:60　2m

第９図　SK56・57・59・62陥し穴状遺構

SK56 陥し穴状遺構（第９図、写真図版８）

調査区中央西側の X=11600･Y=83490 付近に位置する。SI02 と重複しており､本遺構が古い。規模･形状は径 1.65 ｍの円形､深さは SI02 床面から 0.55 ｍである。底面中央には副穴１個を検出しており、人為的に埋め戻されていると見られる。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK57 陥し穴状遺構（第９図、写真図版８）

調査区中央西側の X=11598･Y=83487 付近に位置する。SI02 と重複しており､本遺構が古い。規模･形状は径 1.3 ｍの円形、深さは SI02 床面から 0.65 ｍである。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK59 陥し穴状遺構（第９図、写真図版８）

調査区西端の X=11591・Y=83482 付近に位置する。SI01 と重複しており、本遺構が古い。規模・形状は径 1.2 ｍの円形、深さは SI01 床面から 0.85 ｍである。底面中央には副穴１個を検出しており、人為的に埋め戻されていると見られる。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK62 陥し穴状遺構（第９図、写真図版８）

調査区南側の X=11591・Y=83499 付近に位置する。倒木痕と重複しており、本遺構が古い。規模・形状は径 1.0 ｍの略円形､深さは倒木痕底面から 0.5 ｍである。底面中央には副穴１個を検出しており、人為的に埋め戻されていると見られる。出土遺物はないが、重複している倒木痕上面に To-Cu テフラを確認していることから、倒木痕以前の縄文時代前期中葉までには埋没していたと考えられる。

SK66 陥し穴状遺構（第 15 図、写真図版 18）

調査区東端の X=11614･Y=83515 付近に位置する。遺構全体で SI06､南半で SK63 と重複しており、いずれにも切られている。規模・形状は径１ｍの略円形と見られ、深さは 0.5 ｍである。出土遺物はないが、同形状の遺構上面に To-Cu テフラを堆積することと溝状の SK63 との重複関係から、縄文時代前期中葉までには埋没していたと考えられる。

SK69 陥し穴状遺構（第 33 図、写真図版９）

調査区南東側の X=11596・Y=83508 付近に位置する。平成 26・27 年度調査区の境界にあり、北端は検出できない。規模・形状は 1.5 ×（1.1）ｍの不整円形、深さは 1.25 ｍ以上あり、下位は地下水位が高く確認できない。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK71 陥し穴状遺構（第 33 図、写真図版９）

調査区南東側の X=11598・Y=83510 付近に位置する。平成 26・27 年度調査区の境界にあり、北端は検出できない。また、遺構西側で SK70 に切られる。規模・形状は＜ 2.1 ＞× 1.68 ｍの楕円形、深さは 1.2 ｍ以上あり、下位は地下水位が高く確認できない。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることと重複する SK70 より古い、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

SK72 陥し穴状遺構（第 33 図、写真図版９）

調査区南東側の X=11600・Y=83510 付近に位置する。平成 26・27 年度調査区の境界にあり、北端は検出できない。規模・形状は（1.65）× 1.23 ｍの楕円形、深さは 1.1 ｍ以上あり、下位は地下水位が高く確認できない。出土遺物はないが、同形状の陥し穴状遺構上面に To-Cu テフラを確認していることから、縄文時代前期中葉には埋没していたと考えられる。

＜溝状基調＞

SK11 陥し穴状遺構（第 10 図、写真図版 10）

調査区中央西側の X=11605・Y=83490 付近に位置する。規模・形状は 3.4 × 0.5 mの溝状、深さは 0.7 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK12 陥し穴状遺構（第 10 図、写真図版 10）

調査区中央西側の X=11610・Y=83487 付近に位置する。規模・形状は 3.17 × 0.25 mの溝状、深さは 0.4 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK14 陥し穴状遺構（第 10 図、写真図版 10）

調査区中央東側の X=11618・Y=83500 付近に位置する。規模・形状は 3.13 × 0.72 mの溝状、深さは 1.07 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK18 陥し穴状遺構（第 10 図、写真図版 10）

調査区中央西側の X=11606・Y=83487 付近に位置する。規模・形状は 2.7 × 0.52 mの溝状、深さは 0.9 mで、両端がオーバーハングする。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK19 陥し穴状遺構（第 10 図、写真図版 11）

調査区中央西側の X=11610・Y=83490 付近に位置する。遺構南半で SI03 と重複しており、切られている。規模・形状は 3.37 × 0.8 mの溝状、深さは 0.93 mで、北端がオーバーハングする。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK20 陥し穴状遺構（第 11 図、写真図版 11）

調査区中央北側の X=11615・Y=83495 付近に位置する。遺構南半が SK38 と重複しており、本遺構が切っている。規模・形状は＜ 3.55 ＞× 0.52 mの溝状、深さは 0.98 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係と SK38 より新しい、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK21 陥し穴状遺構（第 10 図、写真図版 11）

調査区中央北側の X=11615・Y=83498 付近に位置する。遺構中央を生文課トレンチに切られている。規模・形状は 2.87 × 0.7 mの溝状、深さは 0.68 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

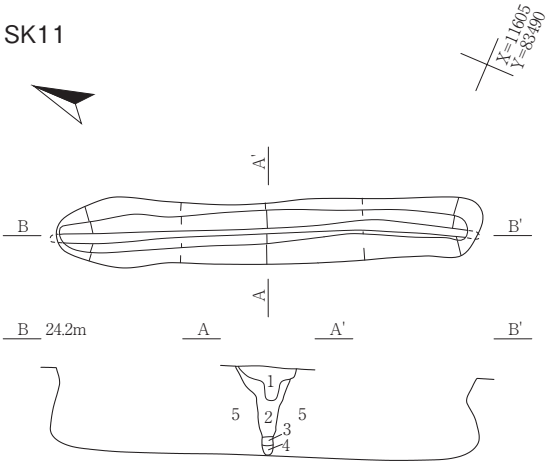
SK22 陥し穴状遺構（第 11 図、写真図版 12）

調査区北東側の X=11620・Y=83500 付近に位置する。遺構南半が SK23 と重複しており、本遺構が切られている。また、南端を生文課トレンチによって切られている。規模・形状は＜ 4.3 ＞× 1.2 mの溝状、深さは 0.96 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係と SK23 より古い、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK23 陥し穴状遺構（第 11 図、写真図版 12）

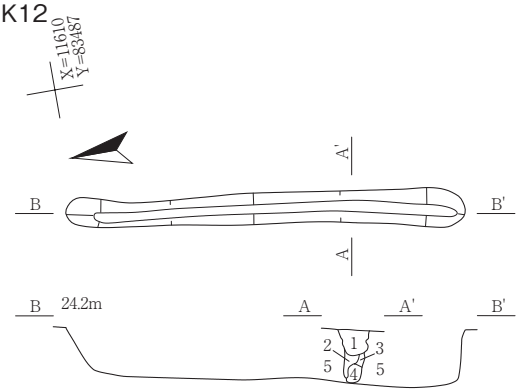
調査区北東側の X=11620・Y=83500 付近に位置する。遺構北半が SK22 と重複しており、本遺構が切っている。規模・形状は＜ 2.4 ＞× 0.95 mの溝状、深さは 0.4 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係と SK22 より新しい、縄文

SK11



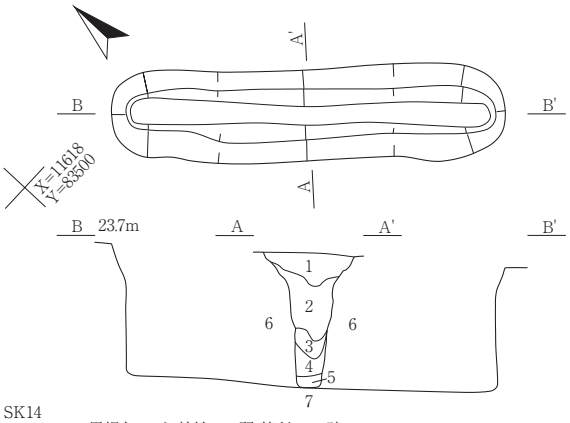
SK11
1 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎 壁面崩落土層
4 10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎 初期堆積土層
5 10YR5/8黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

SK12



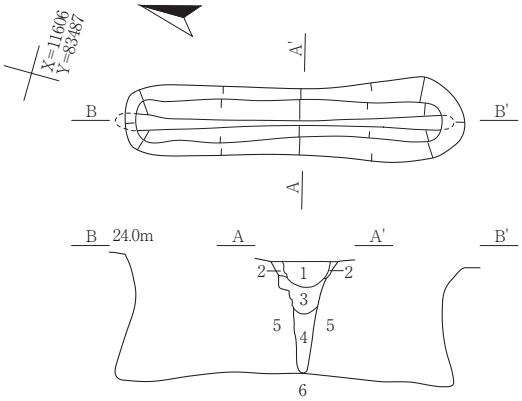
SK12
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁面崩落土層
3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 初期堆積土層
5 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性やや弱～中 締まりやや密 地山

SK14



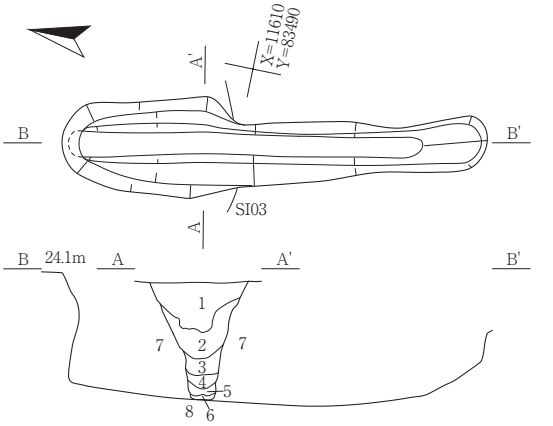
SK14
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
　下部は10YR6/6明黄褐色粘土質シルト分が多い
3 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 流入土
4 10YR7/6明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎 壁面崩落土層
5 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎 壁面崩落土層
6 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山
7 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

SK18



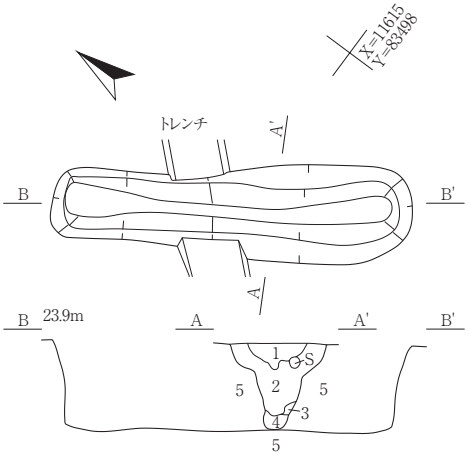
SK18
1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR2/3黒褐色シルト+10YR4/6褐色シルトの混合 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎
　10YR6/6明黄褐色粘土質シルト粒(φ1cm以下)を全体に散在
5 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
6 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性やや弱～中 締まりやや密 地山

SK19



SK19
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR6/8明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎
4 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR5/6黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎～中
6 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
7 10YR7/8黄橙色粘土 粘性やや弱 締まりやや密 地山
8 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性やや弱～中 締まり中 地山

SK21

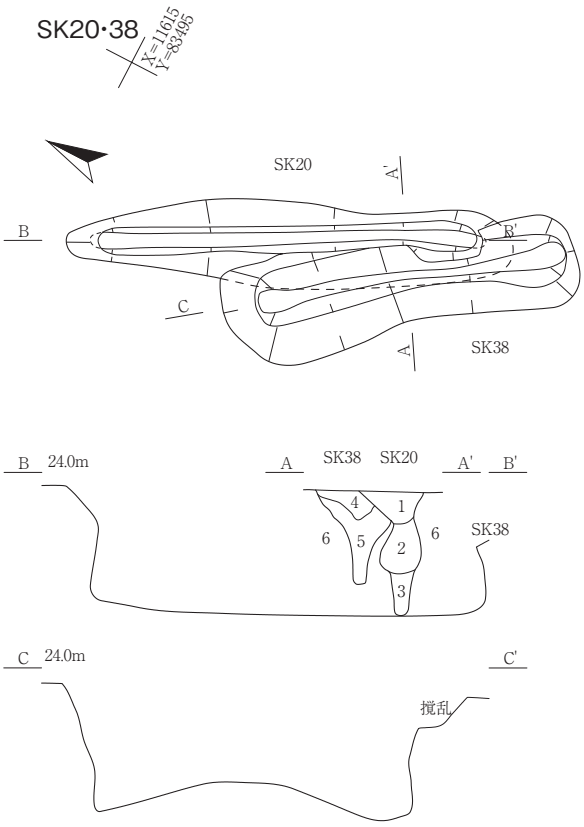


SK21
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR4/6褐色シルト+10YR3/3暗褐色シルトの混合 粘性やや弱 締まりやや疎～中
3 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中 壁面崩落土層
4 10YR3/4暗褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎
5 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

0　1:60　2m

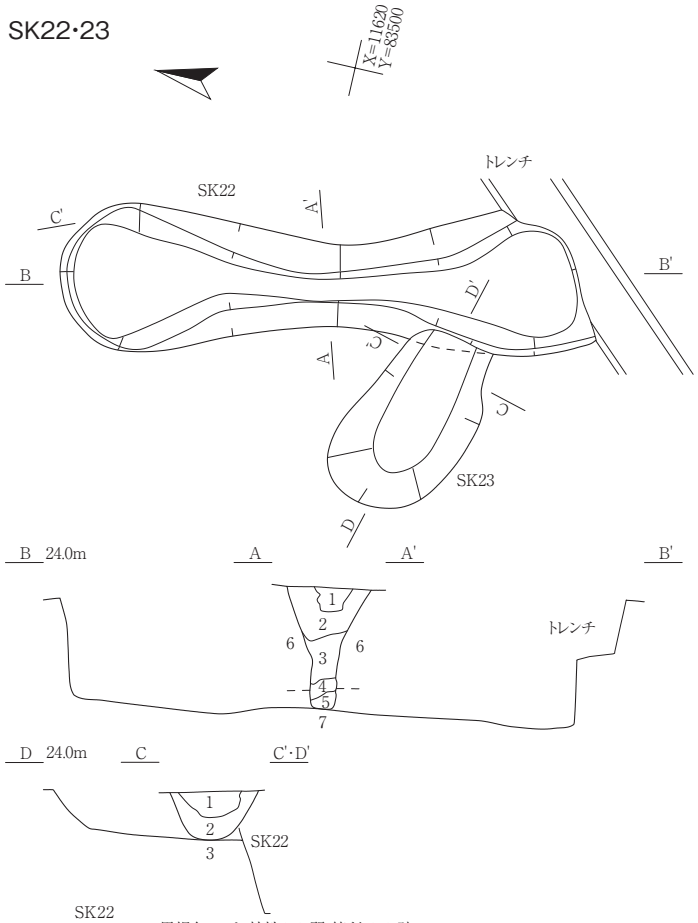
第10図　SK11・12・14・18・19・21陥し穴状遺構

SK20･38



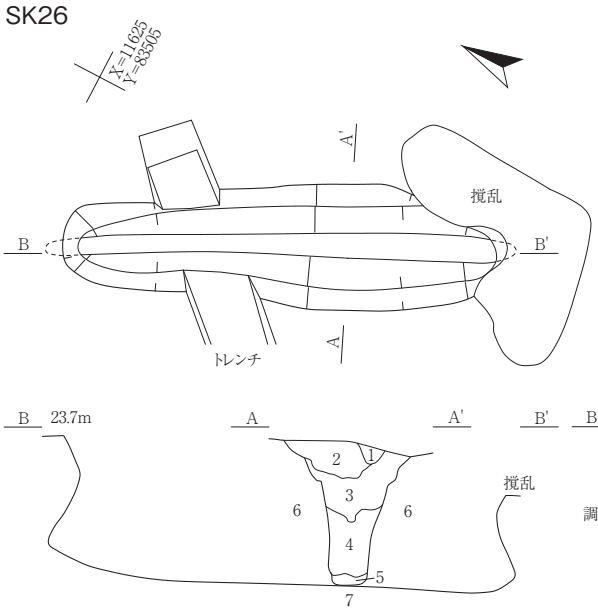
SK20･38
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR7/6明黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
　壁面崩落土層
4 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR4/6褐色シルト 粘性中 締まりやや疎+10YR2/3黒褐色シルト
　+10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合
6 10YR5/8黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

SK22･23



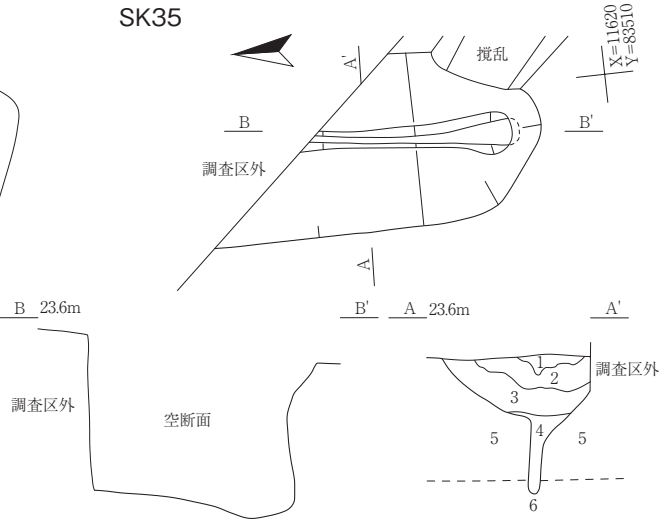
SK22
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まり中 壁面崩落土層
4 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まり中に
　10YR3/2黒褐色シルトブロック(5cm)散在
5 10YR7/4にぶい黄橙色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 地山崩落土層
6 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
7 10YR7/8黄橙色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
SK23
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

SK26



SK26
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎～中
2 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
　下部に10YR5/6黄褐色粘土質シルト分多い
4 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁面崩落土層
5 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎 初期堆積土層
6 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山
7 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

SK35



SK35
1 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎
5 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山
6 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

0　1:60　2m

第11図　SK20・22・23・26・35・38陥し穴状遺構

時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK26 陥し穴状遺構（第 11 図、写真図版 12）

調査区北東側の X=11625・Y=83505 付近に位置する。遺構中央を生文課トレンチ、遺構南端を撹乱に切られている。規模・形状は 3.55 × 1.0 mの溝状、深さは 1.15 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK27 陥し穴状遺構（第 12 図、写真図版 14）

調査区東側の X=11620・Y=83510 付近に位置する。遺構全体を撹乱によって切られている。また、遺構北側で SK47 と重複しており、本遺構が切っている。規模・形状は 2.8 × 1.55 mの溝状、深さは 1.55 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構と SK47 との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK35 陥し穴状遺構（第 11 図、写真図版 13）

調査区東端の X=11620・Y=83510 付近に位置する。遺構北半は調査区外、遺構南端は撹乱に切られている。規模・形状は（2.8）× 1.37 mの溝状、深さは 1.12 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK36 陥し穴状遺構（第 12 図、写真図版 12）

調査区中央東側の X=11615・Y=83502 付近に位置する。遺構全体を撹乱に切られている。また、遺構南端で SK42 と重複しており、本遺構が切っている。規模・形状は 4.04 × 0.4 mの溝状、深さは 0.73 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係と SK42 より新しいことから、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK37 陥し穴状遺構（第 12 図、写真図版 13）

調査区中央東側の X=11610・Y=83510 付近に位置する。遺構南西側で SK45 と重複しており、本遺構が切っている。また、遺構中央を生文課トレンチに切られている。規模・形状は 3.85 × 1.2 mの溝状、深さは 1.15 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係と SK45 より新しいことから、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK38 陥し穴状遺構（第 11 図、写真図版 11）

調査区中央北側の X=11615・Y=83495 付近に位置する。遺構北半が SK20 と重複しており、本遺構が切られている。規模・形状は 2.85 × 0.7 mの溝状、深さは 0.75 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係と SK20 より古い、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

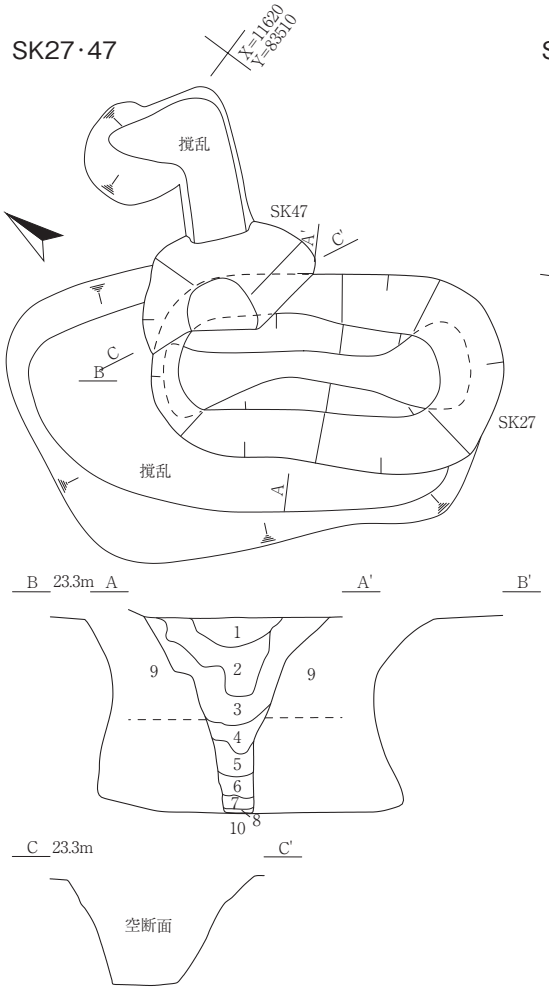
SK39 陥し穴状遺構（第 13 図、写真図版 15）

調査区南東側の X=11610・Y=83510 付近に位置する。遺構北端で撹乱と SI06 に切られている。規模・形状は 3.82 × 1.1 mの溝状、深さは 1.12 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係と SI06 より古いことから、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK41 陥し穴状遺構（第 13 図、写真図版 15）

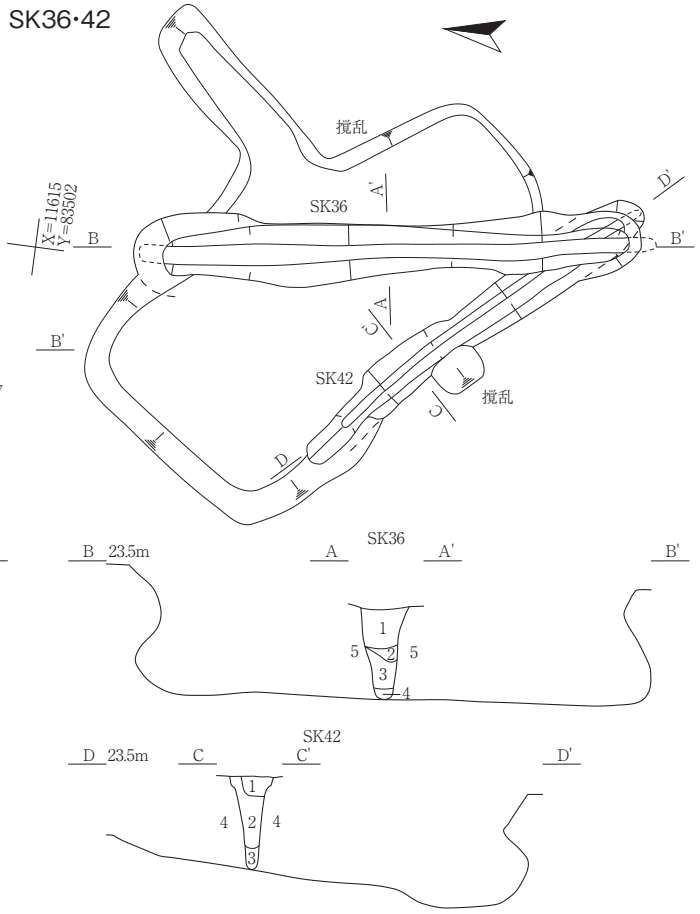
調査区中央東側の X=11608・Y=83500 付近に位置する。遺構中央を生文課トレンチに切られている。規模・形状は 3.62 × 1.52 mの両端が膨らむ溝状、深さは 1.52 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK27・47



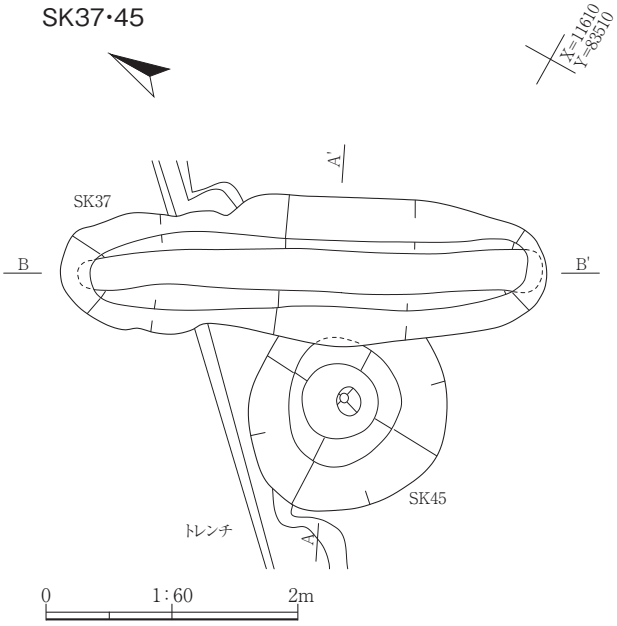
SK27
1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR5/8黄褐色粘土質シルトをブロックで全体に散在する
4 10YR5/8黄褐色粘土 粘性中 締まりやや疎 壁面崩落土層
5 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性中 締まり中
6 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 流入土
7 10YR7/4にぶい黄橙色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
壁面崩落土層(10層起源)
8 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり疎 初期堆積土層
9 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
10 10YR7/4にぶい黄橙色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 地山

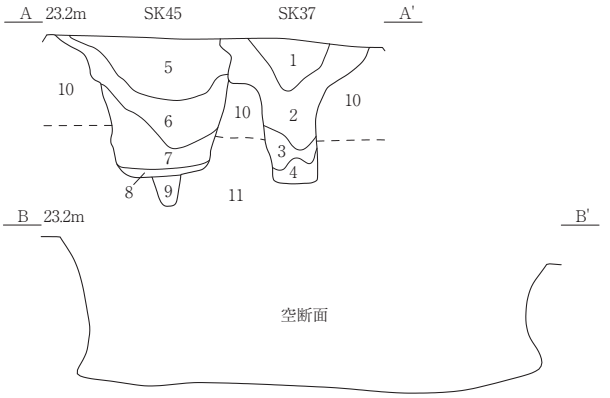
SK36・42



SK36
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
下部に10YR6/8明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中を堆積
2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まり中 壁面崩落土層
4 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎 初期堆積土層
5 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
SK42
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR6/6明黄褐色地山ブロック(φ5cm)少量
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR4/6褐色粘土 粘性中 締まり中 初期堆積土層
4 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

SK37・45





SK37
1 10YR1.7/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
主体に下部に10YR5/8黄褐色粘土質シルトブロック散在
3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎 壁面崩落土層
4 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 初期堆積土層
SK45
5 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
6 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 主体に
中央に10YR2/2黒褐色シルトを多く含む
7 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
8 10YR3/3暗褐色シルト 粘性中 締まりやや疎
9 10YR3/4暗褐色シルト 粘性中 締まりやや疎
10 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや疎 地山
11 10YR7/4にぶい黄橙色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎～中 地山

第12図　SK27・36・37・42・45・47陥し穴状遺構

SK42 陥し穴状遺構（第 12 図、写真図版 13）

調査区中央東側の X=11615・Y=83502 付近に位置する。遺構北側 2/3 を撹乱に、また南端を SK36 に切られている。規模・形状は 3.3 × 0.36 mの溝状、深さは 0.75 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係と SK36 より古いことから、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK43 陥し穴状遺構（第 13 図、写真図版 14）

調査区東端の X=11618・Y=83515 付近に位置する。遺構全体を SI06、北側を SK64 と重複しており、いずれも切られている。規模・形状は（1.5）× 0.7 mの溝状、深さは 0.82 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係と SI06・SK64 より古いことから、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK44 陥し穴状遺構（第 13 図、写真図版 15）

調査区中央東側の X=11610・Y=83501 付近に位置する。規模・形状は 3.25 × 0.75 mの溝状、深さは 0.9 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK50 陥し穴状遺構（第 14 図、写真図版 16）

調査区南西側の X=11590・Y=83494 付近に位置する。規模・形状は 5.2 × 0.83 mの両端が膨らむ溝状、深さは 1.14 mである。膨らむ部分の最大幅は 1.65 mある。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK51 陥し穴状遺構（第 14 図、写真図版 17）

調査区南西側の X=11594・Y=83485 付近に位置する。遺構中央で SK52 と重複しており、本遺構が古い。規模・形状は 3.78 × 0.7 mの溝状、深さは 1.08 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構と SK52 との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK52 陥し穴状遺構（第 14 図、写真図版 17）

調査区南西側の X=11594・Y=83485 付近に位置する。遺構中央で SK51 と重複しており、本遺構が新しい。規模・形状は 2.7 × 0.57 mの溝状、深さは 0.85 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構と SK51 との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK53 陥し穴状遺構（第 33 図、写真図版 17）

調査区南東側の X=11602・Y=83512 付近に位置する。規模・形状は 3.75 × 0.85 mの溝状、深さは 0.65 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

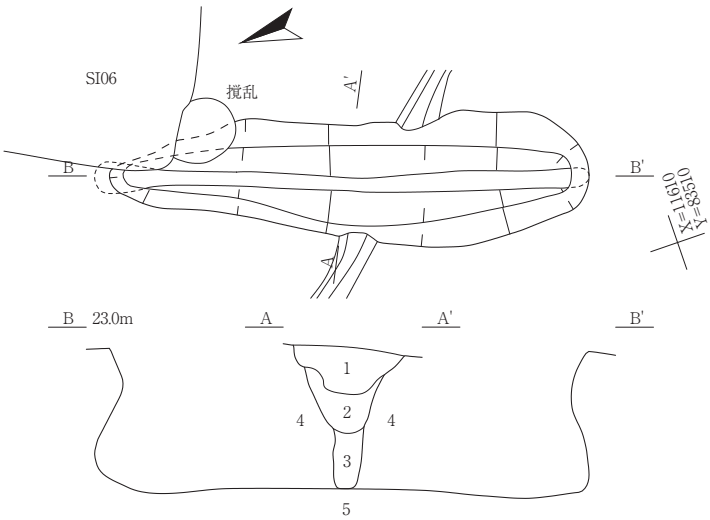
SK55 陥し穴状遺構（第 14 図、写真図版 16）

調査区中央南側の X=11591・Y=83498 付近に位置する。上面に To-Cu テフラを堆積する倒木痕を切っている。規模・形状は 3.98 × 0.8 mの溝状、深さは 0.86 mである。出土遺物はないが、前述の倒木痕との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK58 陥し穴状遺構（第 14 図、写真図版 17）

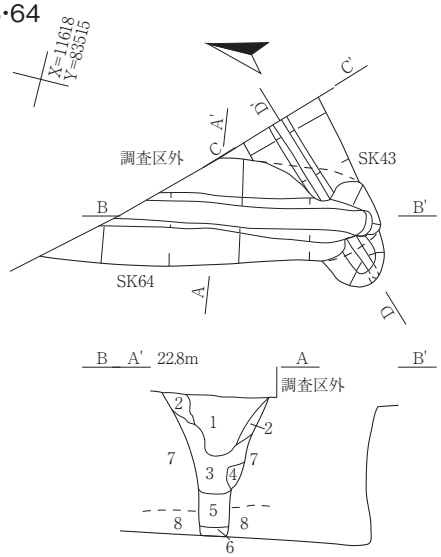
調査区南西側の X=11598・Y=83490 付近に位置する。遺構北側で SI02 と重複しており、切られている。規模・形状は 3.3 × 0.6 mの溝状、深さは 0.68 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築

SK39



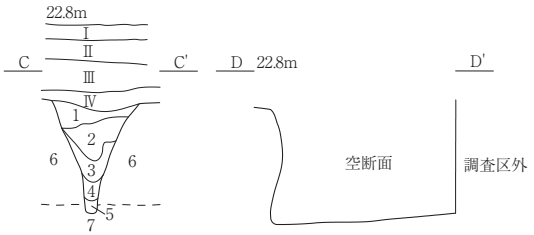
SK39
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 主体に 10YR2/3黒褐色シルトが斑状に堆積
3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁面崩落土層
4 10YR5/8黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
5 10YR6/4にぶい黄橙色細砂礫 粘性なし 締まりやや密 地山

SK43･64

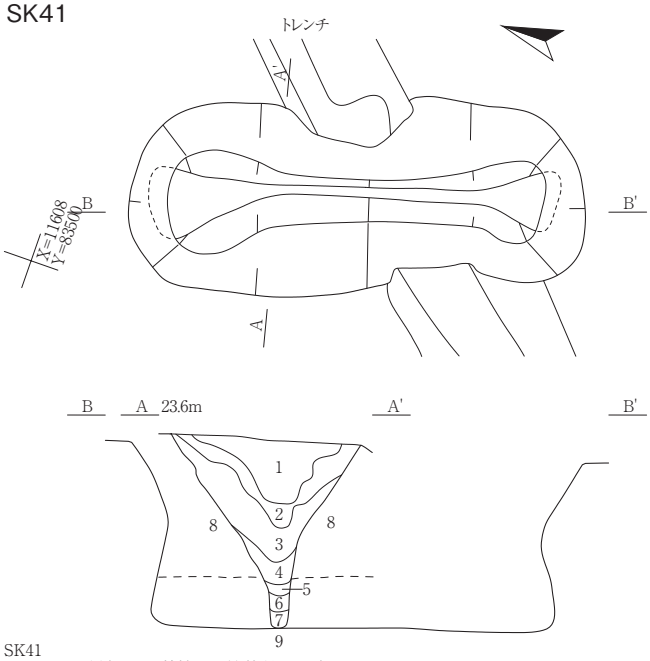


SK64
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR4/4褐色シルト+10YR5/8黄褐色粘土質シルトの混合
粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎～中
5 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
6 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
7 10YR5/6黄褐色粘土 粘性やや弱 締まりやや密 地山
8 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SK43
Ⅰ 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 表土
Ⅱ 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 耕作土
Ⅲ 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 古墳未検出層
Ⅳ 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 縄文陥し穴検出層
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 1層と10YR4/6褐色シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁崩落土層
4 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁崩落土層
5 10YR4/4褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 初期堆積土層
6 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
7 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性やや弱 締まりやや密 地山

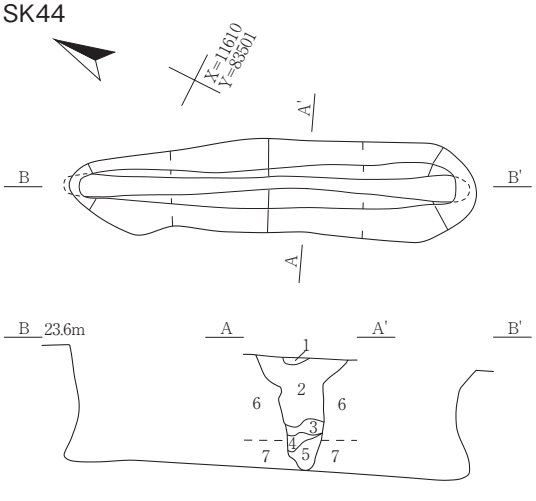


SK41



SK41
1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR2/3黒褐色シルト+10YR5/8黄褐色粘土質シルトの混合土
粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎
5 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
6 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
7 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 初期堆積土層
8 10YR5/8黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
9 10YR7/4にぶい黄橙色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 地山

SK44

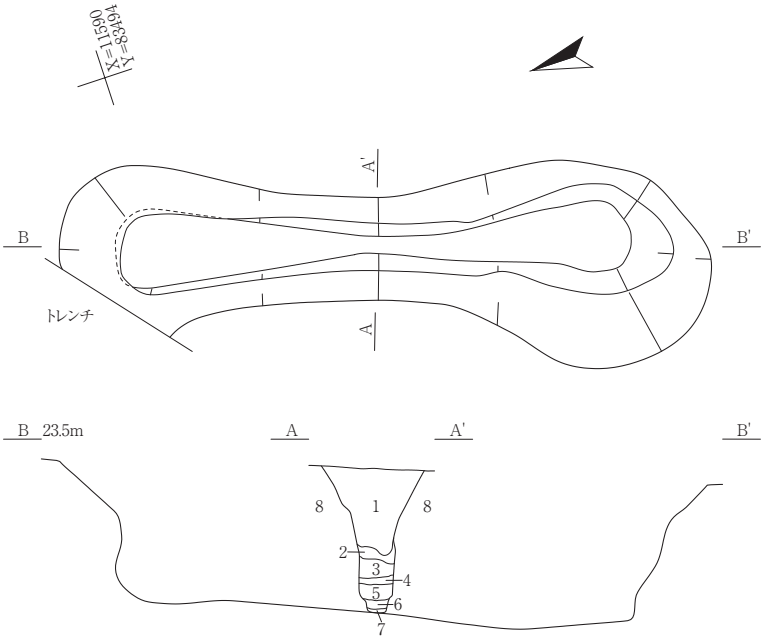


SK44
1 10YR6/8明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR5/6黄褐色粘土質ブロック全体に散在
3 10YR5/6黄褐色粘土 粘性やや弱～中 締まりやや疎
4 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR7/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎
6 10YR5/8黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
7 10YR6/4にぶい黄橙色細砂礫 粘性なし 締まりやや密 地山

0　1:60　2m

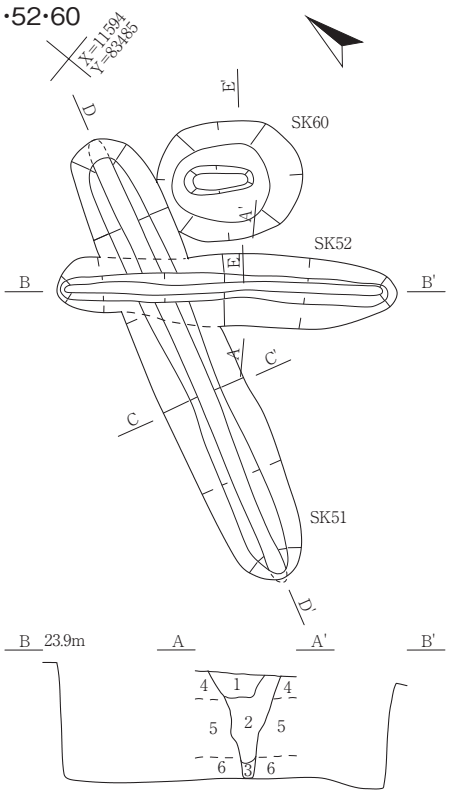
第13図　SK39・41・43・44・64陥し穴状遺構

SK50

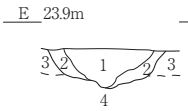


SK50
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎
3 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
6 10YR7/4にぶい黄橙色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
7 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎
8 10YR7/8黄橙色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

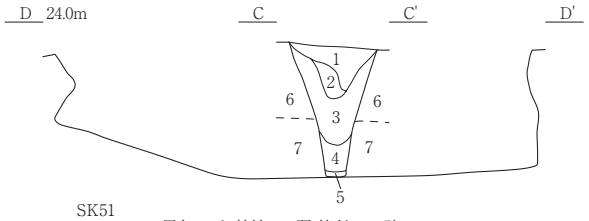
SK51・52・60



SK52
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR6/6明黄褐色粘土ブロック地山(5mm～1cm)全体に散在
3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎 初期堆積土層
4 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 基層
5 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
6 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

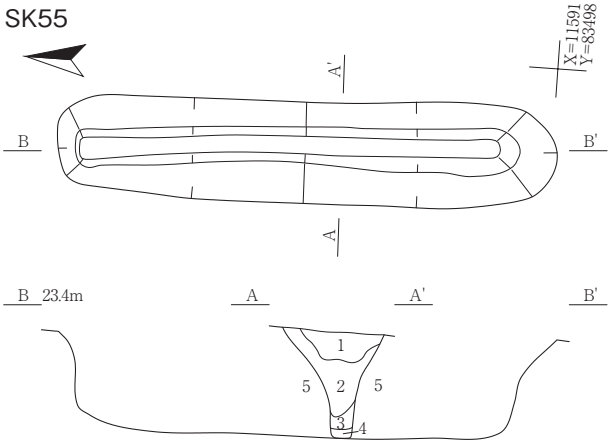


SK60
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 3層より濃い
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 基層
4 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山



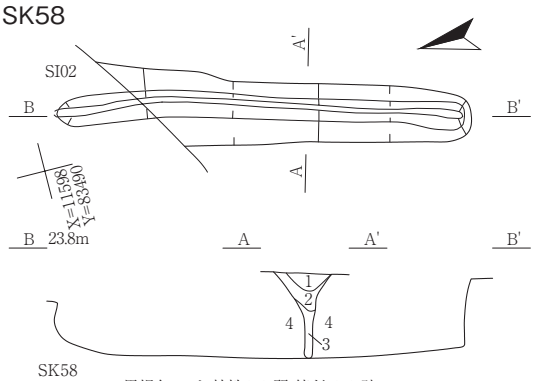
SK51
1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルトブロック(5cm)少量散在
3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 主体に
10YR7/6明黄褐色粘土ブロックを全体に多量散在
4 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎 壁面崩落土層
5 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
6 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
7 10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 地山

SK55



SK55
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎を全体に散在
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 壁面崩落土層
4 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

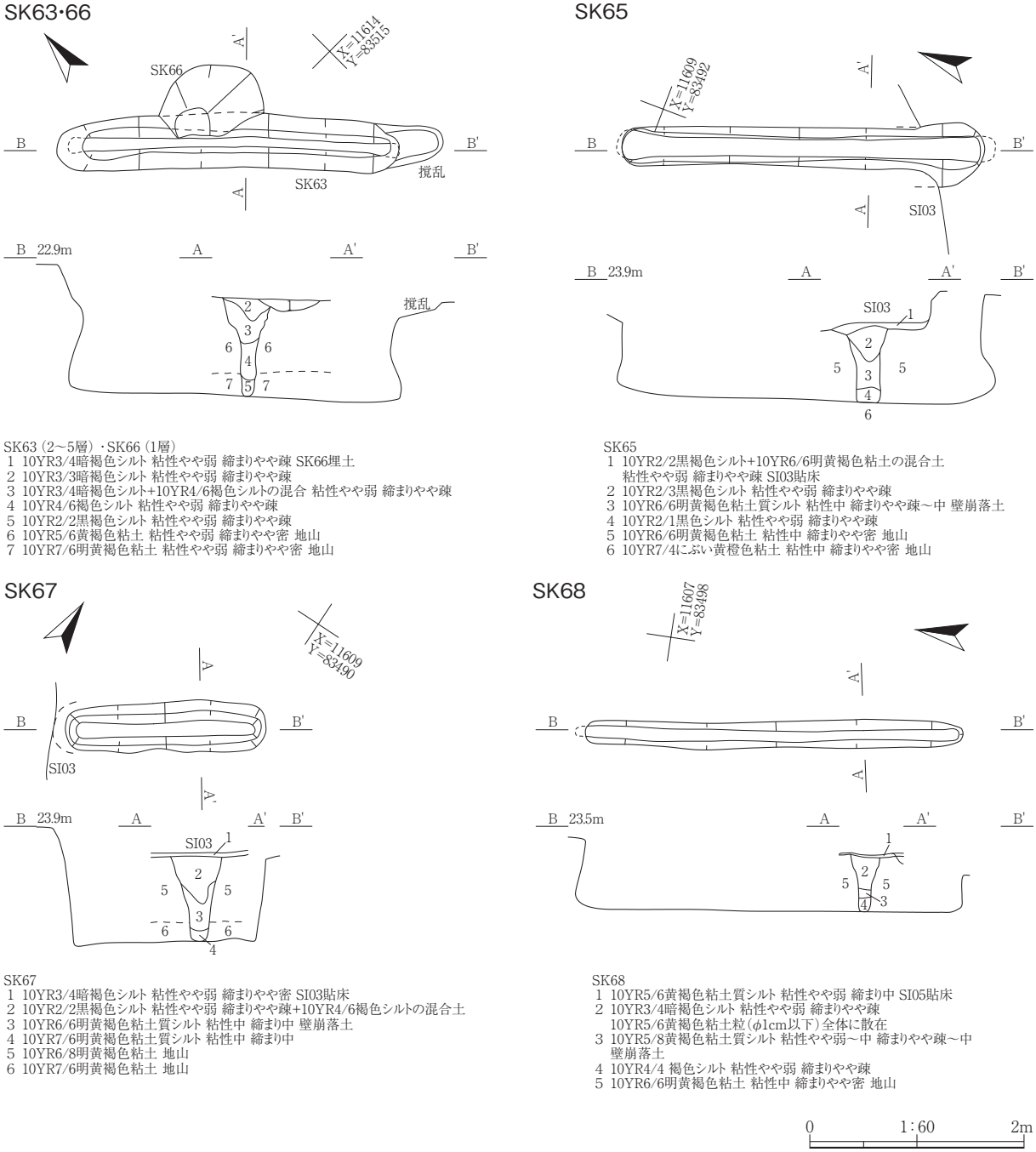
SK58



SK58
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/2黒褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎～中
4 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

0　1:60　2m

第14図　SK50～52・55・58陥し穴状遺構、SK60土坑



SK63（2～5層）・SK66（1層）
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 SK66埋土
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/4暗褐色シルト+10YR4/6褐色シルトの混合 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
6 10YR5/6黄褐色粘土 粘性やや弱 締まりやや密 地山
7 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SK65
1 10YR2/2黒褐色シルト+10YR6/6明黄褐色粘土の混合土
粘性やや弱 締まりやや疎 SI03貼床
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎～中 壁崩落土
4 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
6 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

SK67
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密 SI03貼床
2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎+10YR4/6褐色シルトの混合土
3 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中 壁崩落土
4 10YR7/6明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中
5 10YR6/8明黄褐色粘土 地山
6 10YR7/6明黄褐色粘土 地山

SK68
1 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 SI05貼床
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR5/6黄褐色粘土粒（φ1cm以下）全体に散在
3 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎～中
壁崩落土
4 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

第15図　SK63・65～68陥し穴状遺構

されたと考えられる。

SK63 陥し穴状遺構（第 15 図、写真図版 18）

調査区東端の X=11614･Y=83515 付近に位置する。遺構全体で SI06、中央で SK66 と重複しており、前者に切られて、後者を切っている。規模・形状は 3.2 × 0.5 mの溝状、深さは 0.9 mである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構と SK66 の重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK64 陥し穴状遺構（第 13 図、写真図版 14）

調査区東端の X=11618･Y=83515 付近に位置する。遺構全体を SI06、南側を SK43 と重複しており、前者は切られ、後者は切っている。規模・形状は（2.7）× 0.84 mの溝状、深さは 1.12 mである。出

土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構との重複関係と SI06 より古く、SK43 より新しいことから、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK65 陥し穴状遺構（第 15 図、写真図版 18）

調査区中央西側の X=11609・Y=83492 付近に位置する。遺構全体で SI03 と重複しており、本遺構が切られている。規模・形状は 3.4 × 0.6 ｍの溝状、深さは 0.7 ｍである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構と SI03 の重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK67 陥し穴状遺構（第 15 図、写真図版 18）

調査区中央西側の X=11609・Y=83490 付近に位置する。遺構全体で SI03 と重複しており、本遺構が切られている。規模・形状は 1.88 × 0.48 ｍの溝状、深さは 0.78 ｍである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構と SI03 の重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

SK68 陥し穴状遺構（第 15 図、写真図版 18）

調査区中央の X=11607・Y=83498 付近に位置する。遺構全体で SI05 と重複しており、本遺構が切られている。規模・形状は 3.53 × 0.27 ｍの溝状、深さは 0.51 ｍである。出土遺物はないが、遺構上面に To-Cu テフラを堆積する円形基調の陥し穴状遺構と SI05 の重複関係から、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

＜古　　代＞

（１）竪 穴 住 居 跡

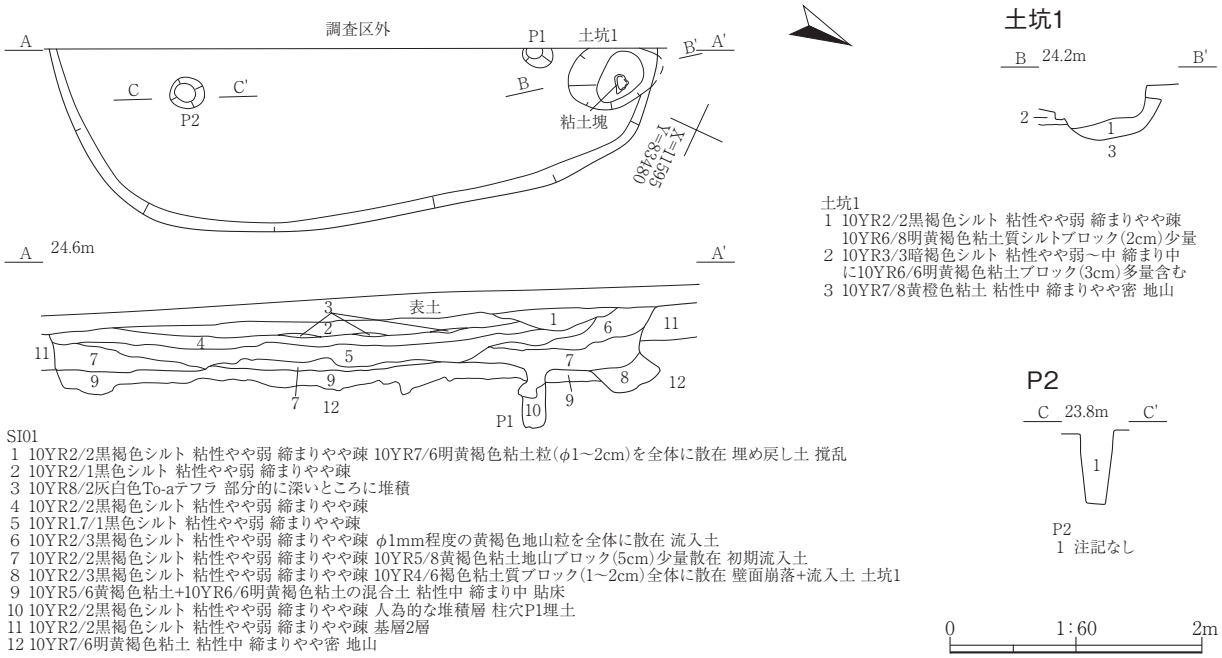
ＳＩ01 竪穴住居跡（第 16・17 図、写真図版 19）

調査区西端の X=11595・Y=83480 付近に位置する。調査区境界にあり、遺構の 1/4 程度を検出した。遺構内で SK59 と重複するが、本遺構が新しい。規模は、残存値で 4.8 ×（1.45）ｍで遺構の大半が調査区外にある。形状は､検出部分から隅丸方形を呈すると考えられる。床面は貼床されており、ほぼ平坦に構築されている。遺構の残存が良好で、北壁が約 50㎝、南壁が約 30㎝あり、床面から壁面にかけて急斜度に立ち上がる形状である。埋土は、10 層に分けられ、埋土上位の３層に灰白色のＴｏ－ａテフラを堆積している。床面は、黄褐色～明黄褐色粘土の貼床が施されており、層厚は約 10㎝で堅緻に造られている。床面から、柱穴状土坑２個を検出した。Ｐ１が深さ 45㎝、Ｐ２が 50㎝あり、いずれも主柱穴と考えられる。また、床面北東隅から土坑１を確認した。0.8 × 0.5 ｍ・深さ 20㎝の不整円形で､北側は壁面下にやや潜り込んでいる。底面からは灰白色の粘土塊を出土しており、おそらくカマド右側の貯蔵用土坑と考えられる。

埋土１～２層から、内面黒色処理の８坏と９甕が出土した。上層からロクロ成形の坏が出土しているが、Ｔｏ－ａテフラの堆積位置が SI04・05・07 と同じことから、古墳時代後期～末に所属すると考えられる。

ＳＩ02 竪穴住居跡（第 18・19 図、写真図版 20）

調査区中央西側の X=11600・Y=83490 付近に位置する。遺構北側で SK56、遺構南側で SK57・58 と重複するが、いずれも本遺構が新しい。規模・形状は、4.1 × 4.3 ｍの隅丸方形を呈する。床面には貼床が施されており、ほぼ平坦に構築されている。貼床の層厚は約 10㎝で、中央が高く、周りはより掘り込まれている。遺構は上部を削平されており、立ち上がりは約 10㎝。壁面は残存が不良であるが、床面から急斜度に立ち上がる形状である。埋土は、貼床も含めて計７層に分けられ、埋土



土坑1
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR6/8明黄褐色粘土質シルトブロック(2cm)少量
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱～中 締まり中 に10YR6/6明黄褐色粘土ブロック(3cm)多量含む
3 10YR7/8黄橙色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

SI01
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR7/6明黄褐色粘土粒(φ1～2cm)を全体に散在 埋め戻し土 撹乱
2 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR8/2灰白色To-aテフラ 部分的に深いところに堆積
4 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR1.7/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
6 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 φ1mm程度の黄褐色地山粒を全体に散在 流入土
7 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/8黄褐色粘土地山ブロック(5cm)少量散在 初期流入土
8 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR4/6褐色粘土質ブロック(1～2cm)全体に散在 壁面崩落+流入土 土坑1
9 10YR5/6黄褐色粘土+10YR6/6明黄褐色粘土の混合土 粘性中 締まり中 貼床
10 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 人為的な堆積層 柱穴P1埋土
11 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 基層2層
12 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

P2
1 注記なし

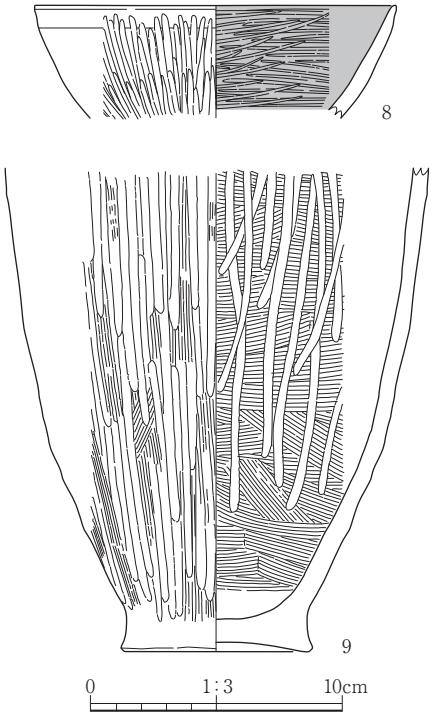
第16図　ＳＩ01竪穴住居跡

最上位にはにぶい黄橙色のＴｏ－ａテフラが２～３㎝の厚さで堆積している。貼床を施した床面を確認したが、主柱穴など柱穴状土坑は検出できなかった。貼床を剥がした段階でも検出されなかったことから、浅い凹みか、平坦面に柱を据えた可能性がある。北壁の中央に、カマド１基を検出した。カマドは床面よりもやや高く造られていると考えられる。カマド袖の基部は削り出しで構築されているが、検出段階でほとんど残存しない状況である。カマド煙道部は、長さ約１ｍ・幅約 0.4 ｍで、煙出し部へ向かって徐々に上がる。袖部の間には燃焼部があると思われるが、明確な被熱の痕跡は確認されなかった。

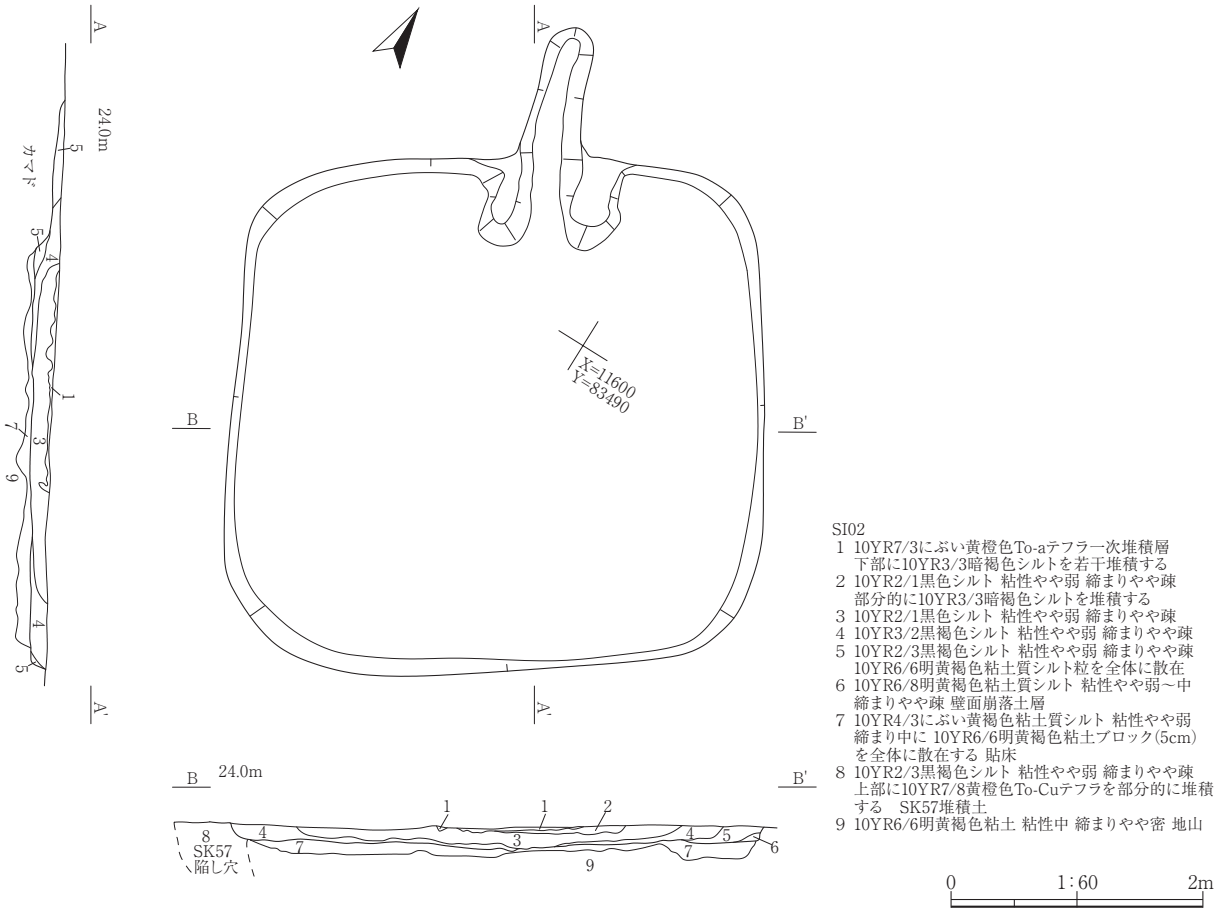
遺構検出時に、３層上面から 10・11 甕が出土した。同一個体と考えられる。また、３層中からは７石鏃も出土したが、縄文時代の所産と見られ、混入したものと考えられる。

ＳＩ03竪穴住居跡（第20・21図、写真図版21）

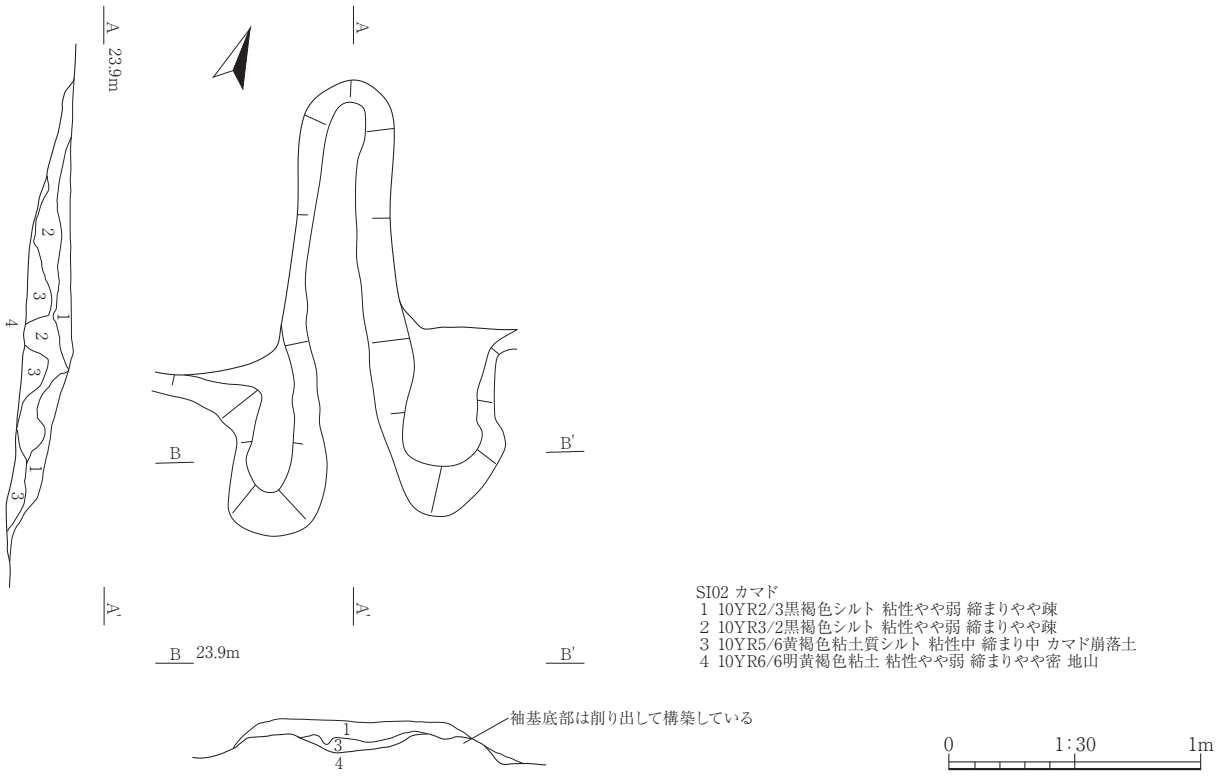
調査区中央の X=11608・Y=83490 付近に位置する。遺構北側で SK19、中央で SK67、南側で SK65 と重複するが、本遺構が新しい。規模・形状は、4.15 × 4.5 ｍでカマドが設置される南北壁がやや長い隅丸方形を呈する。床面には貼床が施されており、ほぼ平坦に構築されている。層厚は 10 ～ 20㎝で、北西側が高く、それ以外はより掘り込まれている。壁際には、北西壁の一部を除いて深さ約５㎝の壁溝が巡っている。壁は、この壁溝から急斜度に立ち上がっている。埋土は、貼床も含めて９層で構成され、埋土中位の６層にはにぶい黄橙色のＴｏ－ａテフラが認められる。また、２層中にはブロック状のＴｏ－ａテフラが混入しており、流入土に混入したものと考えられる。床面に、柱穴状土坑１個を確認した。Ｐ１は南隅にあるが、浅く皿状の断面形を呈する。主柱穴とは捉え難い



第17図　ＳＩ01竪穴住居跡出土遺物



カマド



第18図　SI02竪穴住居跡

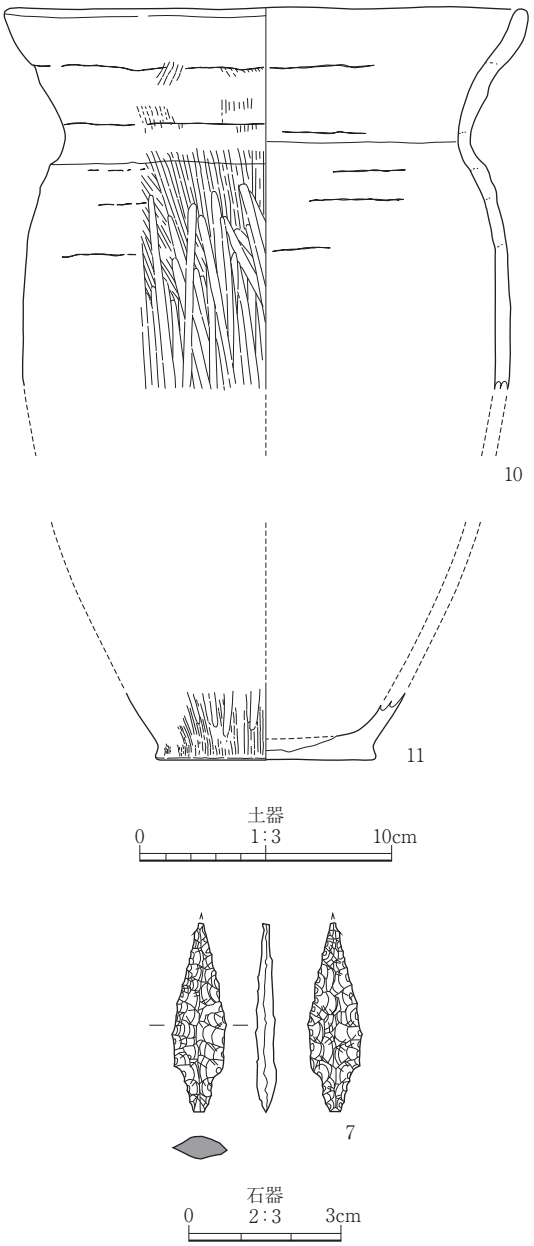
が、この他には検出できなかった。SI02 同様に貼床を剥がした段階でも検出されなかったことから、浅い凹みか、平坦面に柱を据えた可能性がある。北東壁の中央に、カマド１基を検出した。カマドの燃焼部付近には生涯学習文化課の試掘トレンチがちょうど通っており、すでに燃焼面まで露出した状態であった。検出面には亜円礫が散在しており、カマド構築材として使用していた礫を廃棄する際に破壊したものと考えられる。袖部には、芯材として礫が据えられていた痕跡が確認できる。カマド煙道部には、いくつか残存した礫があり、土留めのために両端に直線的に並べられていたことが分かる。煙道は、長さ 0.9 m、幅 0.7 mと他に比べても短い。また、煙道部の入口と燃焼部と思われる焼土はやや離れており、住居内に煙道が食い込んだ形状が想定される。燃焼部は、0.6 × 0.6 mの不整方形の強変焼土で、中央の 0.4 × 0.3 mはさらに被熱の度合いが高く、ガリガリに硬化している。カマドのすぐ右側に、カマドにやや入り込む形で、土坑１を検出した。0.5 × 0.4cmの略円形で、底面に略完形の 12 甕を出土している。また、北西壁の南半に土坑２を検出した。住居内から見ると、壁にかまくら状に入り込んだ形状を呈している。当初は重複する別遺構の可能性を考えていたが、埋土の状況とこの部分のみ壁溝が存在しないことから本遺構に伴う土坑と判断した。

床面を中心に 12・13 甕、14・15 壺、32 礫、36・37 金属製品、コハク２点が出土した。

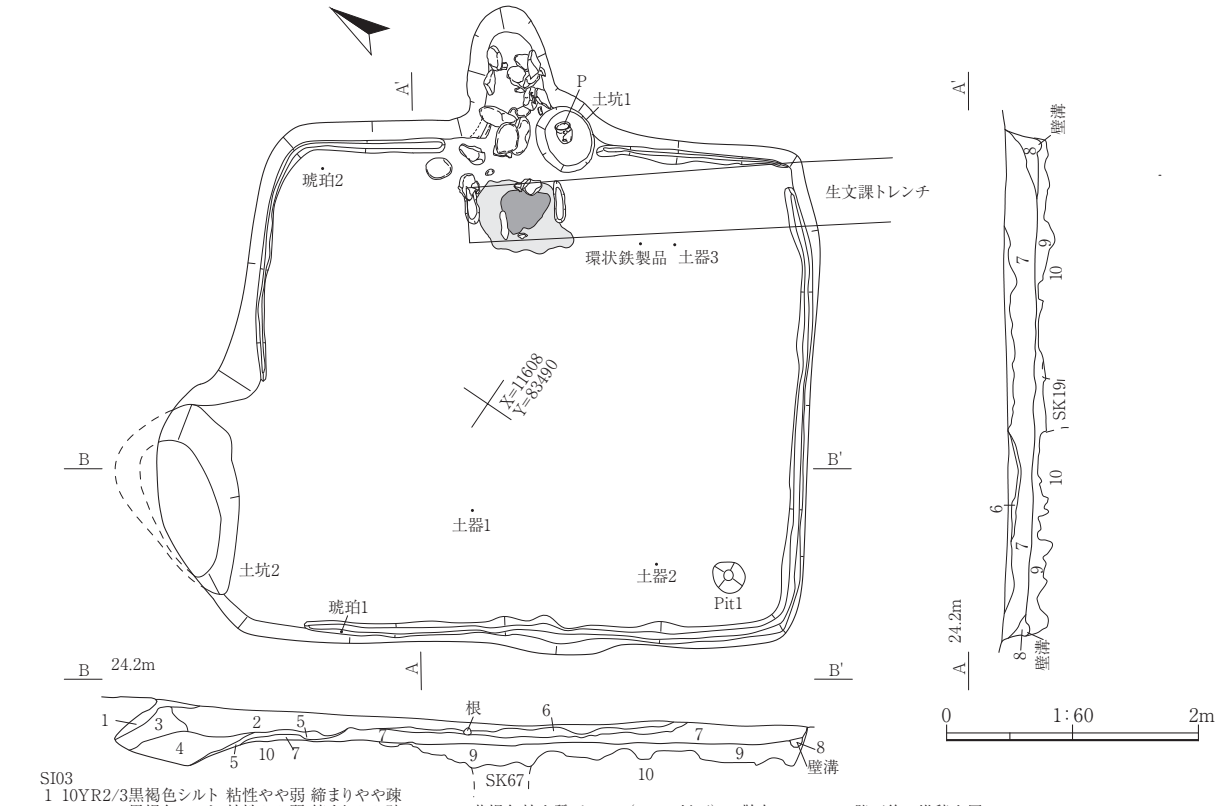
床面からの出土遺物と、埋土中位に確認したＴｏ－ａテフラの堆積状況から、古墳時代後期～末に所属すると考えられる。

ＳＩ04 竪穴住居跡（第 22・23 図、写真図版 22・23）

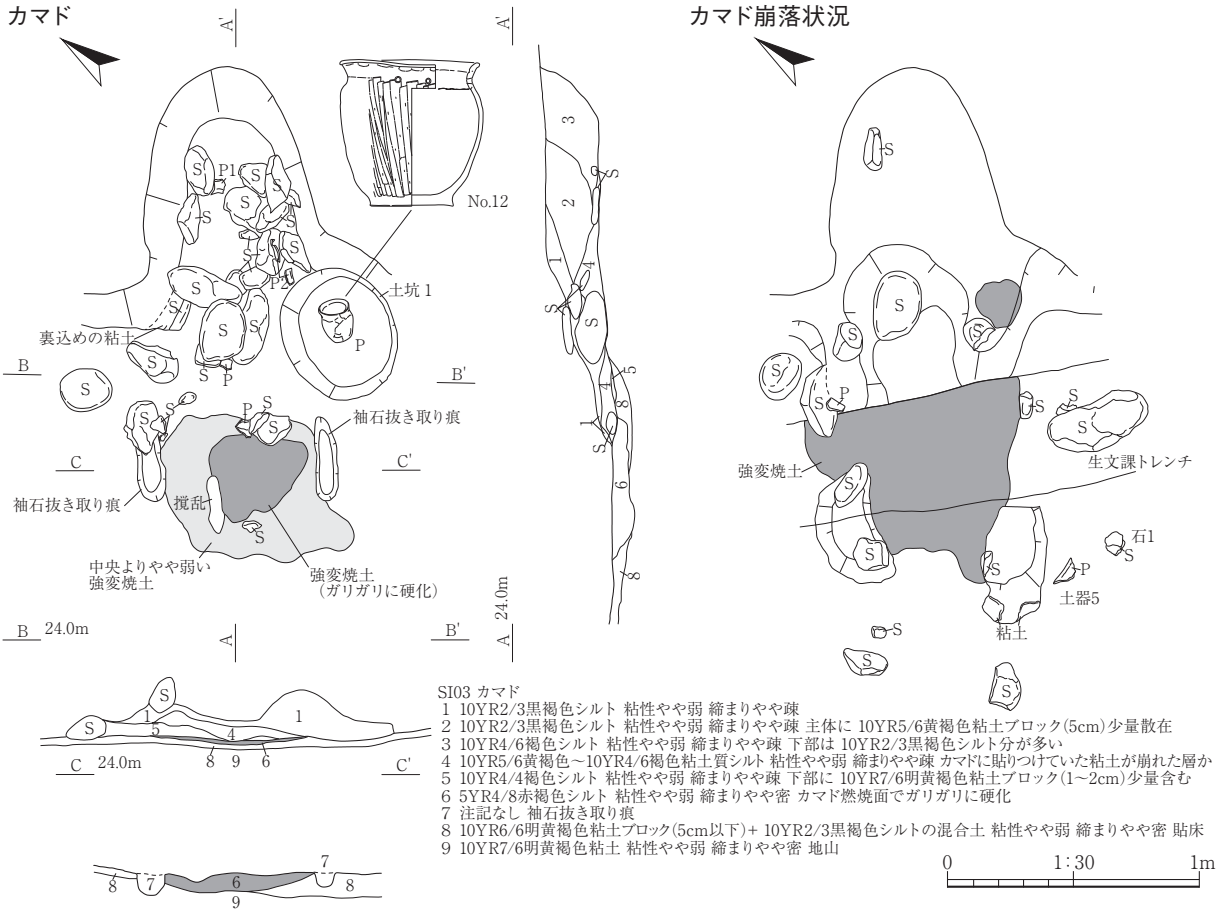
調査区西側の X=11592・Y=83489 付近に位置する。重複する遺構はないが、遺構南辺は生文課の試掘トレンチで失われている。規模・形状は、3.3 × 3.4 m の隅丸方形を呈する。床面は貼床が施されており、ほぼ平坦に構築されている。貼床の厚さは約 10cmで、中央がやや高く、周りが掘り込まれている。壁際には深さ約５cmの細い周溝が巡っており、板壁を施した痕跡の可能性もある。壁は開口部がやや開く形状となっているが、埋土の壁際に崩落土と思われる８層が堆積していることから、当初は急斜度に立ち上がる形状だったと考えられる。埋土は貼床も含めて 11 層で構成され、埋土上位の２層ににぶい黄橙色のＴｏ－ａテフラが厚さ１～３cm堆積している。層位の下部の粒子が大きいことから、下部が一次堆積、上部が二次堆積層と考えられる。また、埋土中位の４層にもＴｏ－ａテフラと思われる堆積が厚さ３㎜ほどで確認されており、噴火単位の時間差の可能性もある。また、床面直上ではなく埋土下位の６層に焼土層があることから、廃絶後に時間をおいてから焼失した可能性がある。図示した焼土範囲・炭化材は、



第19図　SI02竪穴住居跡出土遺物



SI03
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質ブロック(φ5cm以下)5%散在 To-aテフラ降下後の堆積土層
3 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性やや弱～中 締まり中
6 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 層中に 10YR7/4にぶい黄橙色To-aテフラ二次堆積層 部分的に筋状堆積
7 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR6/8明黄褐色粘土ブロック(φ2cm)5%散在
8 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR6/8明黄褐色粘土ブロック(φ2cm)5～7%散在 壁面崩落含む
9 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎～中 10YR6/8明黄褐色粘土ブロック(φ2～3cm)多量散在 貼床
10 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性やや弱 締まりやや疎 地山



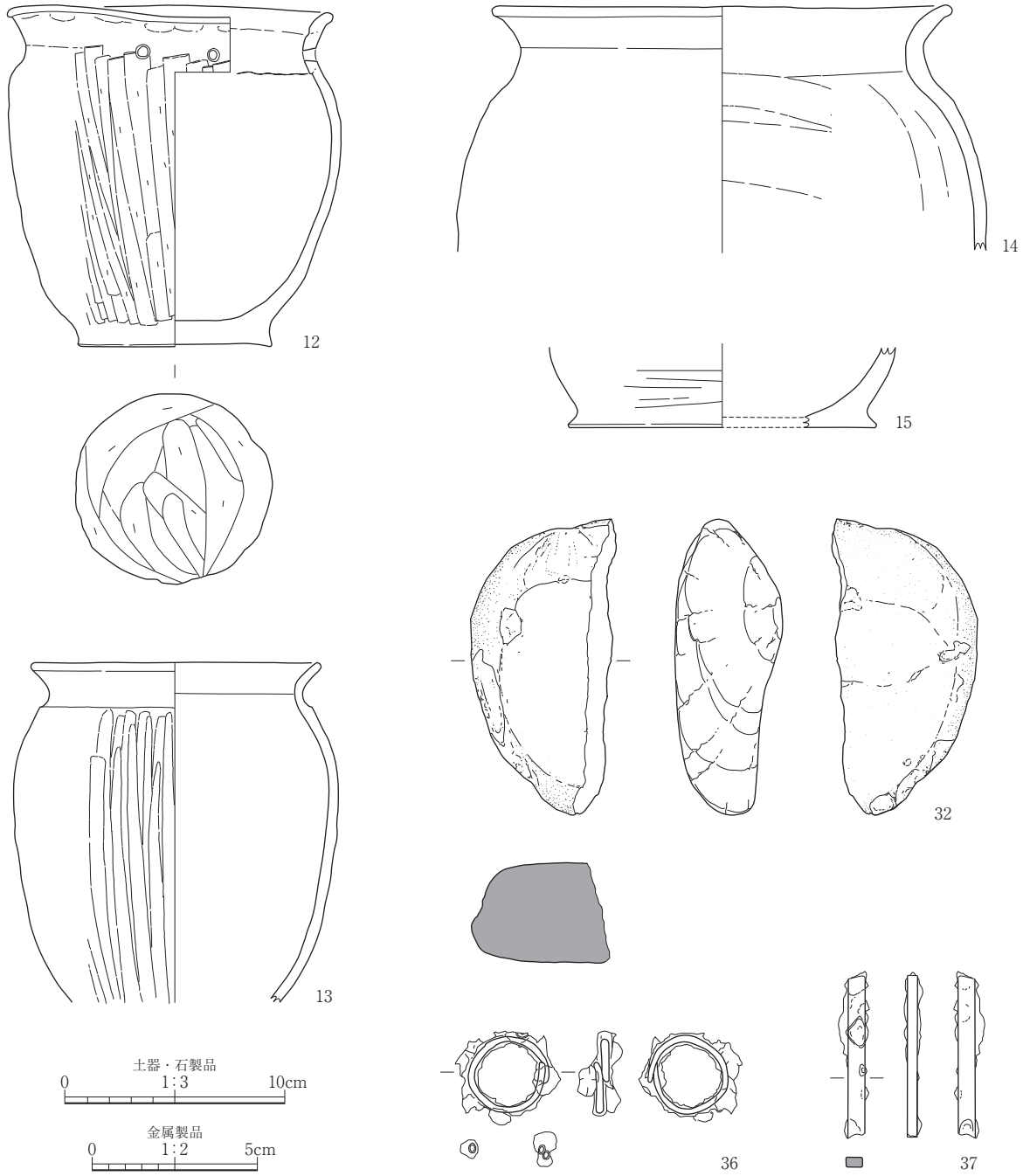
SI03 カマド
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 主体に 10YR5/6黄褐色粘土ブロック(5cm)少量散在
3 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部は 10YR2/3黒褐色シルト分が多い
4 10YR5/6黄褐色～10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 カマドに貼りつけていた粘土が崩れた層か
5 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に 10YR7/6明黄褐色粘土ブロック(1～2cm)少量含む
6 5YR4/8赤褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密 カマド燃焼面でガリガリに硬化
7 注記なし 袖石抜き取り痕
8 10YR6/6明黄褐色粘土ブロック(5cm以下)+ 10YR2/3黒褐色シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや密 貼床
9 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性やや弱 締まりやや密 地山

0　1:30　1m

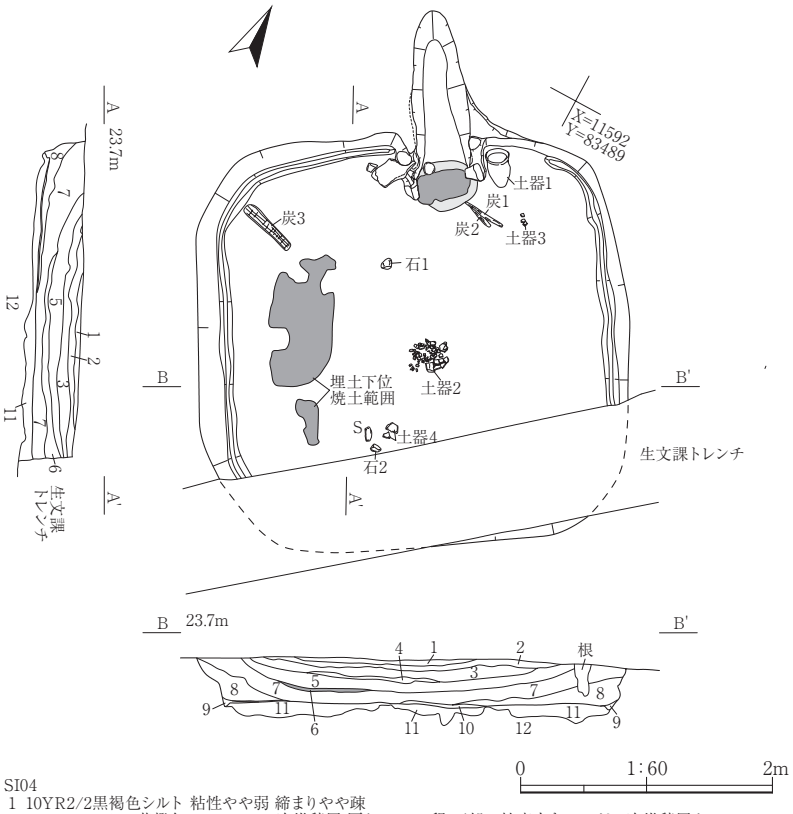
第20図　SI03竪穴住居跡

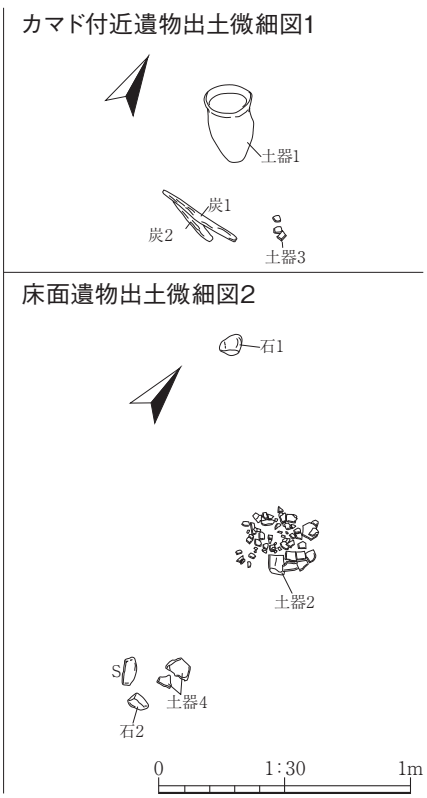
床面からやや浮いた埋土下位に広がると見られる。柱穴など床面施設は確認できなかった。SI03 同様に貼床を剥がした段階でも検出されなかったことから、浅い凹みか、平坦面に柱を据えた可能性がある。北西壁の中央やや東寄りにカマド１基を検出した。規模･形状は､煙道部が約 1.1 × 0.45 ｍで、煙出し部に向かって緩やかに立ち上がる断面形状である。燃焼部は、50 × 40㎝の楕円形の焼成面を持ち、中央の 40 × 23㎝はさらに被熱の度合いが高く、ガリガリに硬化している。被熱した上面には亜円礫１個が設置されており、支脚として利用されたと考えられる。

床面から出土した遺物を中心に、16 坏、17 ～ 19 甕、33 礫の５点を掲載した。16 は有段内黒坏、17 甕はカマド右側から正位で出土した。17･18 甕はともにハケ目後に縦位の粗いミガキが施される。床面からの出土遺物と、埋土上位に確認したＴｏ－ａテフラの堆積状況から、古墳時代後期～末に所属すると考えられる。



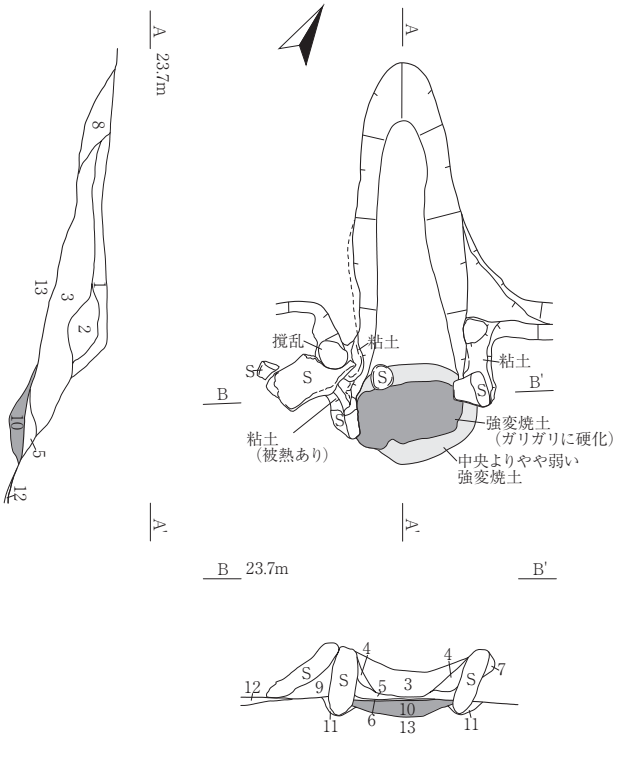
第21図　SI03竪穴住居跡出土遺物





SI04
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR7/3にぶい黄橙色To-aテフラ二次堆積層 厚さ1～3cm程 下部の粒度大きいのが一次堆積層か
3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR7/3にぶい黄橙色To-a様テフラ堆積層 厚さ3mm程に薄く堆積
5 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 黒ボク流入土層
6 5YR4/8赤褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 強変焼土層 埋没後に上屋を焼いたか
7 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
8 10YR2/3黒褐色シルトに 10YR7/6明黄褐色粘土質シルトが流入している 壁面崩落土含む 床面には1cm程の炭化物層を堆積
9 10YR3/3暗褐色シルト+10YR7/6明黄褐色粘土質シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや疎 壁面崩落土層含む 壁溝
10 10YR2/1黒色シルト 粘性中 締まりやや疎 炭化物層
11 10YR3/3暗褐色シルト+ 10YR7/6明黄褐色粘土質シルトの混合 粘性やや弱 締まりやや密 貼床(→床面全体に敷設、カマド周辺はないためカマド構築後に床を貼ったか)
12 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性やや弱 締まり密 地山

カマド



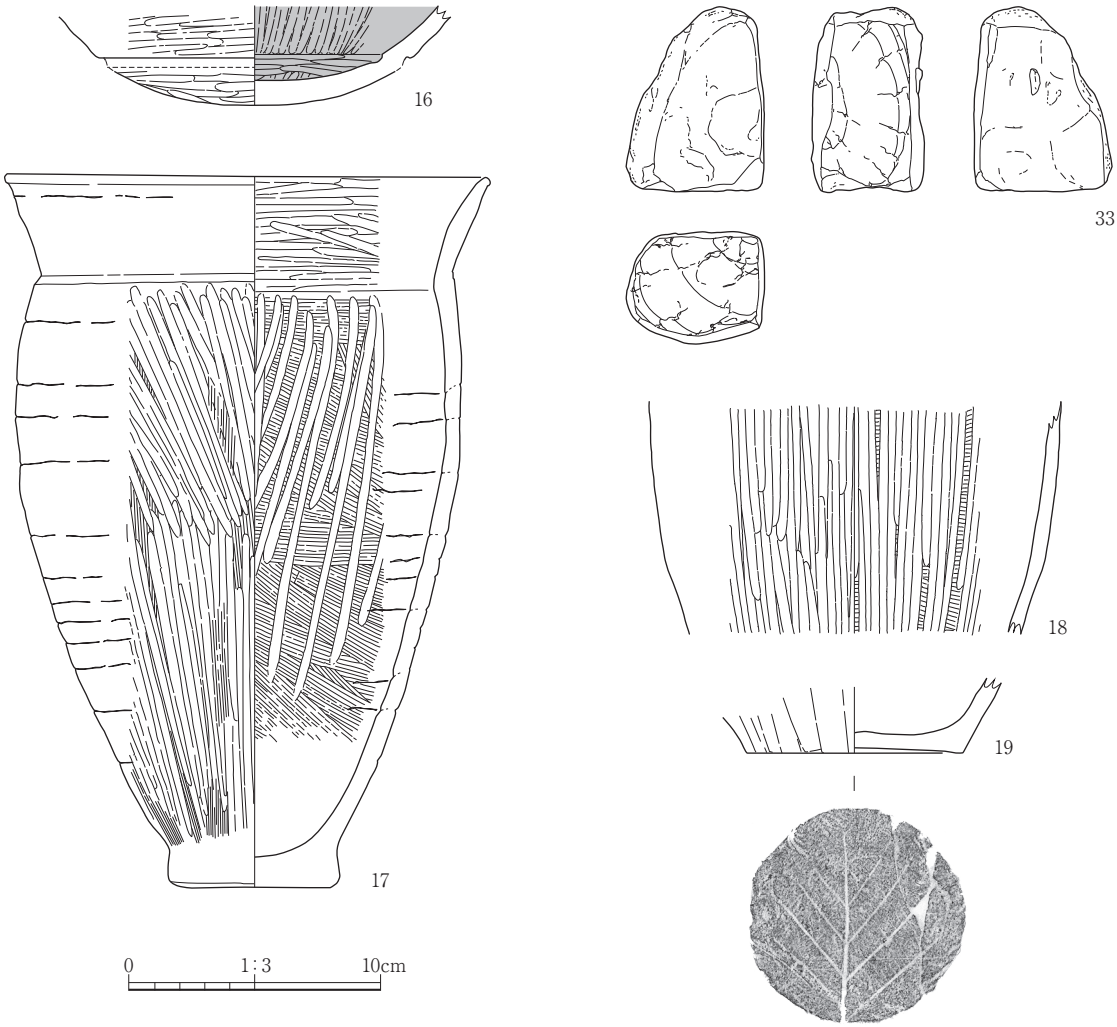
SI04 カマド
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中
カマドと煙道間を支えていた天井部の貼土か
3 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR3/3暗褐色シルト主体に 10YR6/8明黄褐色粘土粒(φ1～2mm)全体に散在
礫のすき間に貼っていた粘土か
5 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
6 2.5YR3/6暗赤褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 燃焼時の堆積層含む
7 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性やや弱～中 締まりやや疎
礫のすき間に貼り付いていた粘土か
8 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
下部が10YR4/4褐色シルトに変化
9 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 住居埋土下位層と同一
10 2.5YR5/8明赤褐色シルト 粘性弱 締まり密 強く被熱しており、
ガリガリに焼けている
11 10YR4/6褐色～10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密
袖石設置時の埋め戻し土
12 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり密 貼床
13 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性やや弱 締まり密 地山
※カマド周辺には貼床なし

0　1:30　1m

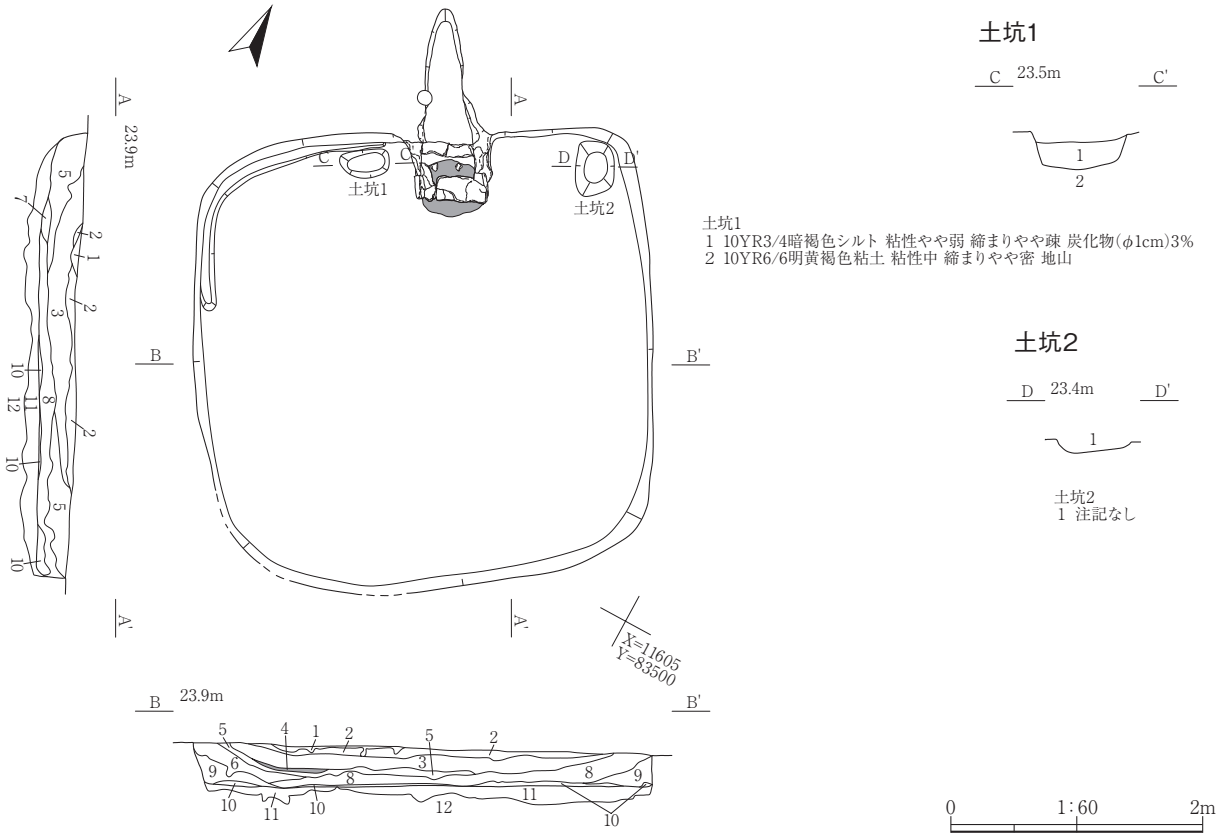
第22図　SI04竪穴住居跡

ＳＩ05 竪穴住居跡（第 24 ～ 26 図、写真図版 24・25）

調査区中央の X=11605・Y=83500 付近に位置する。遺構全体で SK68 と重複しているが、これを切っている。規模・形状は、3.68 × 3.65 ｍの隅丸方形を呈する。床面は貼床が施されており、ほぼ平坦に構築されている。貼床の厚さは５～ 15cmで、東側がやや深い。カマド左側の北～西壁にかけて、一部に細い周溝が巡っているが全周はしない。壁は残存が良く、いずれも急斜度に立ち上がる形状である。北壁 23cm、南・東壁 25cm、西壁 32cmあり、埋土の状況からやや崩落していると見られる。埋土は貼床も含めて 11 層で構成され、埋土上位の２層ににぶい黄橙色のＴｏ－ａテフラが厚さ１～３cm堆積している。床面に近い８・９層には多量の焼土と炭化物を含み、平面的にも上屋が崩落した形の炭化材や焼土の広がりが観察されることから、焼失したと判断される。特に東側床面付近の炭化材残存の様子は上屋の骨組みを想像できる。カマド両脇には、40 × 23cmの土坑１と 45 × 30cm の土坑２が床面に作られており、遺物を混入する。床面で柱穴などの検出を行ったが確認できなかった。貼床を剥がしても判然としないことから、柱穴は存在せず浅い凹みのみで構築されていた可能性がある。北壁の中央やや東寄りにカマド１基を検出した。カマドは芯材として用いられていた礫がそのまま残存しており、また上部には崩落した天井石が２個並列して出土した。いずれも砂岩製と考えられる。並列した天井石の間から燃焼部が確認できるが、ここには約 20cmの間隔で支脚が縦長礫で設置されている。燃焼面の大きさは 0.5 × 0.45 ｍの略円形の強変焼土で、上面はガリガリに硬化している。煙道はこの燃焼面から徐々に立ち上がって上部に抜ける構造で、1.1 × 0.3 ｍの規模

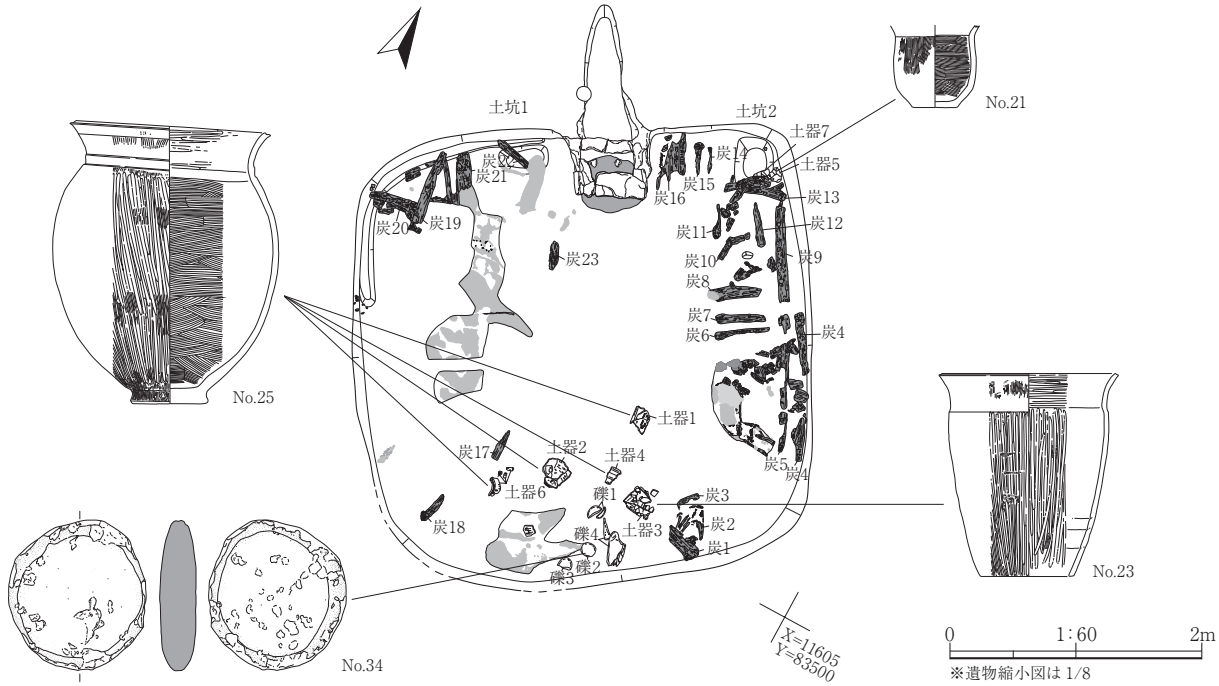


第23図　SI04竪穴住居跡出土遺物

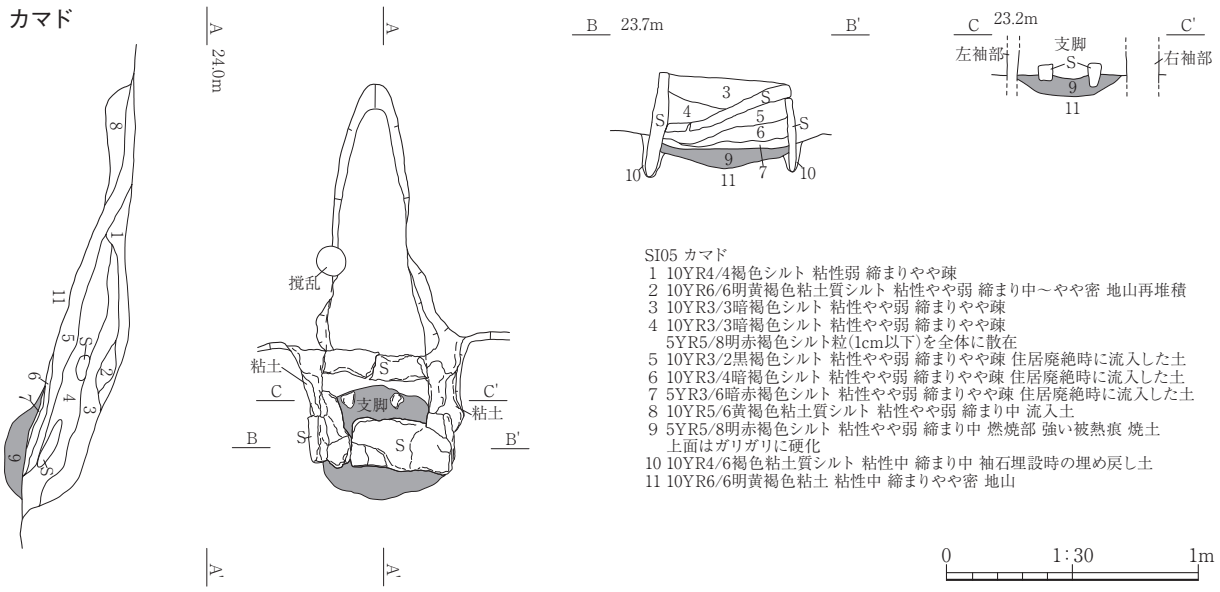


SI05
1 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 ビニールなど混入 畑耕作土 撹乱
2 10YR7/3にぶい黄橙色To-aテフラ二次堆積層 10YR2/2黒褐色シルト中に混在
3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 炭化物(1～2cm)少量含む
4 5YR4/8赤褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 強変焼土 焼失時に堆積
5 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎 流入土
6 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR6/6明黄褐色粘土粒 地山(1～2mm)全体に散在
7 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 流入土
8 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR6/6明黄褐色粘土ブロック(5cm)少量 炭化物(1～2cm)少量混在 この層に床面 炭化材多く含む
9 10YR3/3～4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR6/6明黄褐色粘土ブロック(5mm～3cm)多量含む 炭化物(1～2cm)5% 下部に多い
10 10YR2/1黒色 炭化物層が床面に広がる。炭化材も多く散見される。
11 10YR2/3黒褐色シルトと10YR6/6明黄褐色粘土質シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや密 貼床
12 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

遺物及び焼土・炭化物出土状況



第24図　SI05竪穴住居跡（1）



第25図　ＳＩ05竪穴住居跡（2）

で掘り込まれている。

床面を中心に 20 坏、21・22 甕、23 甑、24・25 壺、34 磨石の計７点が出土し掲載した。20 は非ロクロの内黒坏、25 は略完形の壺でハケ目後に縦位ミガキが施される。

床面からの出土遺物と、埋土上位に確認したＴｏ－ａテフラの堆積状況から、古墳時代後期～末に所属すると考えられる。

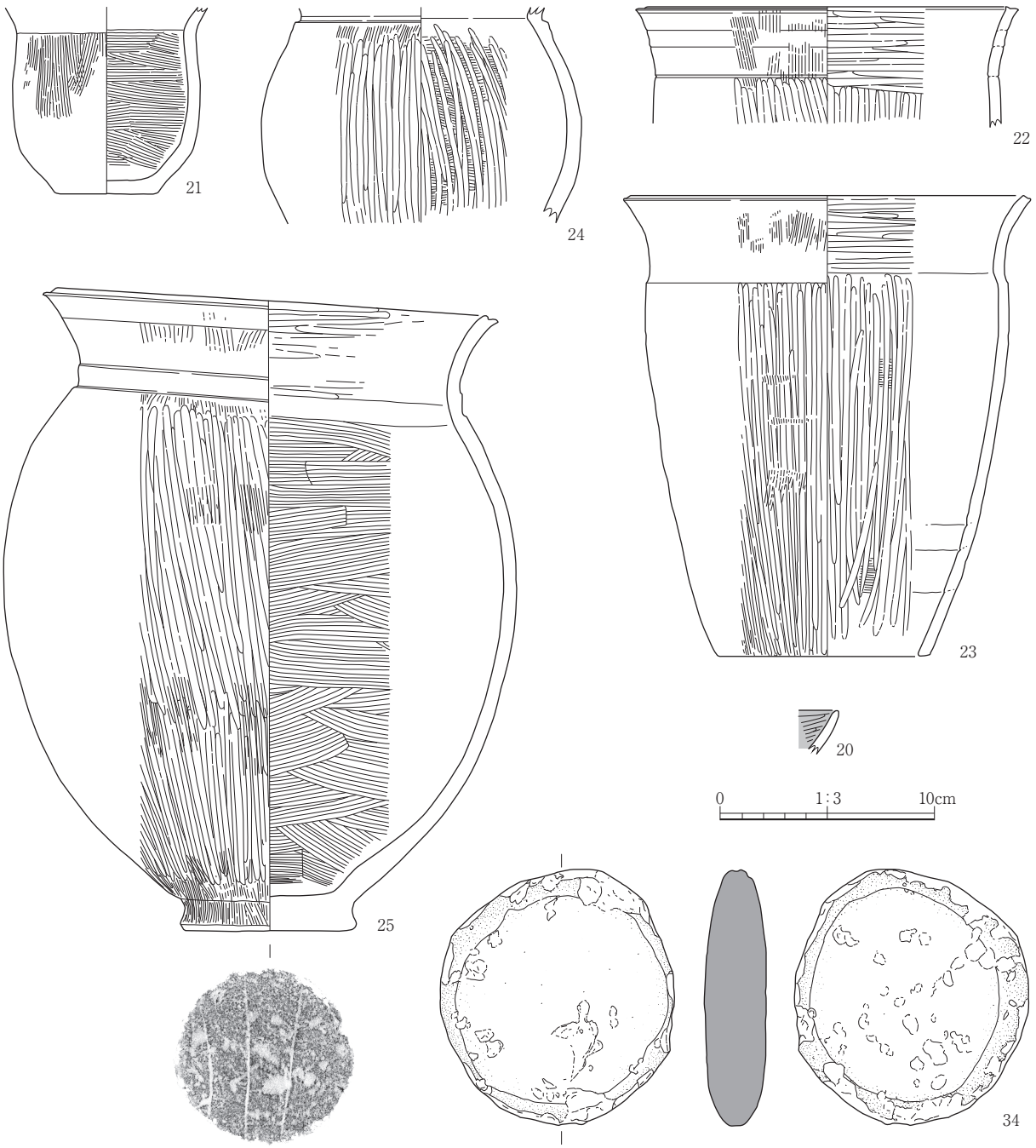
ＳＩ06 竪穴住居跡（第 27 図、写真図版 26）

調査区東端の X=11615・Y=83515 付近に位置する。SK39・43・63・64・66 の陥し穴状遺構と重複しており、いずれも切っている。規模・形状は、北東隅が調査区外となるが 4.1 × 3.93 ｍの隅丸方形を呈すると考えられる。床面はほぼ平坦に作られており、明確な貼床は確認されない。床面から約 10㎝上には赤褐色の強変焼土が広がっており、廃絶後しばらく経ってから焼失した可能性がある。南西隅には床面貯蔵用の土坑１を検出した。規模・形状は 1.12 × 0.8 ｍの不整円形である。カマドは調査区内に検出されなかったが、調査区外の北壁中央に設置されている可能性がある。

出土遺物はなく詳細な時期は不明だが、遺構形状と堆積状況が SI03 と似ることから、奈良時代後半に所属すると推定される。

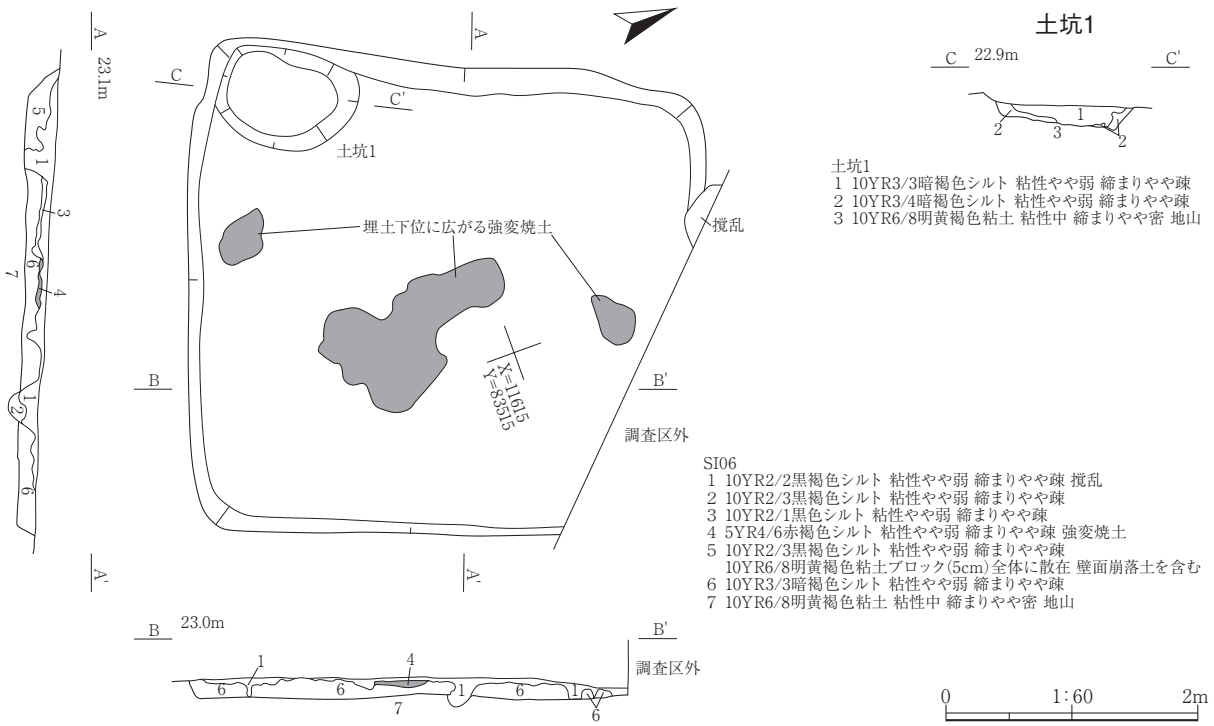
ＳＩ07 竪穴住居跡（第 28 ～ 30 図、写真図版 27･28）

調査区中央南側の X=11600・Y=83497 付近に位置する。北西隅で SK61 と重複しているが、本遺構が切っている。規模・形状は 3.22 × 3.02 ｍの隅丸方形を呈する。床面には貼床が施されており、10 ～ 15㎝の厚さがある。壁の残存は良好、壁高は北壁 20㎝、南壁 30㎝、東壁 34㎝、西壁 30㎝で急斜度に立ち上がる形状である。埋土は貼床も含めて 10 層で構成され、２層にはにぶい黄橙色のＴｏ－ａテフラ二次堆積層が１～５㎝の厚さで堆積、３層は黒褐色土に明黄褐色のＴｏ－ａテフラ一次堆積層が１～２㎝の厚さで部分的に堆積している。７層は炭化物層、８層は焼土層が堆積しており、床面直上に焼土と炭化した部材の広がりを検出していることから、焼失した可能性がある。カマド前面の床面中央には 0.9 × 0.4 ｍの範囲に楕円形の強変焼土が広がっており、カマドとは別の場所で何らかの行為が行われたことを示している。上面には 31 甕が一括で出土している。床面には土坑１～４の計４基の貯蔵用土坑を確認している。土坑１はカマド左側で 0.35 × 0.25 ｍの略円形、土坑２は南東隅で 0.56 × 0.42 ｍの略円形で南壁にやや潜り込む形状、土坑３はカマド右側の北東隅で 0.75



第26図　SI05竪穴住居跡出土遺物

× 0.6 mの略円形で最も大形、土坑４は南東隅の土坑２に隣接しており、0.35 × 0.18 mの略円形で東壁に斜めに潜り込む形状を呈する。床面で柱穴などの検出を行ったが確認できなかった。貼床を剥がしても判然としないことから、柱穴は存在せず浅い凹みのみで構築されていた可能性がある。北壁の中央やや東寄りにカマド１基を検出した。カマドは芯材として用いられていた礫がそのまま残存しており、袖部の壁と接する部分は粘土で挟み込むように固定されている。カマド上部には、内側に倒れ込んだ左袖石とともに崩落した約 60 × 15㎝の天井石がずれ落ちて出土した。いずれも砂岩製と考えられる。燃焼部には、約 20㎝の間隔で支脚が縦長礫で設置されている。燃焼面の大きさは 0.4 × 0.32 mの略円形の強変焼土で、さらに上面はガリガリに硬化している。煙道はこの燃焼面から徐々に立ち上がって上部に抜ける構造で、1.1 × 0.4 mの規模で掘り込まれている。



第27図　SI06竪穴住居跡

床面を中心に26・27坏、28高坏、29壺、30・31甕の計6点が出土し掲載した。特にカマド右側の土坑3からは26坏、28高坏、30甕が置かれた状態で出土しており、30甕は倒立して置かれている。

床面からの出土遺物と、埋土上位に確認したＴｏ－ａテフラの堆積状況から、古墳時代後期～末に所属すると考えられる。

（2）土　　坑

SK24土坑（第31図、写真図版29）

調査区南西側のX=11600・Y=83491付近に位置する。規模・形状は1.5×1.0ｍの不整形、断面鍋底形で深さは0.28ｍである。埋土は人為的に埋め戻されている。出土遺物はないが、所属時期は隣接する古代の竪穴住居と同時期に想定される。

SK29土坑（第31図、写真図版29）

調査区北側のX=11622・Y=83491付近に位置する。規模・形状は1.22×1.1ｍの略円形、断面鍋底形で深さは0.74ｍである。出土遺物はないが、所属時期は隣接する古代の竪穴住居と同時期に想定される。

SK30土坑（第31図、写真図版29）

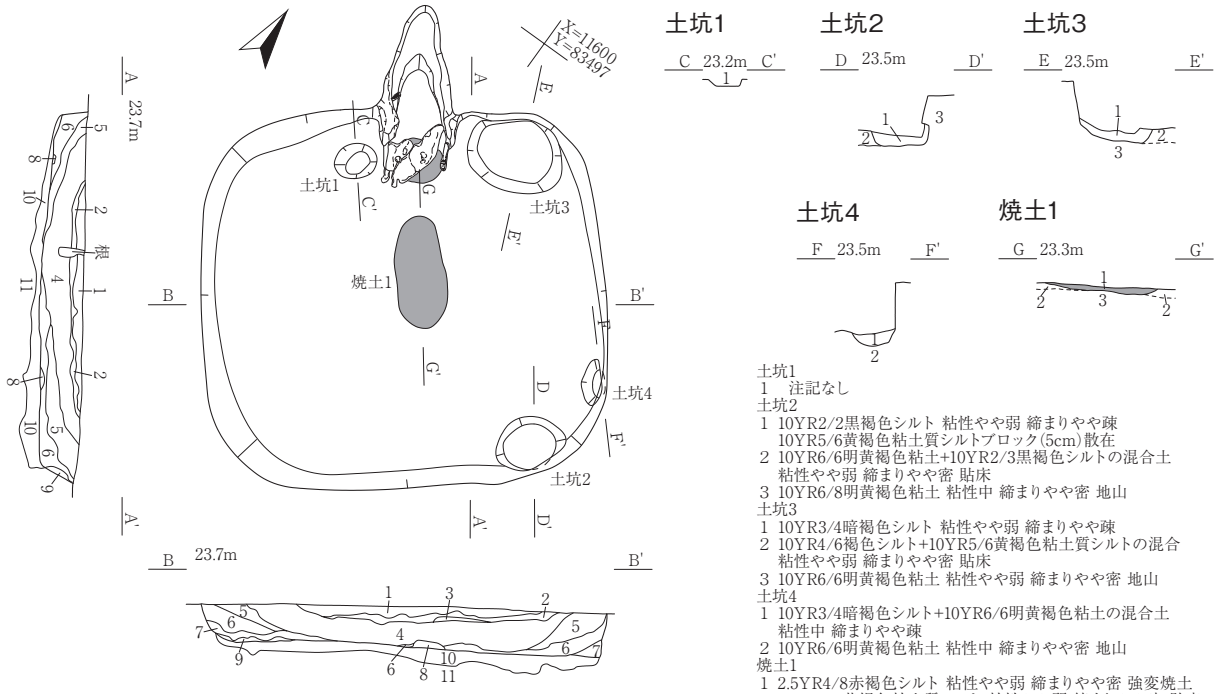
調査区北側のX=11625・Y=83495付近に位置する。規模・形状は1.35×1.15ｍの略円形、断面鍋底形で深さは0.3ｍである。出土遺物はないが、所属時期は隣接する古代と同時期に想定される。

SK31土坑（第31図、写真図版29）

調査区北側のX=11625・Y=83495付近に位置する。規模・形状は1.2×1.1ｍの不整円形、断面皿形で深さは0.16ｍである。底面に赤褐色の強変被熱痕があり、埋土にも炭化物が混じる。出土遺物はないが、所属時期は隣接する古代と同時期に想定される。

SK32土坑（第31図、写真図版30）

調査区北側のX=11625・Y=83495付近に位置する。規模・形状は1.2×0.9ｍのやや長方形で、断

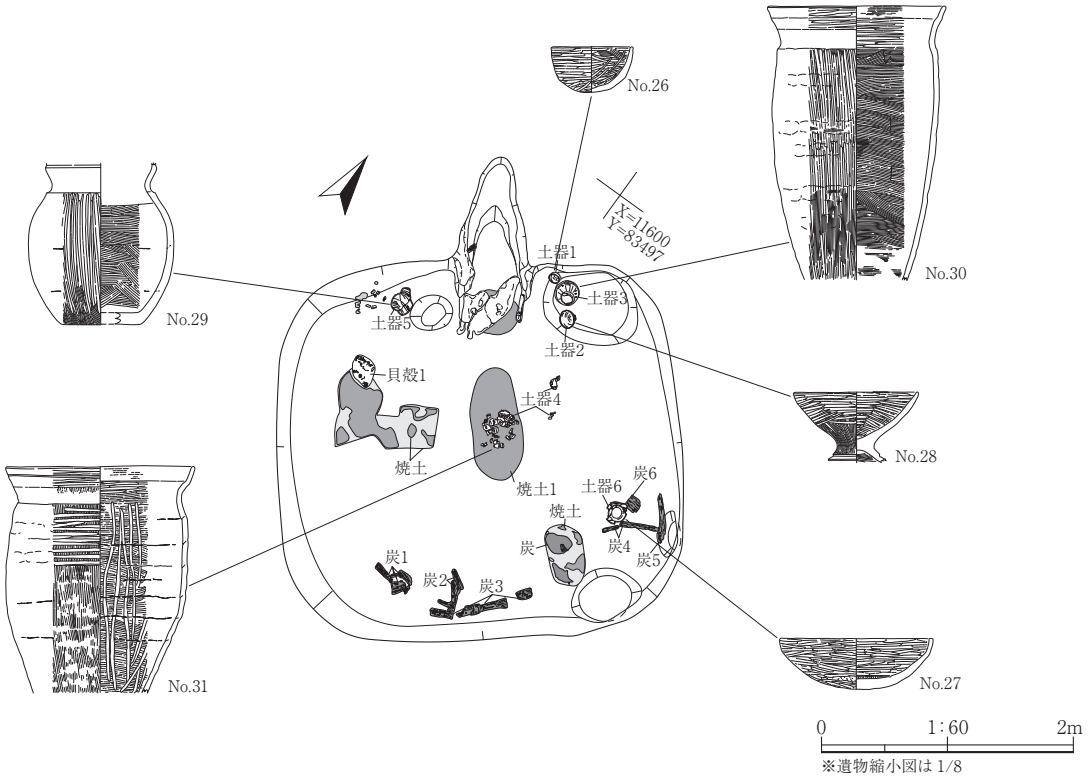


土坑1
1　注記なし
土坑2
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック(5cm)散在
2 10YR6/6明黄褐色粘土+10YR2/3黒褐色シルトの混合土
粘性やや弱 締まりやや密 貼床
3 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
土坑3
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR4/6褐色シルト+10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合
粘性やや弱 締まりやや密 貼床
3 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性やや弱 締まりやや密 地山
土坑4
1 10YR3/4暗褐色シルト+10YR6/6明黄褐色粘土の混合土
粘性中 締まりやや疎
2 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
焼土1
1 2.5YR4/8赤褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密 強変焼土
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 貼床
3 10YR7/8黄橙色粘土 粘性やや弱 締まり密 地山

SI07
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に5YR5/8明赤褐色焼土ブロック(1cm)部分的に少量散在 炭化物粒(φ5mm以下)を少量含む
2 10YR7/3にぶい黄橙色To-aテフラ二次堆積層
3 10YR2/3黒褐色シルト主体に10YR7/6明黄褐色To-aテフラ粒(φ1mm)含む 一次堆積か
4 10YR2/1黒色シルトと10YR2/3黒褐色シルトの互層 粘性やや弱 締まりやや疎 流入土
5 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
6 10YR3/3暗褐色シルト主体に10YR7/8黄橙色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まり中ブロック(2～3cm)少量含む
7 10YR3/3暗褐色シルト主体に床面近くに10YR1.7/1黒色炭化物層、厚さ1cmを堆積 下部は壁面崩落土含む
8 5YR5/8明赤褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 堆積した焼土崩落土層 強変している
9 10YR7/8黄橙色粘土 粘性中 締まりやや疎～中 壁面崩落土層
10 10YR3/3暗褐色シルト+10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや密 貼床
11 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性やや弱 締まりやや密 地山

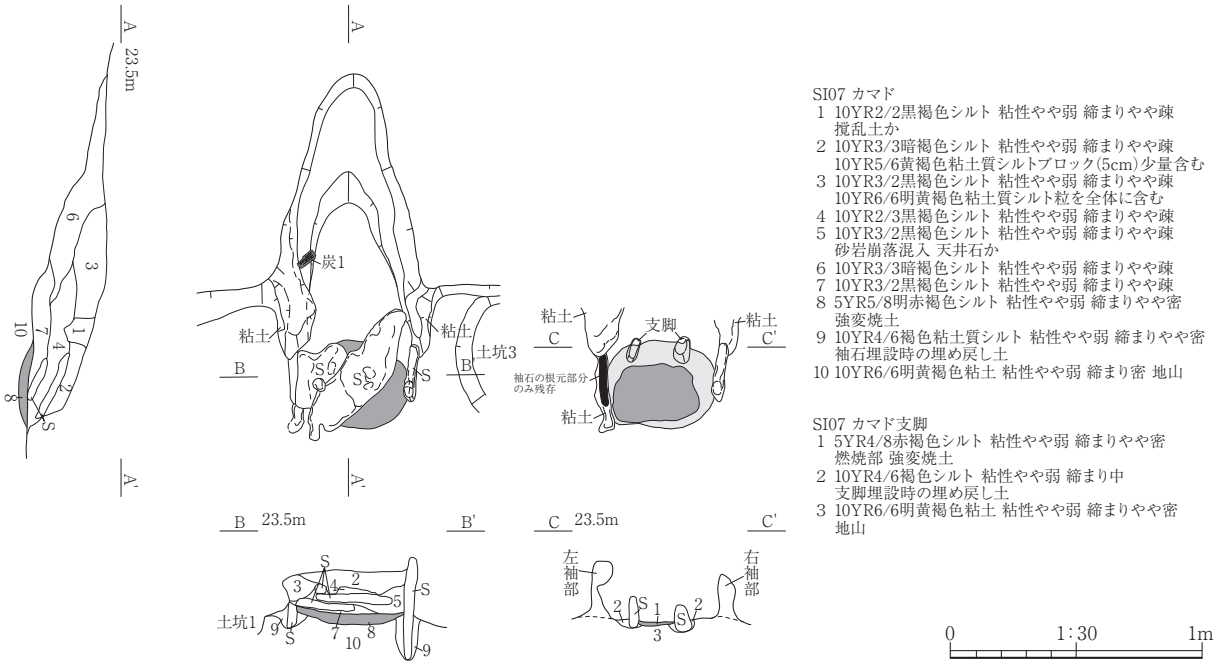
0　1:60　2m

遺物及び焼土・炭化物出土状況



第28図　SI07竪穴住居跡 (1)

カマド



第29図　SI07竪穴住居跡（2）

面皿形、深さは 0.24 mである。出土遺物はないが、所属時期は隣接する古代と同時期に想定される。

SK33 土坑（第 31 図、写真図版 30）

調査区西側の X=11599・Y=83482 付近に位置する。規模・形状は 1.62 × 1.5 mの略円形、断面皿形で底面に副穴状の凹みを持つ。深さは 0.3 m、凹みは 0.2 mほどである。出土遺物はなく、所属時期は不明。

SK46 土坑（第 31 図、写真図版 30）

調査区東端の X=11622・Y=83509 付近に位置する。規模・形状は 1.1 × 0.88 mの楕円形、断面漏斗状で深さは 0.52 mである。出土遺物はなく、所属時期は不明。

SK48 土坑（第 32 図、写真図版 31）

調査区南東側の X=11605・Y=83503 付近に位置する。規模・形状は 1.45 × 1.35 mの略円形、断面鍋底形で深さは 0.5 mである。出土遺物はなく、所属時期は不明。

SK54 土坑（第 31 図、写真図版 31）

調査区南西側の X=11587・Y=83494 付近に位置する。南半は生文課トレンチによって切られている。規模・形状はおそらく直径 0.9 mの円形、断面皿形で深さは 0.22 mである。出土遺物はなく、所属時期は不明。

SK60 土坑（第 14 図、写真図版 9）

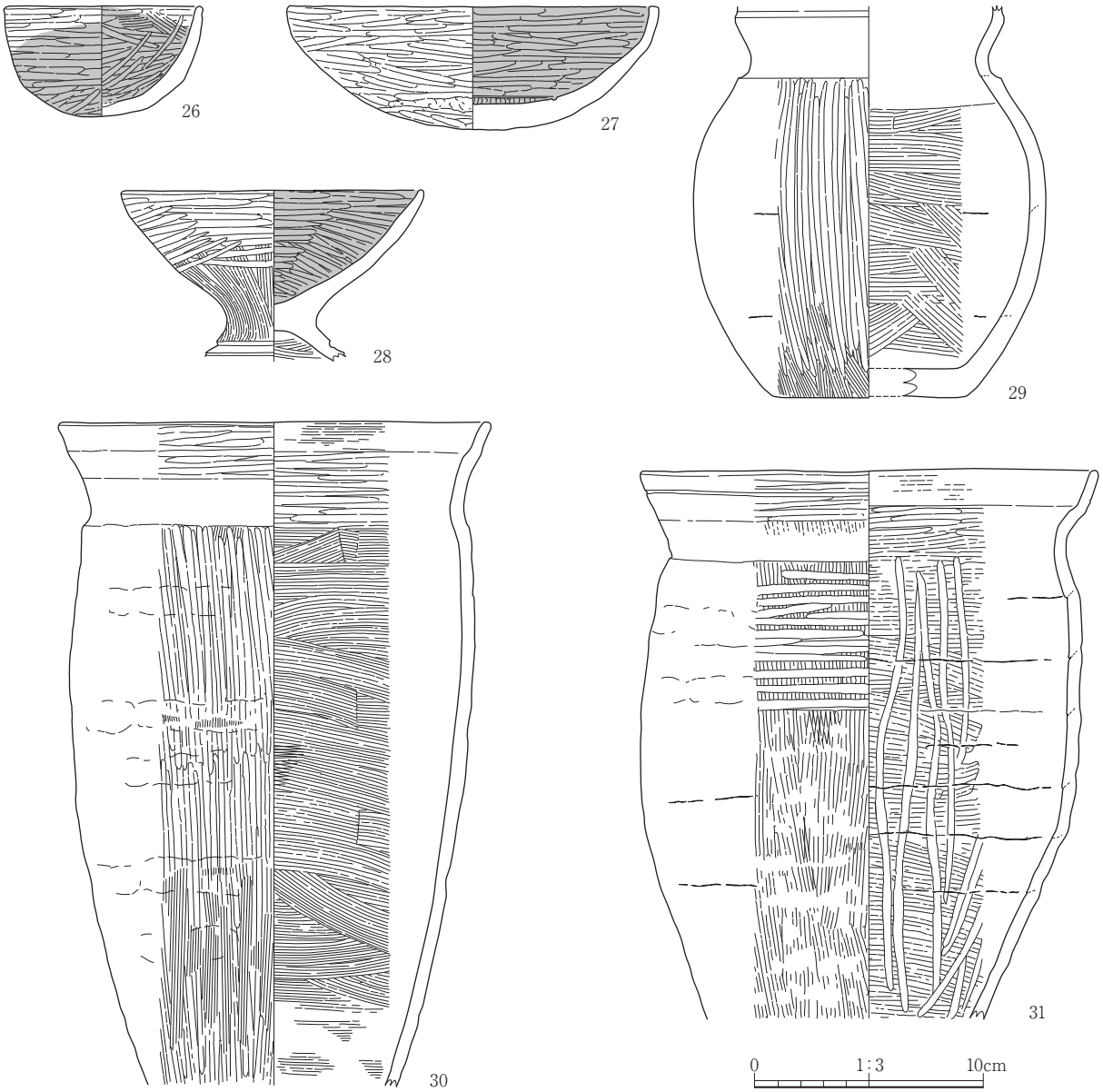
調査区南西側の X=11594・Y=83485 付近に位置する。規模・形状は 1.18 × 0.95 mの略円形、深さは 0.3 mである。底面中央には副穴状の凹み 1 個を検出している。出土遺物はないが、縄文時代前期中葉以降の SK51 より古いと考えられる。

SK61 土坑（第 32 図、写真図版 31）

調査区南西側の X=11598・Y=83496 付近に位置する。規模・形状は 2.05 × 1.75 mの略円形、断面皿形で深さは 0.25 mである。SI07 に切られており、所属時期は古代以前と考えられる。

SK70 土坑（第 33 図、写真図版 31）

調査区南東側の X=11596・Y=83508 付近に位置する。規模・形状は径 1.65 mの略円形、断面鍋底



第30図　SI07竪穴住居跡出土遺物

形で深さは0.36 mである。底面に副穴状の凹みを持つ。SK71を切っており、同形状の陥し穴状遺構が縄文時代前期中葉以前に比定されることから、所属時期はこれよりも新しく想定される。

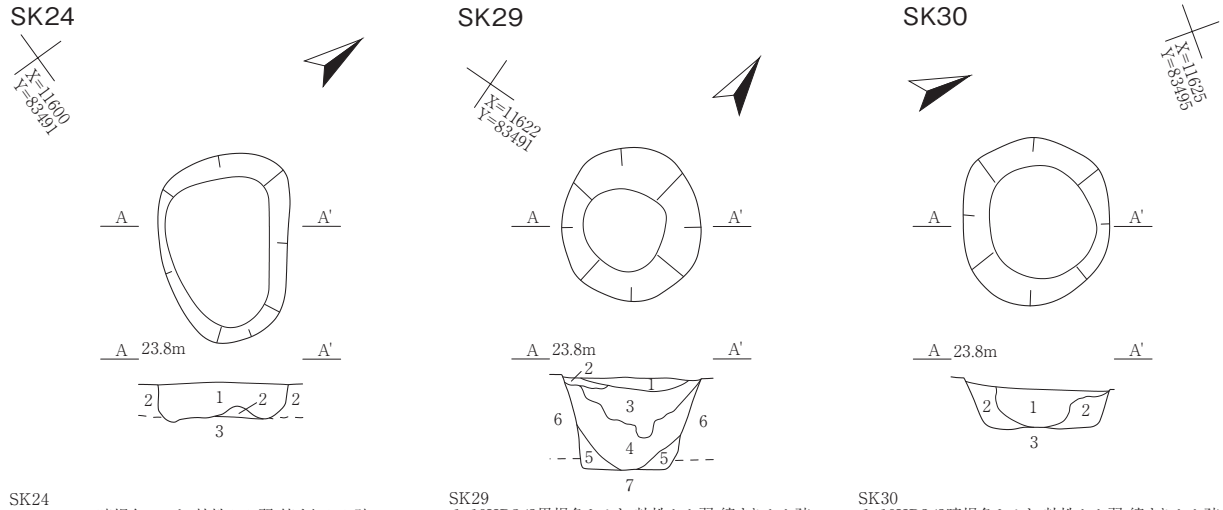
（3）焼　　土

SF01 焼土（第31図、写真図版30）

調査区北東側のX=11625･Y=83492付近に位置する。浅い掘り込みがあり、規模･形状は1.33 × 1.08の略円形で、深さは0.15 mである。掘り込み底面が明赤褐色に強変被熱している。出土遺物はないが、周辺のSK29 ～ 32と同時期の古代に想定される。

SF02 焼土（第32図、写真図版32）

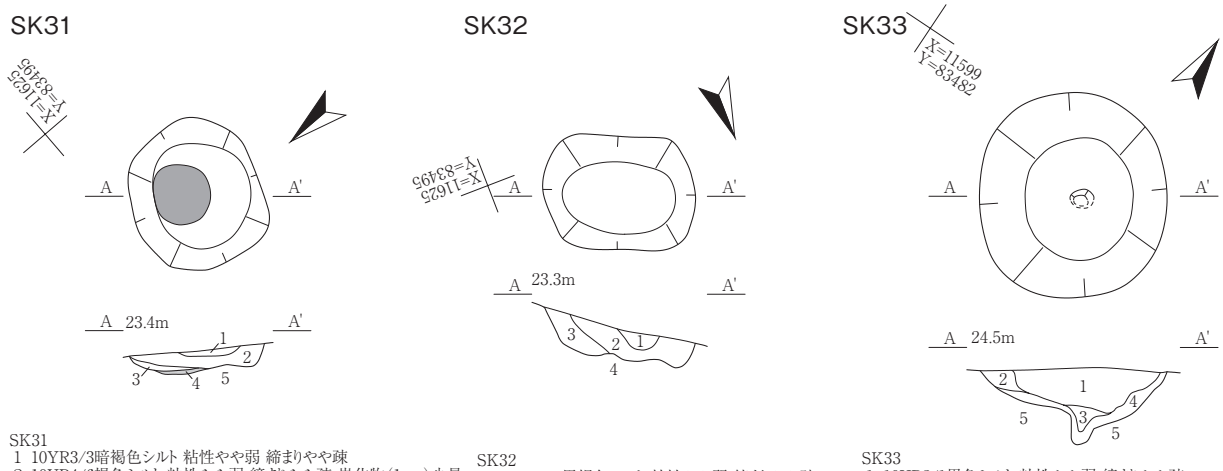
調査区西側のX=11599･Y=83482付近に位置する。古代の竪穴状プランの中央付近に被熱痕があり、建物を構成していた可能性もある。焼土の規模・形状は1.2 × 0.6 mの不整形で、赤褐色に強変している。竪穴状プランは検出の際は西側が薄くのみ残存しており、プランは掴めなかった。出土遺物



SK24
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
主体に10YR2/1黒色シルトブロック(10cm)混入 埋め戻し土
2 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 基層
3 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

SK29
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR4/6褐色シルト+10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合
粘性やや弱～中 締まりやや疎
5 10YR4/6褐色シルト 粘性中 締まり中
10YR7/6明黄褐色粘土質シルトブロック少量含む(3cm)
壁面崩落土層
6 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山
7 10YR7/3にぶい黄橙色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
地山

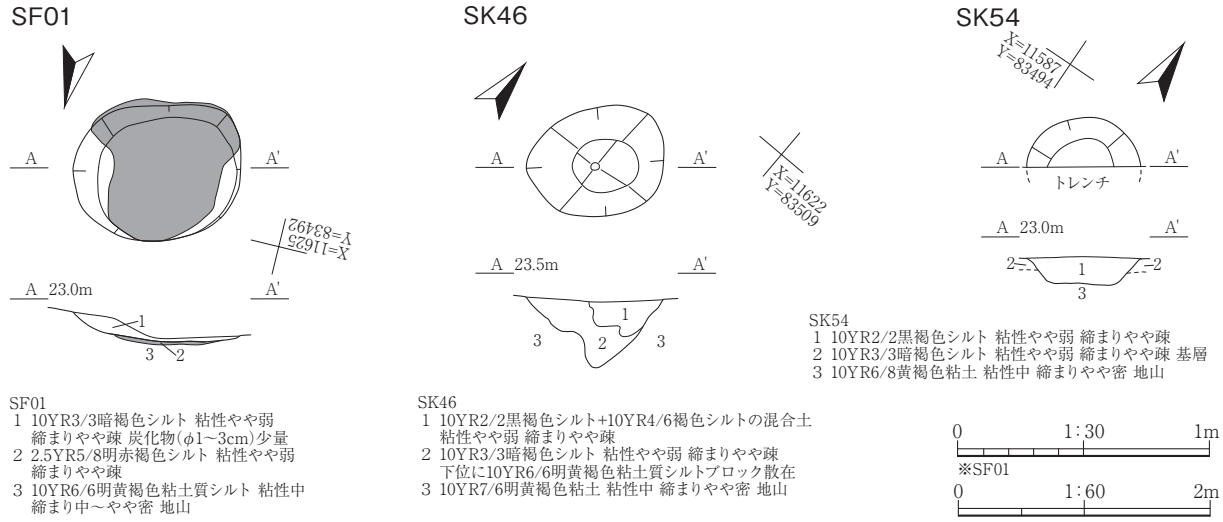
SK30
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中
3 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密



SK31
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 炭化物(1cm)少量
3 10YR2/1黒色シルト 粘性中 締まりやや疎 炭化物層
4 2.5YR4/8赤褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密 強変焼土
5 10YR7/6明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山

SK32
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎
3 10YR4/6褐色シルト 粘性中 締まり中
4 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

SK33
1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR3/4暗褐色シルト～10YR4/4褐色シルト
粘性やや弱 締まりやや疎～中
5 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

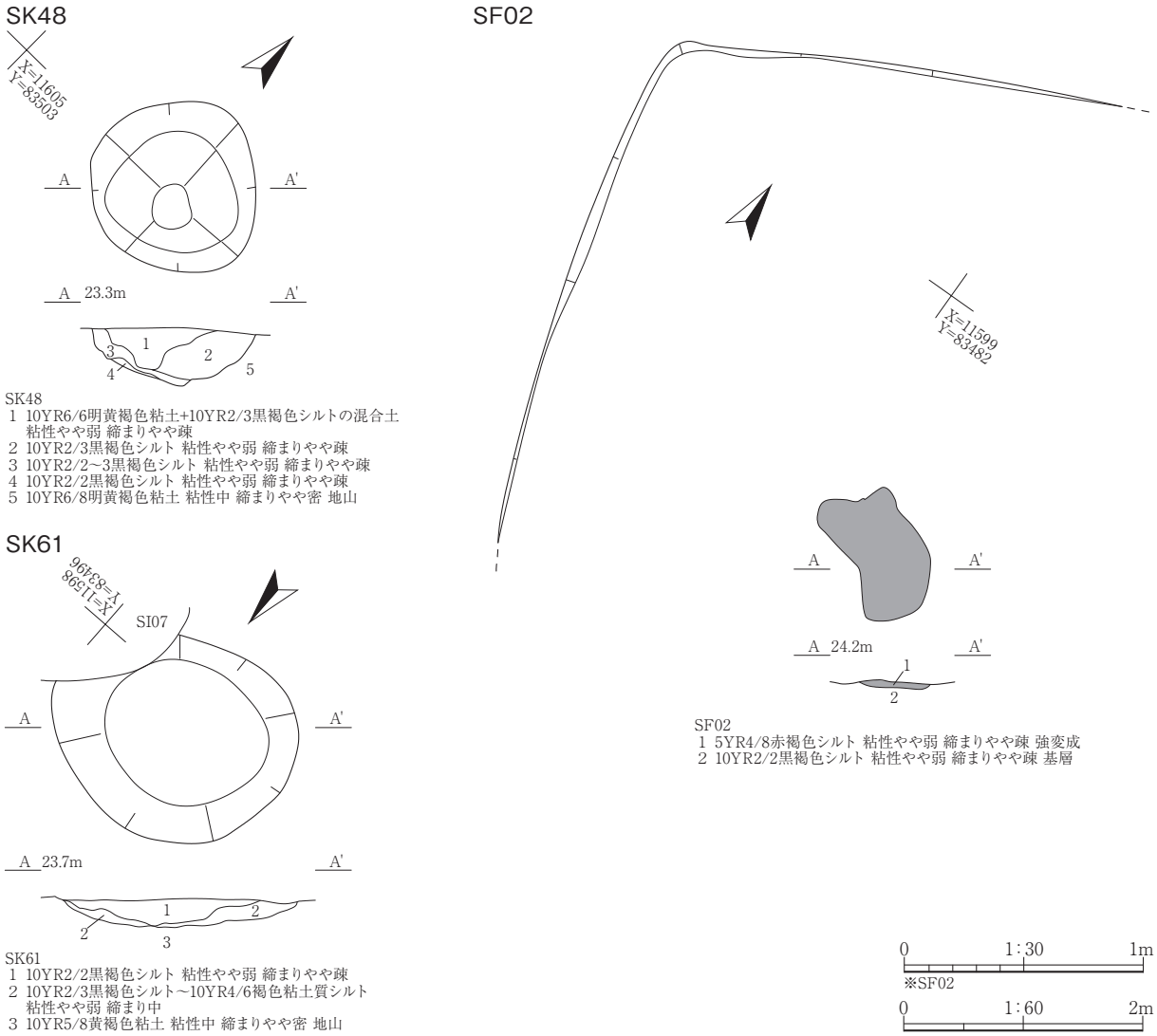


SF01
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱
締まりやや疎 炭化物(φ1～3cm)少量
2 2.5YR5/8明赤褐色シルト 粘性やや弱
締まりやや疎
3 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性中
締まり中～やや密 地山

SK46
1 10YR2/2黒褐色シルト+10YR4/6褐色シルトの混合土
粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
下位に10YR6/6明黄褐色粘土質シルトブロック散在
3 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

SK54
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 基層
3 10YR6/8黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密 地山

第31図　SK24・29～33・46・54土坑、SF01焼土



第32図　SK48・61土坑、SF02焼土

はないが、所属時期は形状から隣接する古代と同時期に想定される。

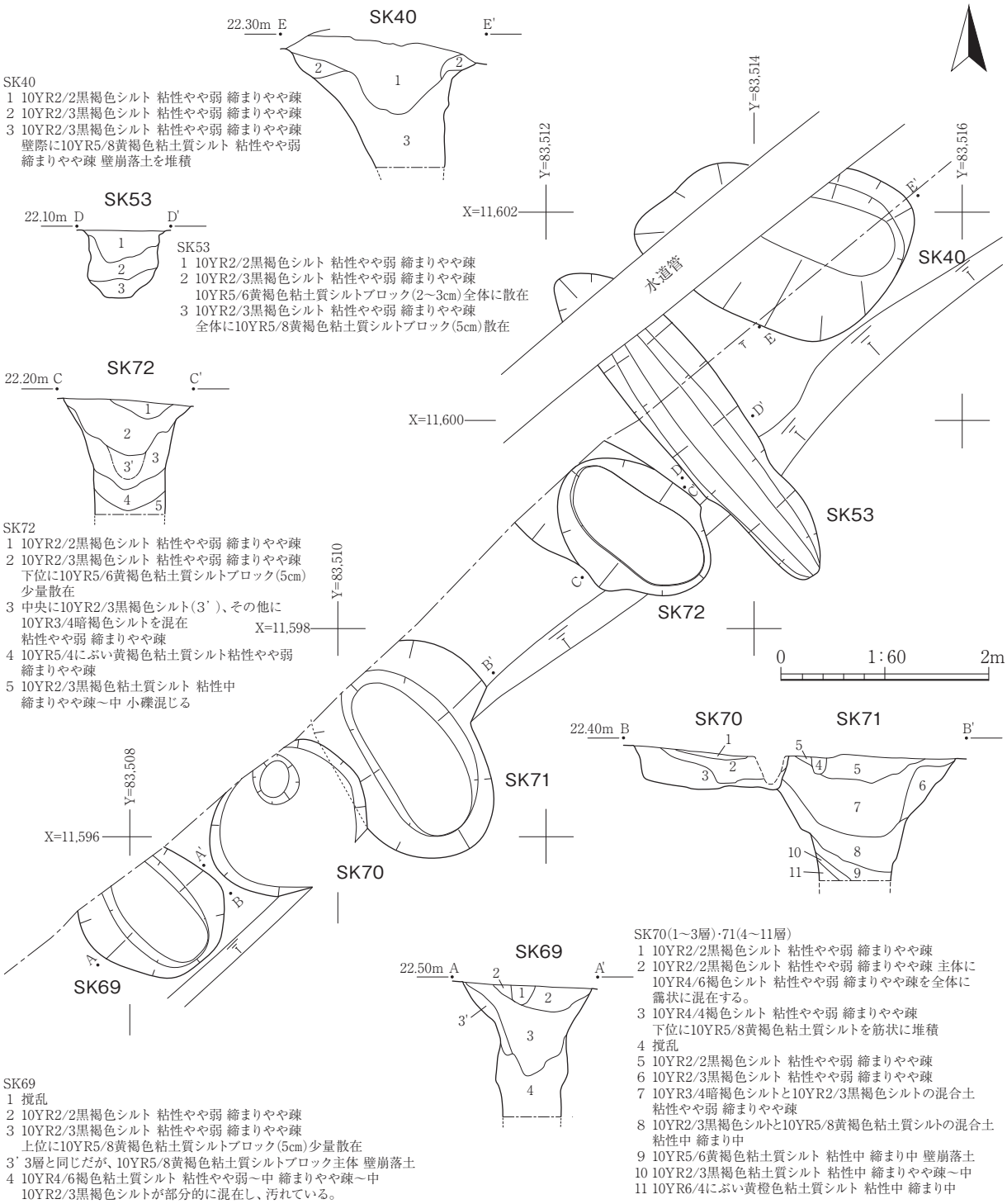
3　遺　　物

（1）縄文土器（1・3）

2点を掲載した。1は尖底深鉢の口縁～胴部と考えられる。胎土には植物質繊維が多量に混入することから、縄文時代前期初頭～前葉と考えられる。3は深鉢の胴部破片で単軸絡条体第3類Rが施され、器面には補修孔1箇所を有する。こちらも胎土に植物質繊維を多量に含む。おそらく縄文時代前期前葉と考えられる。いずれも調査区東端のSI06付近から出土しており、調査区東側に該期の遺構が存在する可能性がある。（北田）

（2）弥生土器（2・4～6）

4点を掲載した。2と6は原体圧痕を施す土器で、2は縄文RL、6は単軸絡条体第1類Lが施文される。4は口縁部付近の破片で横走する交互刺突文が施される。5は横走する並行沈線上に列点を施すもので、4に似る。特に4・5から、弥生時代後期前半に比定される。（北田）



第33図　SK40・53・69～72陥し穴状遺構

（3）石器（7・32～35）

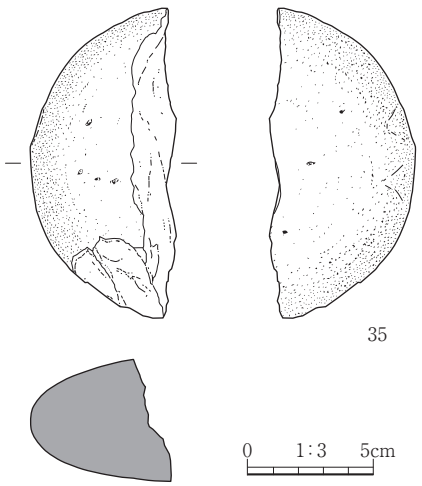
5点を掲載した。7はSI02埋土上位から出土した縄文時代の有茎石鏃。32・33は人為的に割られた痕跡が残る礫で、SI03カマドやSI04床面から出土したものである。34・35は擦り痕が残る礫で、SI05床面やSK70埋土から出土している。（北田）

（4）土師器（8～31）

坏（8）　体部は内湾し、口縁部は外面の強いヨコナデにより細くわずかに外反気味となる。外面は縦方向のミガキで仕上げる。内面のミガキは横方向で、幅1mm程度と外面に比べその単位が細く、また粗い。内黒。

甕（9）　上半部を欠く。体部外面は縦方向のハケの後、縦方向のミガキで仕上げるが、ミガキが雑なためハケ目が多く残る。内面は横方向の丁寧なハケの後、縦方向の非常に粗く雑なミガキを施す。底面がやや窪む。

甕（10・11）　他の甕に比べ口縁部が長い。体部外面は縦方向のミガキで仕上げるが、非常に雑で上・下端部まで及ばないため前段階の縦方向のハケ目が明瞭に残る。内面は未調整。口縁部はヨコナデによって外側に広げ、その上半部は内側の強いナデにより内湾する。口縁部外面にも体部から続くハケ目がかすかに認められる。全体に粘土紐の痕跡が明瞭に残る。



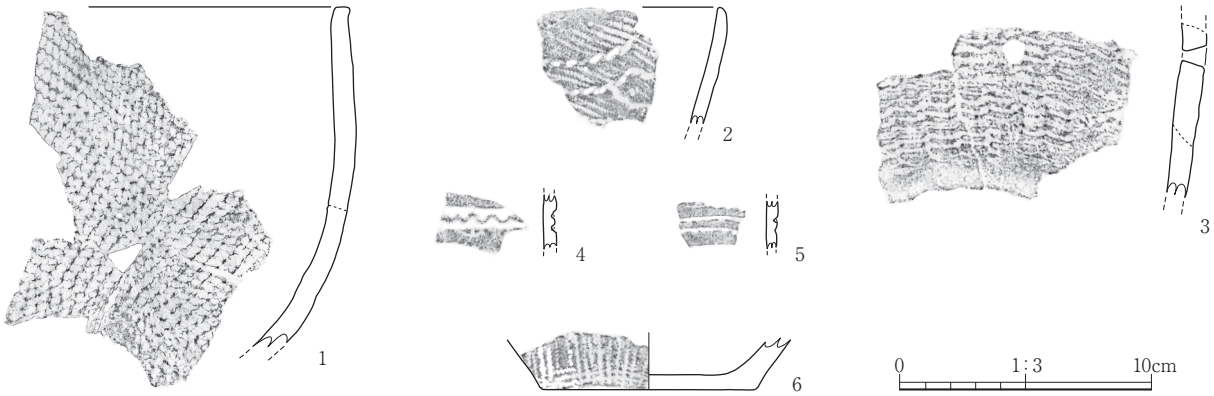
第34図　SK70土坑出土遺物

甕（12）　短胴の甕で、頸部には小孔が2つ開けられている。釣瓶などのように吊るして使用されていたと考えられる。体部外面は縦方向の雑なケズリとしたが、ヘラナデとすべきか判断が難しい。砂粒の動きは確実に見られるものの、それほど顕著ではなく、むしろナデたように筋を残す箇所が多い。基本的に体部下端から上端まで工具を途中止めることなく一気に動かしており、頸部にはその工具の当たりが明瞭に残る。底面も体部外面と同様の調整で、体部内面は横方向のナデ。口縁部はヨコナデにより短く外反させ、さらに上端部を外側に折り曲げる。口縁部外側にはその際の圧痕が残る。

甕（13）　短胴で12によく似るが、口縁部をつくり出す際のヨコナデが12よりも強く、体部との境が明瞭となる。体部外面には縦方向の擦過痕が見られる。12の甕とおそらく同じ調整と思われるが、こちらは砂粒の動きはほとんど見られず、工具の痕跡が筋状に残っており、ミガキのように光沢をもつ箇所も見られる。なおミガキのような光沢については、意図的なものではなく、工具の当たり具合によってできたものと判断した。体部内面は横方向のナデ。

壺（14）　体部は球形で、口縁部はヨコナデにより大きく開く。体部内外面共にナデ仕上げとする。内面のナデはやや強く、多方向に見られる。

壺もしくは甕（15）　壺あるいは甕の底部片で、横への張り出しが大きい。体部外面には横方向の圧痕がみられるが、強いナデによるものなのか、ヘラナデなのかは不明。



第35図　遺構外出土遺物

坏（16）　内黒の有段坏であるが、外面の段付近が欠けており詳細な段の形状は不明。口縁部は欠損する。内外面共に密なミガキ。内面見込み中央部は一方方向に、その外側は段まで同心円状に、段より上は縦方向、外面の段より上は横方向のミガキ。

甕（17）　ほぼ完形。体部最大径を上半肩部とし、口縁部は直線的に広がる。体部外面は縦方向のミガキで仕上げるが、その隙間には前段階の縦方向のハケ目が認められる。体部内面は横方向のハケの後、縦方向の非常に粗いミガキを施す。粘土紐の接合痕が明瞭に残る。口縁部はヨコナデで外反させた後､内面のみ横方向のミガキで仕上げる。体部外面から口縁部にかけて炭化物が多く付着する。

甕（18）　体部片。内外面ともに縦方向の密なミガキで仕上げるが、内面にはわずかな隙間に前段階の横方向のハケ目が見られる。

甕（19）　底部片。底部外面には木葉紋が残る。体部外面には一見縦方向のケズリのような擦過痕が見られる。砂粒の動きが顕著でなく、工具の痕跡が筋状に残っていることからヘラナデと判断した。内面はナデ。

坏（20）　口縁部の小片。内黒で、内外面ともに横方向の密なミガキ。

甕（21）　下膨れの小型甕。体部内面は横方向のハケで、外面は上半にのみ縦方向のハケを施す。口縁部はヨコナデで外反させる。

甕（22）　他の甕に比べ頸部の屈曲が弱く、甑の可能性もある。口縁端部の面はシャープで、凹線状に僅かに窪む。体部内外面は縦方向のミガキで、口縁部内面は横方向のミガキで仕上げる。口縁部外面はヨコナデのままで、前段階の縦方向のハケ目が残る。若干横方向の光沢が認められるが、ミガキによるものではなく、ナデによってできた光沢と判断した。

甑（23）　無底で、体部は丸みが弱く、口縁部の開きも小さい。体部内外面ともに縦方向の密なミガキで仕上げるが、外面は粘土紐接合時に生じた凹みに縦方向のハケ目が僅かに残る。内面のハケ目はミガキによってほとんど消されているが、僅かに横方向のハケ目が認められる。口縁部は強いヨコナデによって外反させ、端面には凹線状の窪みをつくる。口縁部内面は横方向のミガキによって仕上げるが、外面はミガキを施さないため、前段階の縦方向のハケ目が完全に消えずに残っている。

壺（24）　体部は球形で、頸部との境に明瞭な段をもつ。体部外面は縦方向の密なミガキだが、上端部にのみ前段階の縦方向のハケ目が残る。内面も縦方向のミガキで仕上げるが、外面よりも粗く、ミガキの隙間に前段階の横方向のハケ目が見られる。

壺（25）　体部外面は縦方向のミガキで仕上げるが､いたるところに前段階の縦方向のハケ目が残る。特に底部付近のハケ目は明瞭である。口縁部はヨコナデによって外反させ、頸部には２段の明瞭な段をつくる。口縁端部のナデが強く、端面には凹線状の窪みができる。ヨコナデの弱い外面中間部には体部からつづくハケ目が認められる。内面は体部が横方向のハケで、口縁部は横方向のミガキで仕上げる。底面には木葉紋が残る。

坏（26）　椀形の小型の坏。口径は8.4cmを測る。内外面を密なミガキで仕上げるが、内面上部にはかすかに前段階のハケ目が認められる。内外面の黒色処理は完全でなく、両面ともに口縁部まで及んでいない。

坏（27）　内黒の有段坏だが、外面の段はその名残が浅い窪みとして僅かに認められる程度で、内面の段は雑な沈線によって表現されている。内面の沈線より内側は一方向のミガキで、沈線より上部と外面は横方向の密なミガキで仕上げる。

高坏（28）　坏部は内湾が弱く、比較的直線的に開き、ハの字状に開く脚が付く。坏部内外面ともに横方向の密なミガキで仕上げるが、外面下半から脚部にかけてはミガキが及ばず、縦方向のハケ目のままである。坏部のミガキは内面が４分割、外面が６分割で施されている。脚部外面には明瞭な

段が２条めぐり、内面には横方向のハケ目が残る。

壺（29）　体部外面は縦方向の密なミガキであるが、底部付近には前段階の縦方向のハケ目が僅かに認められる。体部内面は横方向のハケ。頸部は強いヨコナデによって外側に広げ、口縁部を内湾させて受口状とする。この内湾に対応する外面には弱い段状の凹みがめぐる。底面中央部にもハケ目が認められる。

甕（30）　底部を欠く。体部はあまり膨らみがなく長い。外面は縦方向の密なミガキで仕上げるが、下半部には前段階の縦方向のハケ目が明瞭に残る。体部内面は横方向の丁寧なハケ。口縁部はナデによって外側に広げるが、他の甕に比べ外反が弱い。上端部は強く摘むことにより、内面がやや内湾気味となる。口縁部外面の上半は横方向のミガキであるが、下半はヨコナデのままである。逆に内面は下半にヨコハケ後に僅かに横方向のミガキが認められるが、上半のミガキは明瞭でなく、前段階のハケ目がかすかに認められる。

甕（31）　底部を欠く。体部外面は縦方向のハケ目の後、上部には横方向のミガキを施すが、非常に粗いためハケ目が明瞭に残る。下半部にもハケ目上に粗く光沢が認められることから、おそらくミガキが施されていたと考えられるが、単位が明瞭でなくその方向は不明。内面は横方向のハケの後、非常に雑な縦方向のミガキを施す。粘土紐の痕跡が明瞭に残る。口縁部は上半内側を強く摘まむことにより内湾気味となる。外面上半は横方向のミガキであるが、下半はヨコナデのままで胴部から続くハケ目がかすかに認められる。内面の頸部付近には僅かに横方向のミガキが認められるが、上半はヨコナデのままで、外面同様に前段階のハケ目がかすかに認められる。（伊藤）

（５）金属製品（36・37）

２点出土し、掲載した。いずれもSI03出土。36は円環状鉄製品で、刀子などの柄の留め具と考えられる。また、37は鉄鏃の中柄と見られる。伴出土器から、いずれも古墳時代末～奈良時代初めの所産と考えられる。（北田）

（６）貝　　類

SI07北西側埋土上位から、貝殻が一括して出土した。総重量は31.1gである。これらは、竪穴住居焼失・廃絶後に廃棄されており、その後にＴｏ－ａテフラ一次堆積層が形成されていることから、これ以前に一括して人為的に廃棄されたと考えられる。出土した貝類同定については古環境研究所に委託しており、Ｖ－３自然科学的分析の貝類同定に掲載している。腹足綱のニシキウズガイ科が１点、科･属･種不明の腹足綱が５点、二枚貝綱のイガイ科（右２左１）３点、アサリ（左）１点、科･属･種不明（左）の二枚貝網１点が同定されており、古代の人々によって食されたと考えられる。（北田）

（７）炭　化　物

古代の焼失した竪穴住居跡から、計37点の炭化物を採取した。いずれも建築部材が火災によって炭化したものと考えられる。このうち５点について炭化材同定を行い、Ｖ－２樹種同定の項目に掲載した。SI04床面から出土した７及びSI05床面から出土した８がクリ、SI05床面から出土した27及びSI07床面から出土した35がコナラ属コナラ節、SI07床面から出土した31がトネリコ属である。（北田）

第２表　縄文・弥生土器観察表（１～６）

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	破片数	総破片数	種類	器種	残存位置	計測値（cm）			外面調整・施文など	内面調整・施文など	胎土	備考	登録No.
										口径	底径	器高					
1	35	34	試掘 T9 試掘 T9	GL-30cm 黒褐色土中 黒褐色土（GL-40cm）	2 3	5	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	-	-	(13.3)	尖底、口縁～胴：縄文ＲＬ	ナデ	植物質繊維多量	前期初頭～前葉	1
2	35	34	調査区南東 SI06 付近	遺構検出面	1	1	弥生土器	深鉢	口縁部	-	-	(4.6)	原体側圧、口縁：縄文ＲＬ	ナデ		弥生後期	2
3	35	34	調査区北東隅	遺構面直上	2	2	縄文土器	深鉢	胴部下半	-	-	(6.5)	胴：単軸絡条体第３類Ｒ、補修孔（外→内）	ナデ	植物質繊維多量	前期前葉	3
4	35	34	SI06 Ｓベルト	床直	1	1	弥生土器	深鉢	口縁部附近	-	-	(2.0)	口縁：交互刺突文	ナデ		弥生後期	4
5	35	34	SK05	埋土下位	2	2	弥生土器	深鉢	口縁部附近	-	-	(1.9)	口縁：横走する並行沈線上に列点	ナデ		弥生後期	5
6	35	34	SI03 QSE	埋土中位 黒褐色土 To-a 下	4	4	弥生土器	深鉢	底部	-	8.6	(2.0)	胴：原体側圧・単軸絡条体第１類Ｌ、底：ナデ	ナデ		弥生後期	6

第３表　土師器観察表（８～31）

掲載No.	図	写図	出土地点		層位	破片数	総破片数	種類	器種	残存位置	計測値（cm）			外面調整・施文など	内面調整・施文など	胎土	備考	登録No.
											口径	底径	器高					
8	17	34	SI01	試掘 T5 と 9 の間	表土～埋土１層	2	2	土師器	坏	口縁～体部	<13.8>	-	(4.5)	口縁：ヨコナデ 体：縦位ミガキ	口縁～体：横位ミガキ	密	ロクロ	7
9	17	34	SI01	（試掘 T5 と 9 の間） 不明	表土 GL 10 ～ 20cm	19 6	25	土師器	甕	体～底部	-	7.2	(19.2)	体：縦位ハケ目→ミガキ（粗）	体：横位ハケ目→ミガキ（粗）	密	非ロクロ	8
10	19	34	SI02	QSW 不明	埋土上位 To-a 下黒褐色土 検出面（黒褐色土）	4 7 4	15	土師器	甕	口縁～体部	(20.5)	-	(15.0)	口縁：縦位ハケ目→ヨコナデ 体：縦位ハケ目→ミガキ	ナデ	密	非ロクロ	9
11	19	34	SI02		検出面（黒褐色土）	4	4	土師器	甕	体部下半～底部	-	8.5	(2.7)	体：縦位ハケ目→ミガキ	ナデ	密	非ロクロ	10
12	21	35	SI03	土坑１	土器１		21	土師器	甕	略完形	14.7	8.7	15.4	口縁：ヨコナデ. 小孔あり 体～底部:縦位ケズリ（板ナデカ）	ナデ	密	非ロクロ	11
13	21	35	SI03	カマド カマド カマド付近	埋土上位 黒褐色土 生文課サブトレンチ内	13 1 1	15	土師器	甕	口縁～体部	12.9	-	(15.3)	口縁：ヨコナデ 体：縦位板ナデ	ナデ	密	非ロクロ	12
14	21	36	SI03	QSW QSW カマド QNW QSE	床面土器１ 床面土器２ 床面 埋土上位 黒褐色土 埋土中位 黒褐色土 To-a 下	2 3 1 1 5	12	土師器	壺	口縁～体部	<20.5>	-	(11.1)	口縁：ヨコナデ 体：ナデ	体：ナデ（強）	密	非ロクロ	13
15	21	36	SI03	SI01 カマド QSW カマド	床直（床＋ 5cm）中央炭化物付近 床直付近 床直 埋土上位 黒褐色土	1 1 1 1	4	土師器	壺	体～底部	-	<14.0>	(3.7)	体：横位の圧痕（ナデ or 板ナデ）	ナデ	密（１～３㎜砂粒多）	非ロクロ	14
16	23	36	SI04	床面	床面土器４	1	1	土師器	坏	体～底部	-	2.6	(2.4)	体～底：横位ミガキ	有段内黒 体：縦位ミガキ 底：一方向＋同心円ミガキ	密	非ロクロ	15
17	23	36	SI04	カマド右側 不明	床面土器１	25 7	32	土師器	甕	略完形	19.1	6.0	28.3	口縁：ヨコナデ 体：縦位ハケ目→縦位ミガキ	口縁：横位ミガキ 体：横位ハケ目→縦位ミガキ（粗）	密	非ロクロ	16
18	23	36	SI03 SI03 SI03 SI04	QSE QSE QSE SI04 不明	埋土上位 黒褐色土 To-a 上 埋土中位 黒褐色土 To-a 下 埋土中位 暗褐色土層 床面土器２	1 6 1 7 2	17	土師器	甕	体部	-	-	(9.2)	体：縦位ミガキ	体：横位ハケ目→縦位ミガキ	密	非ロクロ	17
19	23	36	SI04	QNE QNW QNW	埋土上位 黒褐色土 To-a 下 To-a 下 黒色土中 To-a 下 黒色シルト 埋土中位	1 2 1	5	土師器	甕	体～底部	-	<8.6>	(2.8)	体：板ナデ 底：木葉痕	ナデ	密	非ロクロ	18
20	26	37	SI05	QSW 不明	埋土下位～床直 To-a 下 黒色土～黒褐色土	1	1	土師器	坏	口縁	-	-	(2.0)	口縁：横位ミガキ	内黒 口縁：横位ミガキ	密	非ロクロ	19
21	26	36	SI05	カマド右側	床面土器５		32	土師器	甕	頸部～底部	-	4.6	(8.7)	口縁：ヨコナデ、体：縦位ハケ目	体：横位ハケ目	密	非ロクロ	20

掲載No.	図	写図	出土地点		層位	破片数	総破片数	種類	器種	残存位置	計測値（cm）			外面調整・施文など	内面調整・施文など	胎土	備考	登録No.
											口径	底径	器高					
22	26	37	SI05	QNE	床直	4	4	土師器	甕 or 甑	口縁～体部	<17.5>	-	(5.6)	口縁：縦位ハケ目→ヨコナデ 体：縦位ハケ目→縦位ミガキ	口縁：横位ミガキ 体：縦位ミガキ	密	非ロクロ	21
23	26	37	SI05	床面 QSW	床面土器 3 埋土下位～床直 To-a 下 黒色土～黒褐色土	40 2	42	土師器	甑	略完形	<19.2>	9.6	21.3	口縁：縦位ハケ目→ヨコナデ 体：縦位ハケ目→縦位ミガキ	口縁：横位ミガキ 体：横位ハケ目→縦位ミガキ	密	非ロクロ	22
24	26	37	SI05	QSW Sベルト	埋土下位～床直 To-a 下 黒色土～黒褐色土 To-a 下 黒色土～黒褐色土	1 8	9	土師器	壺	体部	-	-	(10.0)	体：縦位ハケ目→縦位ミガキ	体：横位ハケ目→縦位ミガキ（粗）	密	非ロクロ	23
25	26	37	SI05	床面 床面 床面 床面 床面 QSW	床面土器 4 床面土器 1 床面 床面土器 2 床面土器 6 検出面	3 12 2 18 5 1	42	土師器	壺	略完形	20.0	30.0	7.8	口縁：縦位ハケ目→ヨコナデ 体：縦位ハケ目→縦位ミガキ 底：木葉痕	口縁：横位ミガキ 体：横位ハケ目	密	非ロクロ	24
26	30	38	SI07	床面	床面土器 1	1	1	土師器	坏	完形	8.4	-	4.8	（黒色処理不完全） 口縁～底：横位ミガキ	（黒色処理不完全） 口縁～底：横位ハケ目→ミガキ	密	非ロクロ	26
27	30	38	SI07	床面	床面土器 6	12	12	土師器	坏	略完形	16.0	-	5.4	口縁～底：横位ミガキ	有段内黒 口縁～体：横位ミガキ 底：ミガキ（一方向）	密	非ロクロ	27
28	30	38	SI07	床面	床面土器 2	1	1	土師器	高坏	略完形	13.0	<9.0>	<9.0>	坏：縦位ハケ目→横位ミガキ（6分割） 脚：段あり、縦位ハケ目	坏：横位ミガキ（4分割） 脚：横位ハケ目	密	非ロクロ	28
29	30	38	SI07	床面 床面	床面土器 5	17 2	19	土師器	壺	頸～底部	-	<8.6>	(17.1)	口縁：ヨコナデ、段状の凹み 体：縦位ハケ目→縦位ミガキ 底：中央部にハケ目	体：横位ハケ目	密	非ロクロ	29
30	30	38	SI07	QNW 床面	床面土器 3	16 9	25	土師器	甕	口縁～体部	18.8	-	(29.5)	口縁：ヨコナデ→横位ミガキ 体：縦位ハケ目→縦位ミガキ	口縁：横位ハケ目→横位ミガキ 体：横位ハケ目	密	非ロクロ	30
31	30	38	SI07	床面	床面土器 4	87	87	土師器	甕	口縁～体部	19.8	-	(24.2)	口縁：縦位ハケ目→横位ミガキ、 体:縦位ハケ目→横位ミガキ（粗）	口縁：横位ハケ目→横位ミガキ 体：横位ハケ目→縦位ミガキ（粗）	密	非ロクロ	31

第４表　石器観察表（７・32 ～ 35）

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	種類	石質	産地	残存部位	計測値（cm）			重量（g）	自然面	備考	登録No.
									長さ	幅	厚さ				
7	19	35	SI02・QNW	埋土上位（To-a 下黒褐色土）	石鏃	頁岩	北上山地		3.7	1.0	0.4	1.2			32
32	21	35	SI03	カマド礫１（図有り）	方割石	細粒閃緑岩	北上山地		13.4	6.3	4.9	577.1	有		37
33	23	36	SI04	床面・石No. 2	方割石	砂岩	北上山地（野田周辺）		7.4	5.5	4.5	203.8	有		40
34	26	37	SI05	床面・礫No. 2	磨石	細粒閃緑岩	北上山地		11.9	10.9	2.9	579.3	有		43
35	34	34	SK70	埋土	磨石	斑岩	北上山地	半欠	(5.6)	(12.4)	(5.1)	345.4	有		51

第５表　金属製品観察表（36・37）

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	種類	残存部位	計測値（cm）			重量（g）	材質	備考	登録No.
							長さ	幅	厚さ				
36	21	35	SI03・QSE	床面 遺物ポイントあり	円環状鉄製品	完形	2.6	3.2	1.1	4.5	鉄	刀子の一部か	49
37	21	35	SI03・QSW 西壁際	埋土下位（黒褐色土）	鉄鏃か	柄のみ	(5.0)	1.4	1.1	3.3	鉄		50

第６表　貝類観察表

№.	日付	出土地点	層位	種類	重量（g）	備考
1	2014/9/19	SI07	埋土上位	ニシキウズガイ科 イガイ科 アサリ	31.1	廃絶後に一括廃棄

第７表　炭化物観察表

番号	日付	出土地点	層位	内容	樹種	重量（g）	備考
1	2014/9/4	SI01	床面	炭№.1		62.0	
2	2014/9/4	SI01	床面	炭№.2		30.1	
3	2014/9/4	SI01	床面	炭№.3		62.4	
4	2014/9/4	SI01	床面	炭№.4		23.1	
5	2014/9/11	SI04	床面	炭№.1		116.6	
6	2014/9/11	SI04	床面	炭№.2		98.7	
7	2014/9/11	SI04	床面	炭№.3	クリ	407.2	樹種同定試料１
8	2014/9/19	SI05	床面	炭№.1	クリ	178.6	樹種同定試料２
9	2014/9/19	SI05	床面	炭№.2		22.0	
10	2014/9/19	SI05	床面	炭№.3		19.4	
11	2014/9/19	SI05	床面	炭№.4		309.0	
12	2014/9/24	SI05	床面	炭№.5		96.0	
13	2014/9/24	SI05	床面	炭№.6		16.3	
14	2014/9/24	SI05	床面	炭№.7		7.7	
15	2014/9/24	SI05	床面	炭№.8		47.9	
16	2014/9/24	SI05	床面	炭№.9		42.6	
17	2014/9/24	SI05	床面	炭№.10		118.7	
18	2014/9/24	SI05	床面	炭№.11		150.7	
19	2014/9/24	SI05	床面	炭№.12		44.3	
20	2014/9/24	SI05	床面	炭№.13		136.6	
21	2014/9/24	SI05	床面	炭№.14		10.1	
22	2014/9/24	SI05	床面	炭№.15		65.7	
23	2014/9/24	SI05	床面	炭№.16		46.0	
24	2014/9/24	SI05	床面	炭№.17		52.6	
25	2014/9/24	SI05	床面	炭№.18		32.0	
26	2014/9/24	SI05	床面	炭№.19		82.2	
27	2014/9/24	SI05	床面	炭№.20	コナラ属コナラ節	272.7	樹種同定試料３
28	2014/9/24	SI05	床面	炭№.21		27.8	
29	2014/9/24	SI05	床面	炭№.22		114.9	
30	2014/9/24	SI05	床面	炭№.23		25.6	
31	2014/9/19	SI07	床面	炭№.1	コナラ属コナラ節	677.4	樹種同定試料４
32	2014/9/19	SI07	床面	炭№.2		701.6	
33	2014/9/19	SI07	床面	炭№.3		1532.4	
34	2014/9/19	SI07	床面	炭№.4		288.5	
35	2014/9/19	SI07	床面	炭№.5	トネリコ属	276.5	樹種同定試料５
36	2014/9/19	SI07	床面	炭№.6		197.4	
37	2014/9/24	SI07	カマド	炭№.1		5.5	

Ⅴ　自然科学的分析

1　放射性炭素年代測定（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

（1）測定対象試料

上泉沢遺跡は、岩手県九戸郡野田村大字野田第 12 地割 4-1 ほか（北緯 40° 06′ 38″、東経 141° 48′ 28″）に所在する。測定対象試料は、竪穴住居跡の床面から出土した炭化材 5 点である（表 1）。

試料が出土した竪穴住居跡の時期は、出土遺物に基づき古墳時代末（7 世紀）と推定されている。

（2）測定の意義

試料が出土した住居跡の構築年代を明らかにする。

（3）化学処理工程

（a）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（b）酸 - アルカリ - 酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。

（c）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（d）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（e）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（f）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（4）測定方法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（5）算出方法

（a）δ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表 1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（b）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は δ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（± 1 σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

（c）pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭

素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

（ｄ）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1 σ = 68.2%）あるいは２標準偏差（2 σ = 95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C 補正を行い、下１桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、14C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

（６）測　定　結　果

測定結果を表１、２に示す。

試料５点の ^{14}C 年代は、1560 ± 20yrBP（KIZ-5）から 1280 ± 20yrBP（KIZ-4）の間にある。暦年較正年代（1 σ）は、最も古い KIZ-5 が 431 ～ 544cal AD の間に２つの範囲、最も新しい KIZ-4 が 683 ～ 765cal AD の間に２つの範囲で示される。SI05 と SI07 では各２点測定され、SI05 の２点はほぼ同年代を示したが、SI07 の２点の間には年代差が認められる。出土遺物による推定に対して、KIZ-1 ～ 4 は整合する値であるが、KIZ-5 は古い値となった。

試料の炭素含有率はすべて 60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表１　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C(‰)(AMS)	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC(%)
IAAA-142927	KIZ-1	SI04 竪穴住居・床面 炭 No.3	炭化材（木炭）	AAA	-25.62 ± 0.26	1340 ± 20	84.63 ± 0.24
IAAA-142928	KIZ-2	SI05 竪穴住居・床面 炭 No.1	炭化材（木炭）	AaA	-20.53 ± 0.35	1320 ± 20	84.88 ± 0.22
IAAA-142929	KIZ-3	SI05 竪穴住居・床面 炭 No.20	炭化材（木炭）	AAA	-25.29 ± 0.25	1310 ± 20	84.94 ± 0.24
IAAA-142930	KIZ-4	SI07 竪穴住居・床面 炭 No.1	炭化材（木炭）	AAA	-22.4 ± 0.43	1280 ± 20	85.23 ± 0.22
IAAA-142931	KIZ-5	SI07 竪穴住居・床面 炭 No.5	炭化材（木炭）	AAA	-24.53 ± 0.26	1560 ± 20	82.39 ± 0.23
							［#7123］

表２　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

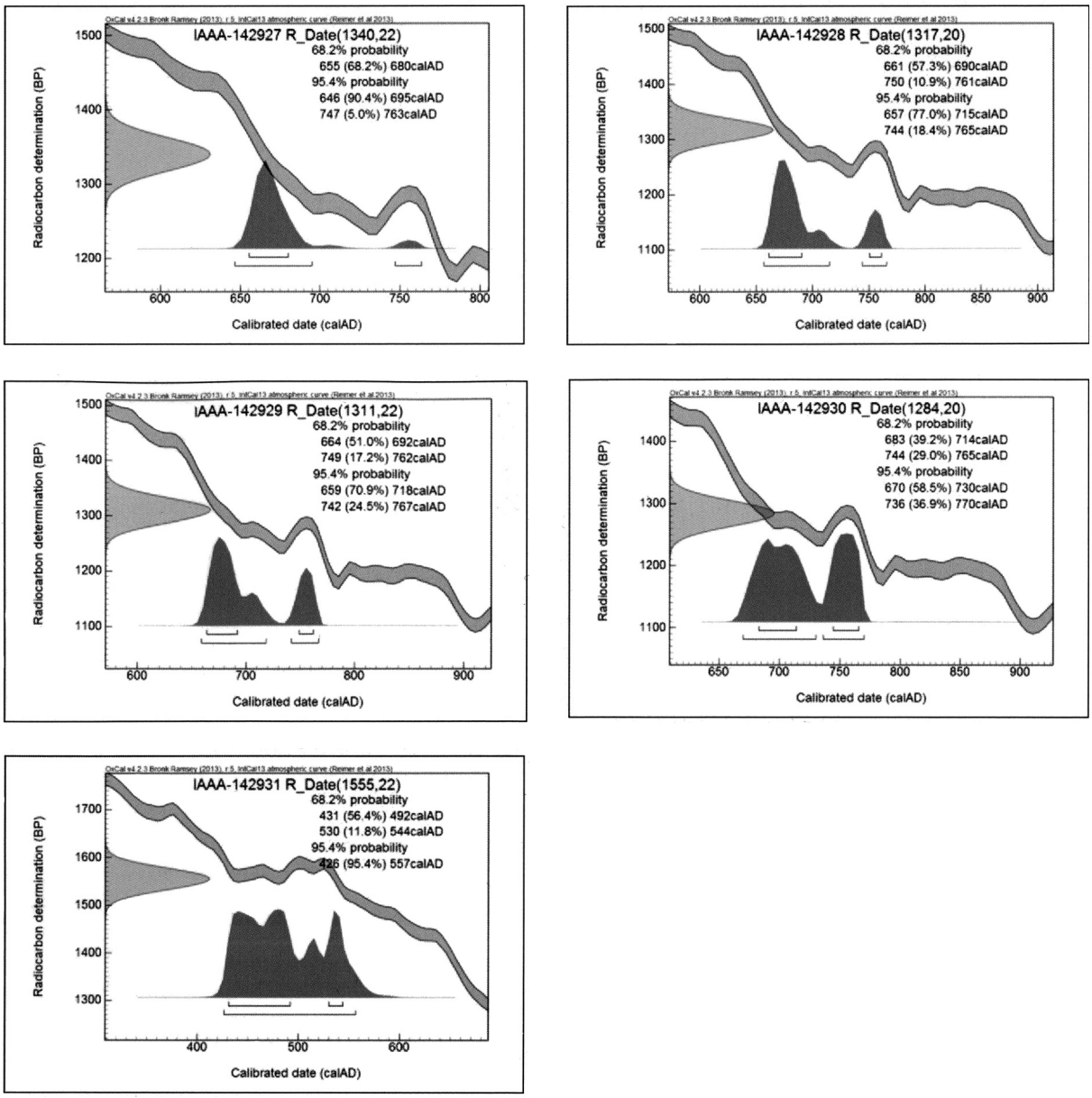
測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-142927	1350 ± 20	84.52 ± 0.23	1340 ± 22	655calAD - 680calAD(68.2%)	646calAD - 695calAD(90.4%)
					747calAD - 763calAD(5.0%)
IAAA-142928	1240 ± 20	85.66 ± 0.21	1317 ± 20	661calAD - 690calAD(57.3%)	657calAD - 715calAD(77.0%)
				750calAD - 761calAD(10.9%)	744calAD - 765calAD(18.4%)
IAAA-142929	1320 ± 20	84.89 ± 0.24	1311 ± 22	664calAD - 692calAD(51.0%)	659calAD - 718calAD(70.9%)
				749calAD - 762calAD(17.2%)	742calAD - 767calAD(24.5%)
IAAA-142930	1240 ± 20	85.68 ± 0.21	1284 ± 20	683calAD - 714calAD(39.2%)	670calAD - 730calAD(58.5%)
				744calAD - 765calAD(29.0%)	736calAD - 770calAD(36.9%)
IAAA-142931	1550 ± 20	82.47 ± 0.22	1555 ± 22	431calAD - 492calAD(56.4%)	426calAD - 557calAD(95.4%)
				530calAD - 544calAD(11.8%)	
					［参考値］

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363



［図版］暦年較正年代グラフ（参考）

２　樹　種　同　定

株式会社古環境研究所

（１）は　じ　め　に

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能である。本報告では、上泉沢遺跡より出土した炭化材について、木材組織の特徴から樹種同定を行う。

（２）試 料 と 方 法

試料は、上泉沢遺跡より出土した焼失した竪穴住居（SI04 住、SI05 住、SI07 住）の部材の炭化材５点である。試料の詳細は、結果表に記す。

樹種同定の方法は、以下のとおりである。まず、試料を割り折りして新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の断面を作製した。同定、落射顕微鏡によって 50 ～ 1000 倍で観察し、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

（３）結　　果

表１に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表１　上泉沢遺跡における樹種同定結果

No.	袋番号	出土地点	層位	内容	結果（学名／和名）	
1	7	SI04 住	床面	炭№３	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	クリ
2	8	SI05 住	床面	炭№１	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	クリ
3	27	SI05 住	床面	炭№20	Quercus sect. Prinus	コナラ属コナラ節
4	31	SI07 住	床面	炭№１	Fraxinus	トネリコ属
5	35	SI07 住	床面	炭№５	Quercus sect. Prinus	コナラ属コナラ節

１）クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　№１、№２

横断面では年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。放射断面では、道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。接線断面では、放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の特徴よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ 20m、径 40cm ぐらいであるが、大きいものは高さ 30m、径２m に達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

２）コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科　№３、№５

年輪のはじめに、大型の道管が１～数列配列する環孔材である。晩材部では、薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、

放射組織は平伏細胞からなる。放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ 15m、径 60cm ぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

３）トネリコ属　Fraxinus　モクセイ科　№４

年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管がほぼ単独で１～３列配列する環孔材である。孔圏部外では、小型でまるい厚壁の道管が単独あるいは放射方向に２～３個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性放射組織型で、１～３細胞幅である。

以上の特徴よりトネリコ属に同定される。トネリコ属にはヤチダモ、トネリコ、アオダモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉または常緑の高木で、材は建築、家具、運道具、器具、旋作、薪炭など広く用いられる。

（４）所　　見

同定の結果、上泉沢遺跡の竪穴住居部材の炭化材は、クリ２点、コナラ属コナラ節２点、トネリコ属１点であった。

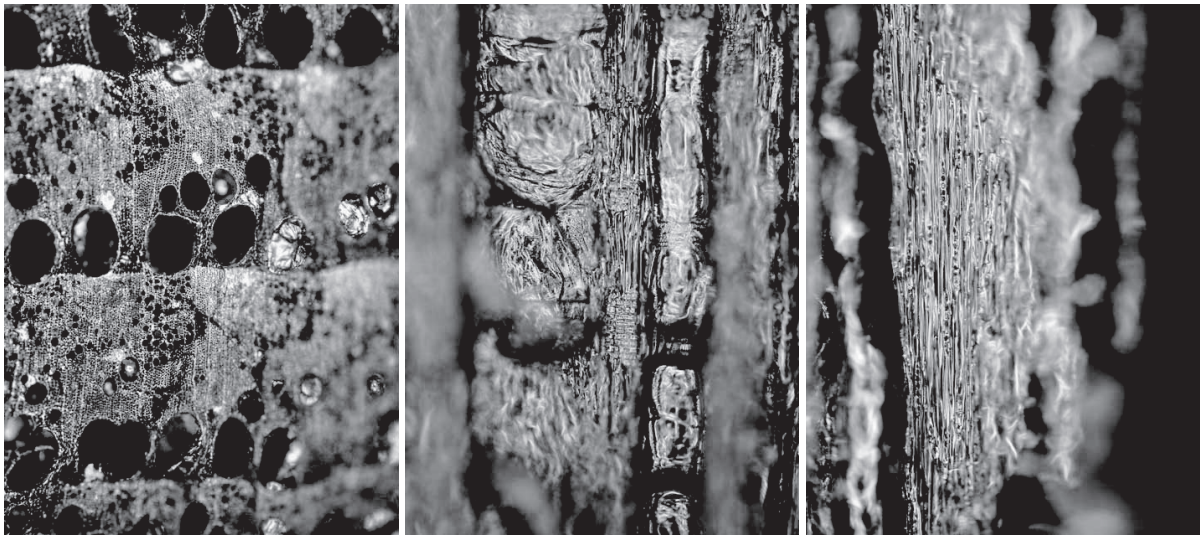
クリは、№１（SI04 住 床面 炭№３）、№２（SI05 住 床面 炭№１）の炭化材であった。クリは重硬で保存性が良い材で、縄文時代から柱などの建築部材としての利用が多く、比較的よく使われる樹木である。温帯に広く分布する落葉広葉樹であり、暖温帯と冷温帯の中間域では純林を形成することもある。乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。コナラ属コナラ節は、№３（SI05 住 床面 炭№20）、№５（SI07 住 床面 炭№５）の炭化材であった。コナラ属コナラ節の木材は強靭で弾力に富み、建築材としてよく用いられる。コナラ属コナラ節は、温帯を中心に広く分布する落葉広葉樹で日当たりの良い山野に生育する。ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素、二次林要素でもあるコナラや、海岸沿いで生育するカシワなどが含まれ、これらは当時、本遺跡周辺にも生育し分布していたと考えられる。トネリコ属は､№４（SI07 住 床面 炭№１）の炭化材であった。トネリコ属は、概して強靭で堅硬な材であり、従曲性が非常に大きく、割裂は容易である。トネリコ属は、河川や谷あいの湿地に生育し、温帯を中心に広く分布する。湿地林を形成する樹種であり、湿地や湿原の環境が示唆される。

いずれの樹種も温帯に分布する落葉広葉樹で、本遺跡の周辺地域に分布していたと考えられる。クリやコナラ属コナラ節は相対的に乾燥した台地上などに生育し、二次林要素でもある。トネリコ属は陽当たりのよい湿潤な谷筋や斜面に生育する。これらの樹木は遺跡周辺の植生を反映していると考えられ、地域的な用材よってもたらされたと考えられる。

参考文献

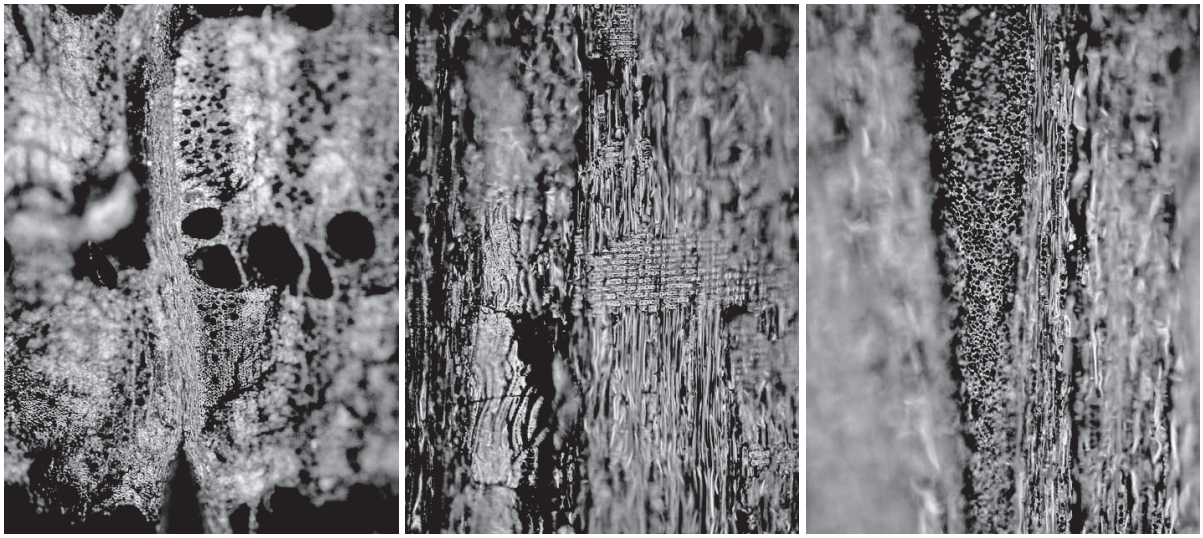
伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学，雄山閣，p.449.
佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296.
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242.

上泉沢遺跡の木材



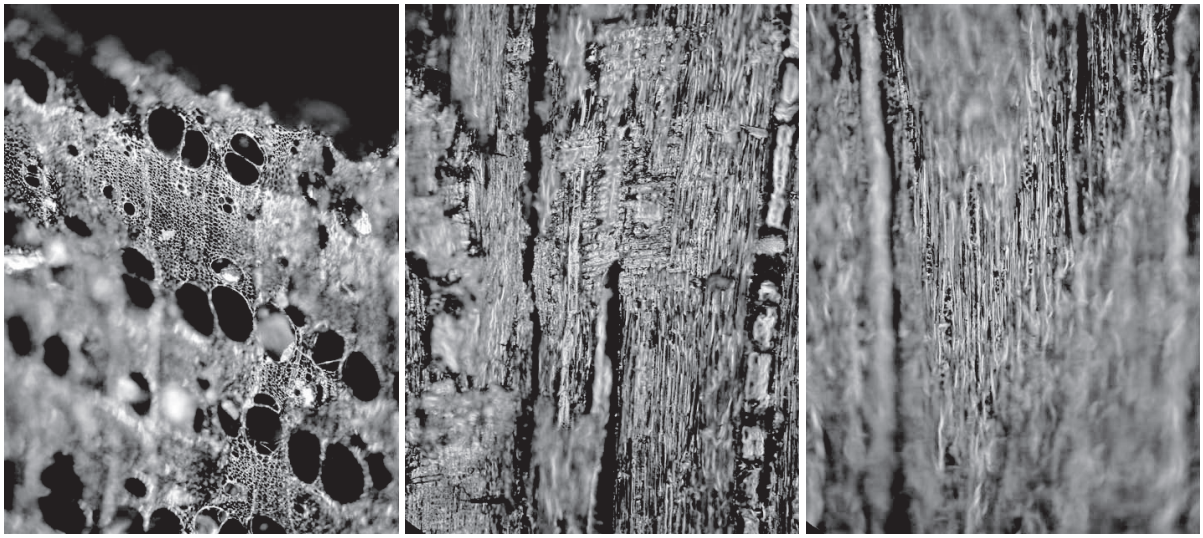
横断面　0.4mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

1．クリ　№1　袋番号7　SI04住　床面　炭№3



横断面　0.4mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

2．コナラ属コナラ節　№3　袋番号27　SI05住　床面　炭№20



横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

3．トネリコ属　№4　袋番号31　SI07住　床面　炭№1

3　貝　類　同　定

株式会社古環境研究所

（1）は　じ　め　に

日本の国土は火山灰性の酸性土壌に広く覆われ、動物遺存体の保存状態には恵まれないのが一般的である。そのため動物遺存体が出土するのは貝塚、石灰岩地帯の洞穴や岩陰などが代表的で、近年では湿地環境の遺跡や遺構からも多くの動物遺存体が報告されている。

（2）試　　料

試料は、古墳時代末以降の住居址 SI07 から出土した貝類及び貝類破片である。

（3）方　　法

同定は、試料を肉眼で観察し、現生標本、貝類図鑑（奥谷 2000）を参考に、形態的特徴を比較して行った。

（4）所　　見

同定結果を表１示す。

表１　上泉沢遺跡における貝類同定結果

遺構名	検出層位	結果（学名／和名）		個数	左右	その他破片
SI07 住居	埋土上位一括	Gastropoda	腹足綱	5		
		Trochidae	ニシキウズガイ科	1		31.1g
		Bivalvia	二枚貝綱	1	左	
		Mytilidae	イガイ科	3	右 2、左 1	
		Ruditapes philippinarum	アサリ	1	左	

腹足綱のニシキウズガイ科が１点、科・属・種不明の腹足綱が５点同定された。ニシキウズガイ科は、コシダカガンガラ、クボガイなどの可能性がある。また、二枚貝綱のイガイ科（右２左１）３点、アサリ（左）１点、科・属・種不明（左）の二枚貝綱１点が同定された。

参考文献

奥谷喬司 2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会

上泉沢遺跡の貝類

1　ニシキウズガイ科　　2　イガイ科（右・左）　　3　アサリ（左）

5.0mm　　5.0mm　　5.0mm

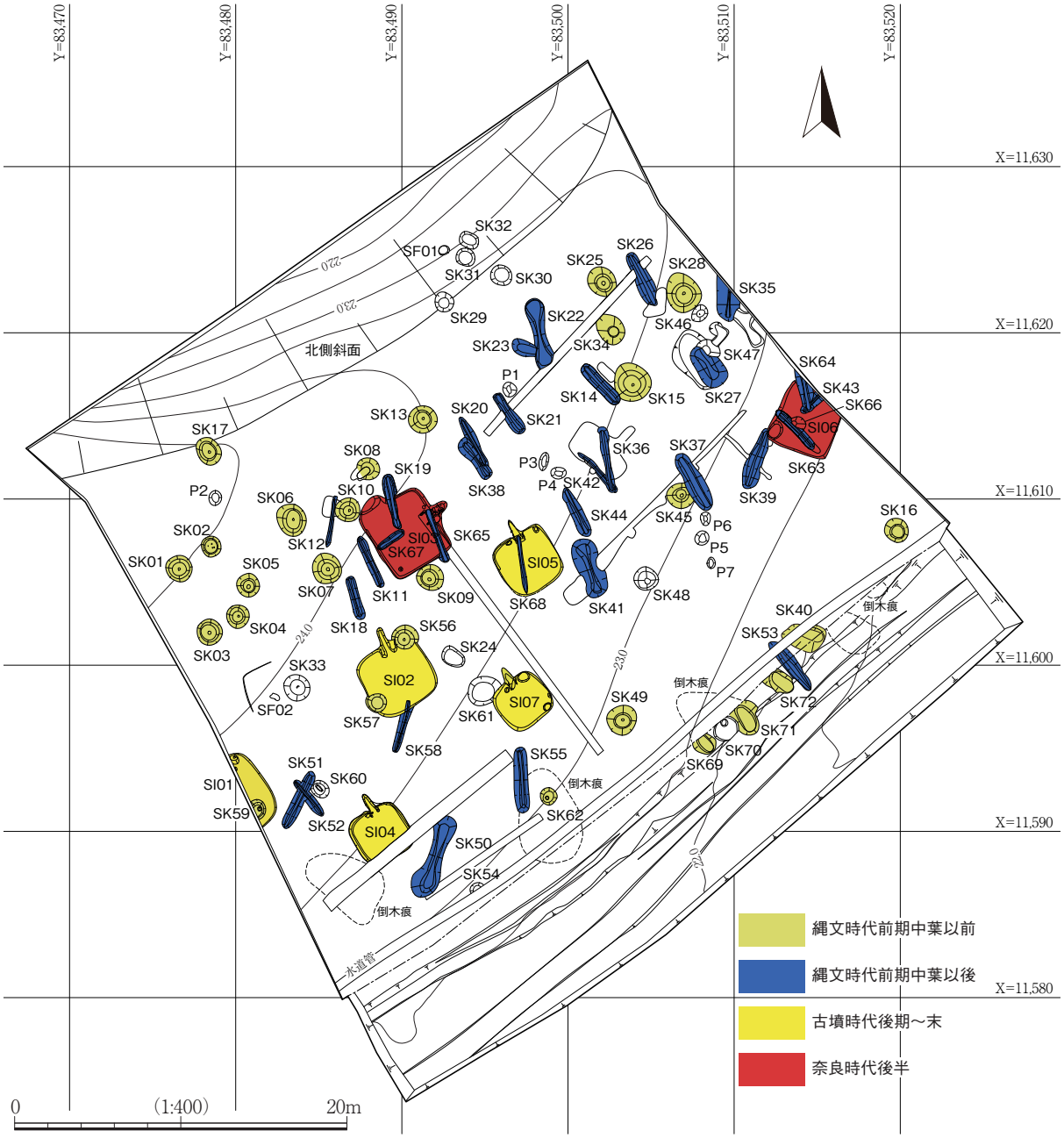
Ⅵ　総　　括

平成26・27年度の２カ年の調査から、縄文時代の陥し穴状遺構60基（円形29基・溝状31基）、古代の竪穴住居跡７棟・土坑12基・焼土２基・ピット７基が確認され、各遺構などを中心に土師器大コンテナ２箱、縄文・弥生土器ビニール１袋、石器小コンテナ１箱、金属製品２点、コハク２点、貝殻ビニール１袋が出土した。

本章では、遺構・遺物について総括を行い、いくつかの特記される事項について記載する。

１　縄　文　時　代

縄文時代の陥し穴状遺構は計60基検出したが、形状により２つに分けられる。黄緑色で示した円形基調の陥し穴状遺構は29基確認している。いずれも遺物は伴っていないが、埋土上位の検出面付



第36図　時期別全体図

近に約5,500年前に降下した十和田中掫テフラを堆積していることから、降下した縄文時代前期中葉以前にはすでに開口して廃絶→埋没過程にあったと判断できる。また、溝状基調の陥し穴状遺構は31基確認しており、先述した円形基調の陥し穴状遺構に切られる事例が、本調査のほかに平成26・27年度に調査を行った野田村中平遺跡からも確認されていることから、十和田中掫テフラ降下後の縄文時代前期中葉以後と捉えられる。また、溝状基調にはSK22・41・50のように両端が土坑状に膨らむ形状やSK20・38、36・42、51・52のように重複する例が認められることから、やや時期幅がある可能性が指摘できる。

２　古　　代

ここでは、古代の竪穴住居跡から出土した遺物について触れる。出土した土器を遺構ごとにみると、３時期に分けることが可能である。

１期目は、SI04・05・07の時期で、SI04の内黒有段坏や（16）体部上半に最大径を持つ底径が小さい甕（17）、SI05の体部上半～中央に最大径を持つ壺（24・25）、SI07の口端が直立気味で内面底に沈線が引かれるのみの内黒有段坏（27）や直線的に開く高坏（28）、最大径が口縁にある体部の長い甕（30）から、７世紀中葉～後半の古墳時代後期～末が考えられる。ちなみに、年代測定ではSI04が655～680calAD（１σ･68.2%）､SI05が661～690calAD（１σ･57.3%）･664～692calAD（１σ・51.0%）、SI07が670～730calAD（２σ・58.5%）の値が得られており、土器の年代とも調和的である。

２期目は、SI03の時期で、出土土器が体部に縦方向のケズリ痕を残す短胴甕２点とナデのみで仕上げられる壺、底部張り出しが大きい壺か甕片のみであるため、時期特定は難しいが８世紀後半の奈良時代後半と考えたい。また、遺物は出土していないが同形状のSI06もこの時期に含めたい。

３期目は、SI01の埋土上位から出土した土器の時期で、口縁がやや外反気味となるロクロ成形の内黒坏（８）から、９世紀代の平安時代が推定される。ただし、SI01の埋土上位に堆積した十和田ａテフラ降下後の流入土に含まれていたため、SI01自体は堆積土の比較から１期目に属すると考えたい。

各遺構の十和田ａテフラ堆積の位置を見ると、SI01・02・04・05・07は埋土上位に堆積が認められるのに対して、SI03は埋土下位に流入している。このことからも、廃絶後間もない時期にテフラが降下したか、遺構が埋まるほど土が溜まってから降下したかの違いによって、先述の時期区分が裏付けられると考えられる。

おわりに

今回の調査から、縄文時代の狩り場と古代の集落が営まれていたことが分かった。特に、古墳時代後期～末の竪穴住居跡群は、近隣に点在する古館山遺跡や蒲沢遺跡とともに三陸沿岸北部の該期を考える上で良好な資料となろう。

引用参考文献

宇部則保　2014　「糠部沿岸の７～８世紀の土器と集落」『北三陸の蝦夷・蕨手刀』岩手考古学会第46回研究大会資料
野田村教育委員会　2015　『蒲沢遺跡発掘調査報告書』野田村埋蔵文化財調査報告書第５集
羽柴直人　1995　「岩手県九戸地方のロクロ使用以前の土師器」『紀要』ＸＶ
（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
平凡社　1990　『岩手県の地名』
米田　寛・佐藤　剛　2016　「岩手県域の太平洋沿岸中部地域における６世紀から８世紀の土器様相について」『紀要』
第35号　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

写 真 図 版

SI07出土貝殻

遺跡遠景（西から）

調査区全景（直上・上が北）

写真図版1　遺跡遠景・調査区全景

平成26年度調査区全景（南から）

平成27年度調査区全景（西から）

写真図版２　平成26・27年度調査区全景